

330
d
484



始





著 三 德 田 福 士 博 學 法

集 全 學 濟 經

集 六 第

經濟政策及時事問題

廉 刷 版

分 第
冊 二

330
484



1343

更らに又獨逸全滅の爲めと號して、米國が大げさな軍國化を進めることは、世界の平和の上から甚だ希はしからざること、云はねばならぬ。是が爲めに危険を最も多く感ずるは我々日本人である。對獨の爲と稱して充實せられる米國の軍備は、其完成の曉は果して世界平和の保障となるか、又は其反對に世界平和のメネース(脅迫)となるかと云へば、我々は後者の方がより多くの『確らしさ』を有するものと考へるのである。充實した曉の米國の軍勢は無爲にして終るものではあるまい。其最も活躍に便なる方面に活動し來るものと思ふ可きである。活動に最も便あり最も多くの『確らしさ』のあるは、南米であり東亞細亞である。南米の小弱國と我日本とは最も多くの懸念を禁じ能はぬものである。我々は唯だ意氣地なく米國の軍備充實を羨むものではない。然し米國が今大規模の軍備擴張を實行する必要のないのに、之を取行することに對しては十分なる考慮を要する。何となれば我輩の信ずる所にては、日本は獨逸は勿論其他世界中何れの國とも、其が國の存立に必要な以上は敢て戦争を辭す可きではないが、獨り米國との戦争は極度まで之を避くるに勉めなければならぬ地位に立つて居るからである。國の存立の

爲めとして米國と戦へば、米國との貿易は杜絶し、其結果我國民の生活は極度の困難に陥る。獨逸と國交が絶えても、國民生活上忍ぶ可からざる底の損失は見て居らぬが、米國と國交絶てば、我々の日常生活は甚だしき困難に陥ることを免れぬ。在米在哇の同胞の困難は言ふまでもないことである。即ち米國との關係は絶對的に不可忍に立到るに非ざる限り、決して之を絶つ可きではない。餘程の辛抱を敢てしても、唯戦争を避け得んが爲めに我邦は全力を盡さねばならぬ。然るに其相手たる米國が好戰國となる事は實に絶大の危険を意味するものである。最も冀はしからざる運命に日本を導くもので、其れこそ日本國存立上の重大事である。米國の軍國化の口實を奪ふだけの爲めには、今次の戦争停止は緊要の一事である。獨り日本のみでない、南米の諸小國、亞細亞の諸國、何れも此點に於ては共通の利害關係を有つものである。今次戦争の停止によりて此危険を何分にも防ぐことは、世界人類の大なる部分の利益が之を要求することゝ云ふ可きである。而して米國の國民に取りても、其軍國的迷夢より覺むることは、今の秋に方りて甚だ必要である。言論の自由の極端に制限せられ、大學教授が一回の查問を経ずして、其言論の爲

めに解職せられ、或は演説會場より直ちに獄に投ぜられ（コレハ近頃有名な經濟學者ニアリング・スコット教授の蒙つた運命である）、自由平和を國是とする米國、今や化して一大專制國、一大壓制國となつて居るのは、米國民の爲めに實に同情に堪へぬ事である。ウキルソンを人類の解放者だと崇拜する人々は、他面に於て米國人が今やオートクラシの鐵鎖につながれつゝあることを知らないのである。現戦争の停止は米國々民其人の爲めにも緊要の要求たる可きである。

九

歐洲の國民は英國の魔術が張つた網に囚はれて居て、空想の夢から目覺めることの出來ぬ憐れなる状態にある。伊國人の如き其好適例と思ふ。軍國主義を滅ぼす爲めて空虚なる夢の爲めに、自ら却つて最惡の形に於ける軍國主義の鬼となつて居る。此迷夢を覺まし、世界の人類を、現戦争の悲惨から救ひ出すことを勉む可き人は、未だ歐米には出て來ぬ。實に氣の毒千萬な次第である。是れ豈日本が自主的に眞面目に熱誠を傾倒して

して居るは獨立國のまさに耻づ可き所である。日本自ら起つて戦争に終を告げしむる工夫にこそ心を用ゆ可きである。

ベテンと策略とにかけては、我政治家、我外交家は到底歐米人の足下にも及ばない。唯だ右の如く誠心誠意を以つて、一の策略なく、一の懸引なく、斷乎として自主的に世界平和戦争停止を主張する位のことは我政治家でも出來得ることゝ信ずる。乍去其爲めに、國民が一人の如くに一致して我當局者の後援とならなければ出來ぬ。即ち先づ國民中に此輿論を喚起することが第一の仕事であると信ずる。是れ我輩が此一文を公にする所以である。讀者讀書生午睡の囁言として一笑に附することなくんば幸なり。

附言。嘗て本誌(中外)に掲げた(拙論本書一の八)及『太陽』に寄せた「何の爲に戦ふ」(本書二の五)に對し畏友吉野法學博士及室伏高信君から懇切な反駁を賜つたが、其後の米國の行動は予輩に代つて十二分に兩兄に答を呈した次第であると信ずるから、無用の答文を繰返へす事を省く。而して本論は右二文を延長したものであるから、序の折に兩兄が此文に一瞥を與へられて、卑見の存する所を取せらるゝことあらば光榮至極と存するものである。『ジアパン・アドヴァンティジャー』及『極東時報』の批評に對して答文を略する理由も粗同様

である。

殆んど凡べての國の凡べての政治家は嘘を平氣で吐くものであることは、右二拙文以後英國に於て、ロイド・ジョージが重大な虚言を吐いたとて大騒ぎをした事實——タイムスも之を傳へて居る——が、我輩の爲めに有力に裏書をして呉れた。如何に熱心なロイド・ジョージと雖ども、此一事は如何とも打消すことは出來ないのである。『予は大概な政治家は嫌いである、獨りロイド・ジョージに至つては、之を好愛することを禁ずる能はず』と『貧乏物語』の附録に於て告白して居らるゝ河上博士も、右の出來事には定めし痛く興を醒まされたことであらう。思ふに此次はウキルソンの番となるであらう。

||大正七年二月談話同三月『太陽』掲載||

七 對抗か順應か

||資本的侵略主義に抗し、眞正のデモクラシーを發揚せよ||

對抗と云ひ順應と云ふも、要するに程度の問題である。日本が如何に世界の大部分に拮抗して行かうと思つても、夫れが世界の大部分である以上は、全然之を拒否する事は不可能である。結局順應となる外に途は無からう。然し一切萬事を抛つて世界の大部分に順應する外は無いかと云ふに、夫れでは無論可けない。大體に就ては順應する外は無いにしても、日本は日本獨特の立場から順應しつゝも、亦之に對抗して行かなければならない。所で果して日本が世界の大部分に對抗して行けるか何うか、即ち可能不可能の問題が茲に起つて来る。又對抗して行くとしても、果して何の程度まで行くかといふ程度の問題も起つて来る。我輩は向後の日本は一方に於て資本的侵略主義に極力對抗すると共に他面佛蘭西と相並んで眞正のデモクラシー(舊式の其れを排斥して)を發揚することを以て、日本の使命であると信するものである。以下少しく略説を加へて見よう。

二

今度聯合軍が得た大勝利は、聯合國側の軍事上の勝利ではない事は、我輩が『勝者は誰か』に於て論じて置いた通りである。今次の戦争に勝つたものは實に獨逸の革命である。我邦には英米論者の口眞似をして、今回の世界戦争はオートクラシー對デモクラシーの戦であると言つたものが澤山あつた。従つて此の大勝利を觀てデモクラシーの萬歳を唱へて居る。獨逸を仆したものは確にデモクラシーではある。然しそれは決して英米論者の所謂デモクラシーでもなければ、従つて亦我邦識者の所謂デモクラシーでもない。英米論者の説くデモクラシーなるものは政治的のデモクラシーである。而して夫は資本主義のデモクラシーである。capitalistic political democracyである。而して之れがオートクラシーに勝つたのであるかと云ふに、決して左様ではない。獨逸に勝つたのはデモクラシーはデモクラシーだが、夫れは social democracy である。社會民主主義である。我邦の論者は此のソーシャルデモクラシーが勝つてばよいとは決して思つて居たのでは

あるまい。此ソシアリズムの勝利の爲めに萬歳を祝して居るのではあるまい。

所で新に起つて獨逸を仆したソシアリズムにしても、或は又從來の英米のキアピタリスチック・デモクラシーにしても、我輩は之を pseudo-democracy (假面的民主主義) と呼ぶに躊躇しない。何故なれば、ソシアリズムは即ちプロレタリア階級のみでモクラシーで全人民の其でないから、本當のデモクラシーとは云はれない。即ち彼等自らソシアリズムと云ふ形容詞を付けて居る。其意はプロレタリアン (第四階級的) と云ふことである。而して其手段は階級戦争である。即ち全デモスを二分して相争はしめようとするものである。他方に英米のデモクラシーは今日與へられた政治組織の上にてのデモクラシーである。而して今日與へられた政治組織は資本主義の組織である。他日或は變つて來るかも知れないが、現在のまゝでは全人民を包含したデモクラシーではない。所有階級のデモクラシーである。理論の上では全人民のデモクラシーと言つて居るけれども、夫れは畢竟抽象論で實際の事實は局部的のものである。

世界平和の克復は洵に結構で、又獨逸の軍國主義が仆れたのも洵に結構だけれども、それと共に我々は更に恐るべき強敵を迎へることになつたのを忘れてはならない。之れ我輩が世界文明の危機と叫ぶ所以である。我々は資本的侵略主義の極盛と、而して其反對毒たる社會民主主義に面せなければならぬのである。資本的デモクラシーは當然の結果として經濟的侵略主義である。もつと判り易く言へば海賊主義之である。我々は今プロレタリアの跋扈と海賊の跋扈との間に挟み討ちにならんとして居るのである。之れが近き將來の世界を脅かす危険である。日本は此大勢に對して唯順應するのみで済まされ得るか。一切萬事を抛つて順應すべきであるか。否斷じて否。我輩は曰ふ、日本は、否世界の全體は斷じて之れに對抗せなければならぬと。

三

平和克復後の世界の形勢は如何なるかと言ふに、英米は今度の拾つた勝利で益々資本的軍國主義、經濟的侵略主義を逞しうするであらう。之れは單なる想像ではない事實で

ある。既に其端緒は一昨年巴里に開かれた經濟會議に見出される。即ち戦後獨逸に對して大々的經濟戰を開始するといふのである。之れやがて海賊主義の進化したもので、之れによつて利するものは英國である。米國である。今や軍國的獨逸は噓れて世界の *balance of power* がなくなつた。獨逸のある間は此海賊主義に對抗して勢力の均衡が保たれて居たが獨逸がなくなつたので、世界は今やアングロサクソン人種の跳梁に委ねられんとしてゐる。日本が如何に海軍を擴張しても、夫れは鯨の齒軋りに過ぎず、逆も拮抗し得るものではない。其資本的軍國主義海賊主義は戰の上でなく、所謂經濟戰來らんとすと云ふ是れである。併し乍ら經濟戰とは虚名である。敵なき戰とは無意味である。畢竟は軍國主義オートクラシーを退治するといふ美名の下に、資本的侵略主義が今回の勝利に由つて完全に確保されるに至つたのである。ウエルソンの主張する海の自由は到底英國の贊成するものではない。之れ海賊主義が滅びぬ端的の證左で、海賊主義と海の自由とは到底相一致する事の出来ぬものである。

戦後獨逸が經濟界に大々的ダムピングをやるに相違ないから、今から大に其對應準備

をしなければならぬと言つて、人の好い日本を始め聯合諸國を誘つたのは、之れ實に資本閱が世界を恣に横行せんとする準備に外ならない。戦後獨逸がダムピングすることの無いのは判り切つた事實である。然るに我邦の識者學者、否専門の經濟學者の大多數が之れを受け賣りして、『戦争の經濟が終つて經濟の戦争が始まる。而して夫れは獨逸が戦時中に蓄積した物品をダムピングする事によつて其幕が切つて落される』と言つて居る。之れ大なる愚論で、久しい以前から我輩が駁撃を加へて已まなかつた處である。戦後のダムピングの可能を信ずるのは、獨逸を買被るの甚だしいもので、一方にあれ程戦争を続けながら、他方戦後ダムピングを試むる爲めに物質を蓄積し得る譯が無い。然るに我邦の論者は獨逸を憎み嫌つて居た者でも、その戦後のダムピングの可能を信じて疑はなかつた。之れ彼等が常に言ふところと反對に、心中恐獨病に罹つて居つたのと、他面獨逸國民の心事を誤解したのにと因る。獨逸は戦後のダムピングを用意しつゝ、戦争を戦つたものではない。曲直は別として、一旦戦争を始めたからは舉國一致で戦争に全力を傾注したのである。何の餘裕あつてか戦後の資本的侵略主義の準備を爲し得やうか。

之れ我輩が彼等論者に極力反對した論據である。然し我邦の學者殆ど其大半は我輩に反對であつた。而して今は何うであるか。獨逸には今やダムピングを行ひ得る餘力は一寸だつて無い。之れ獨逸の真相を了解する事が出来なかつたのにも據るが、他而又資本的侵略主義者が爲にする所あつて獨逸の怖るべきを描き出し、世界の人民を欺いた詭計にまんまと乗せられた愚論である。

四

獨逸のソーシアルデモクラシーが今日のやうな勝利を得た事は、我々の夢想だもしたかつた所である。此點に於て先見の明を誇り得る者は堺利彦君一人位であらう。今後の世界は此社會的デモクラシーと資本的デモクラシーとの對抗と云ふ大いなる危險に脅かされんとしつゝある。之に對して我日本は端的に如何に此間に處するかを考へねばならぬ。夫れには順應でなくして對應、否對抗的でなければならぬ。即ち資本的デモクラシーに對抗すると同時に、亦社會的デモクラシーに對抗して行かなければならぬ。

進記。河上博士は我輩が社會民主主義を減せざるべからずと主張すと云はる。此れは誣妄であること此の文を以て證せられたし。而して世界列國の中之れに對抗して、世界の文明を健全なる基礎の上に樹たしめる大使命を帯びて居る國は、日本と佛蘭西のみである。

佛蘭西も昔は侵略主義の國であつたが、ナポレオンの一敗後は國是を變て、殆ど全く非侵略的の國となつた。故に世界の經濟競争に於て退歩した姿のあるのは事實である。十九世紀は資本的侵略の時代である。此時代に非侵略的の佛國が人後に落ちたのは已むを得ない。然し夫れが今は大いによい事になつた。英國の資本的軍國主義に對して、武斷的并に經濟的軍國主義を以て勃興して來た獨逸は崩壊して社會民主國とならんとしつゝある。露西亞も亦社會民主國となつた。然し佛蘭西は假令戦争に滅茶苦茶に敗れても、獨逸若くは露西亞の様な革命は來ないと思ふ。獨逸に革命の起つたのは軍國主義、武斷的侵略主義の爲め斗りではない、資本的軍國主義に激勵せられたからである。否、武斷的軍國主義は資本的侵略主義の武器たるに過ぎない。然るに佛蘭西には其何れも無い。だから戦争に敗けても佛國民が社會民主化する形勢は起らないであらう。但し、

此點は或は我輩の佛國に對する知識不十分で判斷を誤つて居るかも知れない。若し然りとすれば佛蘭西も駄目であるが、今の所では軍國主義の國家でないから、其反動としての社會民主運動の力は微弱である。即ち英米の如き資本的侵略主義の國となる運命は來さうもなく、而して然る以上は社會民主國となることはあるまい。社會民主運動は資本的侵略主義に對する反對毒(antidote)である。毒を以て毒を制するものである。此二つの文明以外に獨特の佛蘭西文明なるものが依然として存して居るのは、世界の爲めに洵に慶ぶべき事である。今迄は英獨の間に挟まれて進出の困難なりし佛蘭西が、爾後大に活躍すべきは我輩の疑を容れぬ處である。

五

遠く佛蘭西と呼應して、世界の文明を其危殆の中から拯ふべき新しき力を有し、又之れに向つて努力すべき義務を有するのは我日本である。日本は如何なる意味に於ても過去に於ては侵略國ではなかつたし、又現に侵略國ではない。支那に於ける利權の獲得と

か西比利亞に於ける利權の獲得とかいふことがあつたが、あれは經濟的侵略主義の發露として見るも多寡が知れて居る。國民の心理としても、國政の方針としても、日本は斷じて侵略國ではない。故に之に對する反動として社會民主主義の國となることは斷じて無いと我輩は確信する。

日本に社會主義は起るであらう。然し夫れを起すべき最も有力なる動機たる、資本的侵略主義は殆どない。故に極めて近い將來に於て有力に起るべき具體的案が無い。資本的侵略主義にして行はれんか、如何に官憲が言論思想を壓迫し取締を嚴重にしても、其反對毒たる社會民主主義の大に勢力を得べきは必然であつて、逆も防ぎようが無いのである。だから社會民主主義の有力に起るを禦ぐ一番効果ある方法は、言論思想の壓迫や取締にあらず、日本が資本的侵略主義を採用せぬ事之れである。此外に途はない。是れは社會民主主義者自らも認める所と信ずる。かの西比利亞出兵とかバイカル奪取とかを主張する愚論家は、自ら識らずして最も有力なる社會民主主義擴張の傳道を爲しつゝあるものであると斷言して憚らない。蓋し危険なる思想家とは彼等愚論家の謂であ

る。

斯く言へばとて我輩は決して我邦に富の分配の不公平が無いと云ふのでは無い。又我邦に社會問題が無いと云ふのではない。然し社會民主々義は是等ばかりから起るのではない。歐米諸國が常に社會主義に手古摺つて居るのは、畢竟資本主義の代償として甘受せねばならぬ所以に外ならぬ。英國の如き大資本主義の國では、社會主義さへ起らなければいゝがといふ事にのみ屈託して居る。ロイド・チヨーチズムが盛んに行はれて居るのは英國の大いに進歩した證據だか、然し其大部分は資本的侵略主義の生産費と看做すべきである。資本的侵略主義を全く捨てれば、大袈裟にロイド・チヨーチズムを行ふことはあるまい。反對に資本的侵略主義を行つて居ては、如何に旺んにチヨーチズムを施しても偏に足らざるを憂ふるの外は無い。黒岩周六氏の言葉に倣つて言へば、ロイド・チヨーチズムは或意味で蛭蝮蛇である。資本的侵略主義といふ蛇を吞んで苦しくて堪らず、チヨーチズムといふ蛭蝮蛇を吞んだが、腹具合は依然として宜くならない。結局は社會民主々義と云ふ反對毒を吞む外はないだらう。我輩が會て河上博士にもう大抵

ロイド・チヨーチに興を醒まされたであらうと言つたのも一面此意味を含んで居る。斯う云つたからとて、我輩は社會政策が不必要であるといふのでは無い。唯資本的侵略主義をやりつゝ社會政策を行つたつて、際限が無いといふ事を力説せんとするのみである。獨逸の國家社會主義なるものも同じ筆法である。獨逸帝國が出来て極力經濟的侵略主義を行ひ初めたから、其代償として是非盛んに國家社會主義を行ふ必要が起つたのである。故に獨逸に於ける社會政策は最早行詰りに成つたとは十數年來我輩の唱へて居た所である。然るに今度の革命は此問題を一掃した。少くとも今日までの獨逸の社會政策なるものは社會民主國たる獨逸に於ては無意味となつたは疑ふ可からざる所である。

六

今度の勝利でデモクラシー萬歳と云ふ事になり、此大勢に日本も順應して行かなければならぬといふ議論は一應尤もであり、而して他面に於て社會政策（反對毒として）な

い)を大に行はなければならぬことも勿論であるが、然し我々は何よりも先に我々の立脚地を熟々考へて観なければならぬ。今度勝たデモクラシー即ちソールデモクラシーが入つて来るのは困るが、資本的侵略主義の入つて来ることは更に更に大に危険である。資本的侵略主義が入つて来れば、其の反對毒たる其代價たる其生産費たる社會民主主義の大に盛んになることは火を賭るよりも明白な事實である。されば我々は全然新たな立場から、我々の主張する社會政策、我々の主張するデモクラシーの出發點及び到着點を考へ、而して仔細に其内容を吟味しなければならぬのである。

新しい意味のデモクラシーとは即ち言葉の本義の要求する通り、全人民真正にデモス全體を包含した所の眞箇のデモクラシーである。此デモクラシーは日本の國本を合理的に解釋すれば確に相合致するものである。英米の資本主義的デモクラシーや獨露の勞働階級のみを認めたソールデモクラシーでなく、全國民を包含したデモクラシーである。而して夫れは如何なる意味に於ても侵略的であつてはならぬ。武斷的に侵略主義であつてはならぬ斗りでなく、經濟的にもまた侵略的であつてはならぬのである。

日本が如何に侵略主義を執つても夫れは鱗の齒軋りに過ぎない。如何に海軍を擴張しても到底英米の海軍に拮抗すべくもない。如何に陸軍を充實しても、一度び英米の海軍に封鎖されば獨逸と同一の運命に陥らざるを得ない。大陸續きの獨逸ですら封鎖されては饑餓を免れる事は不可能であつた。況んや我邦の如き四面環海の一島國では、如何に軍器糧食を自給自足し得るにしろ、一朝封鎖されば手足の出しようがない。だから我邦が武斷的侵略主義を取つても全く駄目である。官僚軍閥の徒が如何に苦心努力するとも、其れは出來つこのない相談である。

武斷的侵略主義の起る事は不可能にしても、尙ほ茲に夫れより迥に恐ろしい經濟的侵略主義資本的軍國主義の邪道が横はつて居る。此頃多く發表される戦後の經濟論や戦後の日本國是論を観るに、軍事上の戦争は今や漸く其終局を告げたが、戦後の世界には平和の戦争が來らんとして居るから、我邦も之に應ずる準備をせねばならぬと主張して居る。即ち我邦は戦後如何にも資本的に武装した侵略國となる外に途が無いやうに説く者が多い。我輩は之れを最も大いなる危険思想と思ふのである。日本に於ては社會主

義が危険思想となる虞は斷じて無いと吾輩は信ずる。學理に基かぬ社會主義論などは少しも恐るゝに足りない。學理に基いた社會主義なら學理を以て説伏することが出来る。思想は思想を以て、言論は言論を以つてのみ打ち勝ち得べきである。他に之に打ち勝つ武器は無い。近頃永田秀次郎氏は日本の國本を危くするデモクラシーは一つもないと言はれたさうであるが、我輩も永田氏の口吻を眞似て、日本の國本を危くする社會主義は一つもないと斷言して憚らない（但し日本が資本的侵略國となれば、社會主義は此侵略國に對しては危険思想となるは勿論である）。之に反して我國本を危くする者は實に資本的侵略主義の傳道である。此資本的侵略主義の傳道こそ如何にも尤もらしい議論で、物事も深く考へる習慣の無い人達を捲き込みに極めて都合の好いお爲ごかしの獨逸などに於て石炭山の所有者が世界に事を起して石炭の賣れ行きを増進させんが爲めに、私かに金を散じて外交上の問題を繁くさせるに努めたと同じく、日本が經濟的侵略主義を執る事は假令不可能であつても、此主義を傳道してさへ居れば資本家は利益を受

ける故に彼等は喜んで其の傳道に力でも資しても人でも供給するだらう。之れ程怖るべき危険はない。

殊に近來成金が跋扈して、高い月給を出して官吏の古手や思想の行き詰りになつた學者をどん／＼買ひ入れる。然るに世間では彼等の立場を區別しないで、相變らずの學者相變らずの識者と信ずるを好い事にして其肩書を振舞はし、經濟的軍國主義を鼓吹するものが起るかも知れない。否現にその若干の例を我輩は知つて居る。實に危険恐るべしである。何々博士の戦後經濟論などときまことしやかに振れ出すと、聞く聴衆は眞面目の學理に基ける議論と思ふが、何ぞ知らん其れは成金の番頭として資本階級の利益を擁護する資本的軍國主義の説法であらうとは。我輩は戦後機會のある毎に斯くの如き危険論の撲滅に力を盡くす心算である。

七

一事が萬事である。戦後日本にも經濟的軍國主義體の好い海賊主義の説法傳道が大

に起るかも知れぬ。世界の大部分に對應する前に、我々は先づ斯の如き愚論に對抗して、之が絶滅を圖らなければならぬ。幸に未だ成金が出來たと云つても小規模なもので、之を英米の夫れに比べれば多寡が知れたものである。完全な資本的軍國主義の洗禮を受けるまでに至つて居ない。又日本の政治も悉く之が爲めに毒されて了まつたと云ふのではないから、日本は先づ國內に起らんとする資本的軍國主義を驅逐しなければならぬ。而して夫れと共に世界に向つては、一方資本的侵略主義の横行に對抗し、他方全人民を包含する大デモクラシーの本源地として遠く佛蘭西文明と呼應して、一部のプロレタリアのみを本位とする社會的デモクラシーに對抗しなければならぬ。之れ即ち世界文明に貢獻する上に於て、我日本が荷へる最も重大なる使命であると思ふ。

八

斯くの如き大使令を果す爲めには、我々は先づ近頃流行の思想の統一とか、國體擁護とかいふ極めて危険有害なる頑迷思想を排除しなければならぬ。國民が先づ賢くならな

ければ、折角の大使命も之れを果す事は出來ない。國民を健全なる思想の上に置かなければ、到底何事も出來ない。國民を賢くし國民の思想を健全にするには、先づ言論思想の發揚を圖らなければならぬ。それには完全に言論思想の自由を保障しなければならぬ。政府當局者が露獨の過激思想の流入を禦ぐと稱して、言論思想に壓迫を加へたならば、却て恐るべき危険を促進する結果となる外は無い。言論は言論を以て思想は思想を以て戦ふべし。資本的軍國主義を退治すると云ふのは、政治的手段に據つて之を爲すの謂ではない。飽くまで言論思想の力に據つて撲滅すべきである。

健全なる思想健全なる言論を保障する爲めには、言論者に精神上並びに物質上の自由安全を確保せねばならぬ。例へば大學教授の身分の保障、其待遇を好くする如きは、此點から考て單なる物質的問題でなく、日本の使命を實現する上に重大なる意義のある事である。有識者、學者が續々相率ゐて成金の番頭手代となるのは、最も恐るべき事である。資本的侵略主義の大小の傳道者を人爲的に作り出すのを防ぐには、大學教授を始め言論思想の指導者たるものゝ地位身分を保障するのが第一に必要である。

九

然し日本がこの光榮ある大使命を果すのには獨力では出來ない。我等の信ずる處に據ると、世界の文明を其危機から救ひ得るものは世界列國の中で日本の外には唯佛蘭西あるのみ。我邦は一方國內に於て大に言論思想の自由安全を確保すると同時に、他方佛蘭西と呼應して共に人類文明の爲に盡くさなければならぬ。世界文明の健全なる發展を希望する上から云つて、今後佛蘭西の學問が我邦に大に勃興するのは極めて必要である。獨逸の今日までの學問は著るしく經濟的帝國主義侵略的世界政策の影響を受けて居た。獨逸の哲學がさうである。社會學がさうである。政治學がさうである。就中我輩の専門とする經濟學に至つては其影響が最も甚だしい。今は或意味で獨逸の經濟學の破産時代である。所謂經濟階段を巧妙に拵へて帝國に統一した國民經濟組織を、經濟生活發展の當然の歸結とした獨逸の經濟學は、畢竟海賊主義に對抗する獨逸の帝國的陸賊主義を一面に於て辯護する有力な學說であつた。夫れが今破産した。我々は或意味で

頼るべき師を失つた譯である。今後は獨力に日本の特別の使命を考へた學問を建設しなければならぬ。唯順應する計りではない。今後大に勃興すべき佛蘭西の學問と密接な關係を有つて、日本の立場から對應して行かねばならぬ。是れ吾輩が世界に於ける日本の使命なりと信ずる所である。

||大正七年十二月六日談話全八年一月「中央公論」掲載||

三 改造途上の世界經濟

||戰時及戰後の經濟問題||

一 英國中心の世界經濟と其改造

一 英國を中心とせる世界の貨幣經濟

此度の大戦争を中心として、其前後に於ける世界經濟の有様を述ぶるが本論の趣意である。戦前の世界經濟は英國を中心として成立つて居た。英國は其偉大なる資本の力を以つて世界の經濟を支配して居た。而して世界經濟の動源は英國の資本市場に在つた。故に話は先づ英國と其金融市場のことから始めねばならぬ。

英吉利の金融市場とは、倫敦に於けるロムバード・ストリートを謂ふのである。此處が銀行業及び商業取引の中心となつて居る。従つて英吉利の金融市場を代表して居り同時に又世界の總勘定を掌つて居るのである。金を拂ふにしても、ロムバード街へ持て行つて拂へば何時でも一番安く、一番安全に、一番便利に、一番確かに拂ふことが出来、又受取るにしても、此處で受取るのが一番便利で、一番安全で、一番早い。早い話が、日本で南米の或る國から品物を買つても、其の代金は直接に南米の某國へ送るのではなく、倫敦に送つて倫敦で拂ふ。又南米の某國も倫敦で受取る。其の方が何方に取つても便利であつて、且

つ安全であるからである。勿論それは爲替の作用に依るのである。

品物の代金の受拂のみならず、總ての爲替は倫敦に宛て、取組むことになつて居る。例へば印度に金を送らうと云ふ場合に、直接に印度に向つて爲替を取組むより、英吉利に爲替を取組んで送つた方が安く行く場合が幾らもある。現に戦争前までは、日本から米國に送金するに、大抵紐育宛の爲替を組んで居つたのである。戦争が始まつてから暫くの間は、倫敦宛の爲替を組んだ。そして其の倫敦宛の爲替は、之を英國に送るのではなく、やはり米國に送るのである。米國の人は其の爲替を貰つても、現金は倫敦でなければ取れないけれども、亞米利加の方には、他に倫敦に送るべき金があるから、それと差引をする、それを爲替の裁定と名ける。殊に日本と亞米利加との爲替相場はどうして立つかと云ふと、倫敦相場を標準にして立てるのであつて、日米間文けの關係のみで相場が立つのではない。倫敦と亞米利加との間の爲替相場が幾ら、日本と倫敦との爲替相場が幾らと云ふことを見て、日本と亞米利加との相場が何程と定まるのである。非常に經濟の發達して居る亞米利加でさへさうであるから、其の他の國に於ては、外國に對する爲替は皆倫敦

宛にして取組むことになつて居る。例へて云へば伊那の町から同じ信州の長野市に物を送るに、直接に長野へ送らずに先づ東京へ送つて、東京から長野へ送つて貰つた方が、早くて安く行く云ふやうな有様になつて居るのである。

倫敦は經濟上實に世界交通の焦點に當つて居るので、他の國に行くには海もあれば山もあり、種々の障礙があるのであるが、倫敦に向つては世界各國から立派な道が付て居つて、汽車も行けば自動車も行く天下の大道は悉く倫敦に集つて居る様なものである。倫敦に行けば何處へ行くのにも極めて便利で、又安全である。これ倫敦のロムバード街を中心として世界の經濟生活が營まれて行く所以である。馬鹿くしいではないか、そんな遠廻りをするよりも、直接に交通した方が宜からうと云ふ考が起るであらうが決してさうでない。倫敦を経て行く方が遙かに便利であるのである。日本が濠洲から羊の毛を買ふにも、其の注文は倫敦に向つて發する、又代金も倫敦で拂ふ。實際の品物は濠洲から神戸なり横濱なりへ運んで來るが、取引の關係は倫敦に於て行はれる。所が物に依ると、現品の取引も倫敦でする方が便利のこともある。例へば日本の銅を歐羅巴に賣るには

先づ倫敦の商店に賣込む。さうして積出先も大抵倫敦にし先方からの電報に依つて積出すやうにして置く、詰り倫敦の商人に賣つたことになつて居るのである。其を買ふ方は露西亞で日本の足尾の銅を買はうと云ふ場合にも、日本の古河へ直接に注文して來ないで倫敦の銅を取扱ふ商店に向つて注文する、倫敦の商店では日本に向つて、此の間買つた銅は露西亞のペトログラードに送れと言つて電報を打つて寄越す。或は亞米利加から注文があれば、亞米利加へ送れと言つて電報を發する。日本に在つても品物は先方のものであるから、先方の命令次第何處へでも送らなければならぬ。積出す日までは先方が選擇の自由を有つて居る（之を『オプション』と名くる）。横濱に於て倫敦の商店に賣つたと云ふものゝ、其銅は亞米利加へ行くかも知れない、獨逸に向けられるかも知れない。其の決定は誰れがするかと云ふと、日本人がするのでなく、倫敦に於ける英吉利の商人がするのである。英吉利の商人と云ふが、それは實は倫敦に居る獨逸商人である。銅の賣買に就ては獨逸商人が殆ど全權を握つて居る。であるから開戦當時獨逸の商人が英國を引揚げてしまつた時には、一時銅の取引が出來なかつたと云ふ。英吉利の商人が、急

に其眞似をしやうと思つたが出来ない。今日では出来るやうになつたが、當時は出来なかつた。それが爲め一時銅の價が下つた。兎に角さう云ふやうに品物の取引も倫敦で行はれるものが多い。それから又世界中の船の出入船賃と云ふやうなものも倫敦で極まるのであつて、他の國では分らぬ。保険料もさうである。世界中の保険料は倫敦のロイドで決定する、ロイドで認められない船には何處でも保険を附けない。日本の船でも、何でもロイドで等級を附し、一番安全な船は保険料も安く怪しい船は高い。全く悪いのには保険を附けない。斯くの如くになつて居る、但し何れも大體のことを言ふので、一々に就て取除の場合はいくらもあることは言ふまでもない。

さう云ふ風に商品の取引、又其の代金の受拂と云ふことは、倫敦が世界の中心となつて居るのであるが、其の外倫敦には世界中の金を借りたい人が集つて居るから、倫敦へ行けば、何時でも一番便利に、又どんなに澤山でも自分の欲するだけの借金をすることが出来る。他の所はそれが出来ない。紐育でさへも、何時でも必ず欲するだけの借金が出来るとは言へない。倫敦へ行けば、相當な條件が具はつて居りさへすれば、何時で

もどんな大金でも借りることが出来る。同時に又金を貸さうと云ふ者も、倫敦へ行けば、一番安全にどんなに澤山の金でも貸付けることが出来る。それと云ふものは倫敦では何時でも金が得られる、何千萬でも何億萬圓でも得られる。又其の反對に倫敦へ行けば、金が何時でも賣れる、さうして倫敦で賣る相場が一番好い。だから纏まつた金を賣らう買はうとするには倫敦に行かなければならぬ。金は銀とか銅とか鐵とか云ふものと違つて貨幣になるものであるから、金が得られると云ふことは、詰り貨幣が得られると云ふことである。

そこで歐羅巴諸國も歐羅巴以外の國も、皆倫敦を中心として經濟を立て成べく倫敦で通りの好いやう、倫敦でやつて居るのと一致するやうにと、其經濟上、商業上の仕組を立て置く。自分の國の都合から言へば、斯うした方が宜いと思つても、倫敦へ行つて通りが悪いと云ふ事であれば、自國の便利は第二として、倫敦へ行つて通りの好いやうにする。倫敦へ行つて商賣をし、倫敦へ行つて金の貸借をし、金の受拂をするのに、どうすれば一番通りが好いかと云ふと、倫敦で受取つて呉れる金が自國の金であると云ふことが一番宜

い。倫敦で受取る金は金貨である。英國は金貨本位の國であるから、倫敦に行つて商賣をせしやう、經濟上の關係を整理しやうと云ふ國は、自國の都合は第二として、金貨本位制にならなければならぬ。世界の各國が段々金貨本位を採用し、金貨本位國となつたのは、金貨本位が自國の爲めに都合が好いからではない、否、金貨本位にすることを必要としない國に於いても、英國との關係を便利にする上から、金貨本位國となつて居る國が幾らもある。例へば日本は金貨本位國である。日本が金貨本位の制度を採用したのは、表面の理由としては、倫敦へ行つて商賣をしたり借金をするのに都合が好いからと云ふやうなことは誰れも言ひはしない。大藏大臣が議會に於て説明するにも、そんなことを言ひはしない。他に理由を求めて、日本も段々富の程度が高まつたからとか何とか彼とか色々の理由を言ひ立てたのであるが、それは無理にコチ付けた理由で、實は日本も段々世界の經濟の仲間入り、英米其他の諸國と取引が行はれるやうになつたので、乃ち倫敦を中心として國の經濟を立てなければならぬと云ふことになつたからである。若し日本の必要から金貨本位になつたものならば、日本國內に金貨を流通して居るべき筈であるが、實際に

於ては少しも金貨が流通して居らない。恐らく諸君も金貨を手にはせらるゝ機會は餘り度々はなからうと思ふ。私などは金貨を見たことは殆んど無い。態々日本銀行へ行つて兌換して持て来れば格別であるが、さうでない限りは金貨を見る機會は全く無い。又見なくとも差支ない。と云ふものは吾々は實際の生活に於て金貨などには必要がない、必要がないどころではなく却つて厄介である。吾々は平生兌換券と補助貨だけで何の本自由もなく用を達して居る、金貨を持つ必要はない、従つて金貨が國內に流通して居らないのである。日本でさへそうである、印度の如きは金貨本位にする必要はない、支那にしても同様、比律賓などに於ては尙更其の必要がない。印度の如きは自國には金が無い、自國で金を使つては居らないで、外國に對して金貨本位隨分變なことをやつて居る。此れ皆英國との附合上採用したのである。所が平時には其の變なことでやつて居つたが、今度の戰爭で其の變なことが出来なくなつて、先頃の新聞にもあつたやうに、印度證券賣出の制限と云ふことになり、之が爲に印度と貿易をして居つた商人、殊に棉花を輸入して居つた商人や紡績會社では非常に苦んだ。我邦で使用する棉花は何處から來るかと云

ふと主に印度と亞米利加から來たのである。所が印度證券賣出制限の爲に、印度へ金が送れなくなつた。金が送れないから代が拂へない、代が拂へないから棉を買つて來ることが出來ない。それは金がないのではなく、代金を拂ふ方法が無くなつたからである。それなら金貨を持つて行けば宜いであらうが、英吉利の方で金を持つて來てはならぬと言ふ。印度人に金の味を覚えさせては困るから、金を持つて來てはならぬと言ふ。それが爲に印度から綿を買つて來ることが出來ないで、一時非常に苦しんだ。

なぜ英國との附合金貨本位にしなければならぬかと云ふと、例へば銀貨を以て本位として居ると、金と銀とは常に同じ比價を有つて居るものではない、今日は金一匁を以て銀三十六匁を買ひ得ると云ふ相場であつても、明日は三十六匁半になるかも知らぬ、或は三十五匁になるかも知らぬ。金と銀との間の比價は斷えず變動がある。従つて爲替相場が絶えず變動する。今英吉利へ金を送らうと云ふのに、日本の一圓は二志〇片十六分の一と云ふことであれば、其の割合で金を送れば宜いのである。所が若し日本が銀貨本位國であつたとすると、銀の相場は始終變動するから、今日二志〇片十六分の一の割合で

銀を拂込んだものが、英吉利で拂渡す時には銀が高くなつて二志一片十六分の一になつたとすると、英吉利ではそれだけ餘計に金を拂はなければならぬ。買つた品物でも、拂ふ金の高が時に依て違ふ。それでは商賣がやり憎くなる。物の賣買の心配の外に爲替相場の變動の危険が伴ふ爲に、どうも商賣が圓滑に行はれない。之に反して英吉利も金貨本位、日本も金貨本位であれば、爲替の需要供給の關係で、多少の差はあるけれども、金と銀との間に於ける程の變動は起らぬ。極く僅かの相違である。故にその方が貿易の上で便利であるから、海外貿易に就ては、各國皆英吉利と同じく金貨本位の制度を採るようになつたのである。

斯くの如くに戦争の始まる前までは、世界の各國が外國との取引をしやうと云ふには、何れも英吉利と同様に金貨本位の國になり、倫敦を中心として、總てロムバード街の御厄介になつて居つた。今の世界は全く金の世の中で、金がなければ何事も出來ぬ。戦争をするのにも第一には金が必要で、金が無ければ戦は出來ない。總てのものは金の價で處理しなければならぬ。

所が金の價で處理すると云ふことは、實際現金を以て授受するのではない。殊に英吉利の發達したる金融市場に於ては、現金の遣り取りと云ふものは極く少い。何十萬磅、何百萬磅と云ふやうな金を實際に動かすと云ふことは極めて稀れであつて、唯だ勘定だけで決済し、現金を遣り取りするのは其の勘定尻だけである。即ち日本なら日本で外國に品物を賣つて、其の受取るべき代金と、日本が外國から品物を買取つて、其の支拂ふべき代金とは、現金で受取つたり、現金で支拂つたりするのではなく、爲替で決済してしまふ。それを稱して信用と謂ふ。信用で總ての取引を行ひ、さうして餘つた金額だけを現金で渡す。だから現金で遣り取りすることは、餘り立派な商賣ではない。個人でも信用の無いものは現金で取引するが、信用のある者は現金の取引は極く僅かである。國と國との間の經濟上の關係と云ふものは、名義上は金錢を以て勘定して居るけれども、其の實は物と物との遣り取りである。物を遣りて物を取り、其の差額だけを金錢で拂つたり受取つたりして居る。而して其の總勘定をする所は何處かと云ふと、倫敦のロムバード街である。日本で品物を賣る國は世界中に澤山ある、又買ふ所の國も澤山ある。けれども其等の國

と一々代金の受拂をするのではなく、倫敦で決済することになつて居る。併し日本から輸出した品物の價と、日本へ輸入した品物の價とが、さうキチンと出合ふものではないから、其の差額だけを現金で遣つたり取つたりする。輸出した品物の代價が少くて輸入した代價が多かつた時には、其の不足しただけの金を日本から倫敦に持て行く。其の反對に近頃のやうに賣つた代價の方が多くて、輸入が少い時には、差引超過しただけの金を受取る。其の受取つた金は勿論日本のものであるから、持て來やうとすれば持て來ることも出来るが、其儘倫敦に置くこともある。それが所謂在外正貨である。

二 國際貿易の原理

諸君が近頃の新聞を見ると、日本の在外正貨が非常に殖えた、何億になつたと云ふやうなことが書いてある。それは詰り日本が差引して受取つた金である。而して其何億圓の日本の在外正貨の大部分は無論倫敦にあるが、少しは巴里にもある、紐育にもある。近頃は段々紐育の方に餘計置くやうにして居ると云ふことである。それは戦争の爲に倫

教に置くことは不安になつて來たから、比較的安全な紐育に持つて行つたのである。それでもまだ大部分は倫敦に置いてある。又其の一部分は日本へ持つて來たのもある。其の結果日本銀行の金庫にある在內金貨も大部殖えた。それは何によるかと云ふと日本が買つた價のものよりも賣つた價の方が多かつたからである。それを名けて輸出超過と謂ふ。品物の輸出が輸入より多いのが輸出超過、其の反對に輸入が輸出より多ければ輸入超過となる。

輸出が殖えたと云ふには、二つの意味がある。其の一は賣つた品物の分量が實際に殖えたと云ふことである。例へば生絲に就て言ふならば、昨年十萬捆賣れたものが、今年は十五萬捆賣れたと云ふやうなものである。第二は賣上金高の殖えたと云ふことである。賣上金高の殖えたと云ふのは、金錢で言ひ現はす所の代價が殖えたと云ふ事である。例へば三年前の生絲の代價と今日の代價と比べると、今日は非常に上つて居る、それ故實際賣つた分量は同じく十萬捆であつても賣上金高は多くなる。品物を餘計に賣つて居るのではないが、代價が高くなつた爲に、賣上金高は殖えたことになるのである。

併し乍ら賣つた物の値が上ると共に、買つた物の値も上ると云ふのであると、それは唯だ呼高が殖えただけである。帳面づらが殖えただけで、國の富が殖えたのではない。併し呼値だけの殖方でも、買ふ物の方の呼値は少しも高くないか、或は高くなつても左程高くないのに、賣る方の物の價が大變高くなつて居れば、やはり本當の利益になる。何となれば、勘定する上に於て、賣上高が多くなるから、結局それだけの金を貰ふから、即ち金貨が殖えるのである。

そこで戦争の前までは、歐羅巴の諸國、亞米利加、日本と云ふやうな、世界の文明諸國の大多數に就て見ると、賣る者の方が多くて買ふ物の方が少ないのが當り前である。即ち輸出超過の方が當り前である。若しさうでなければ、それは甚だ憂ふべき状態であると云ふことになつて居つた。それ故に政府を初め其の道々の人は、輸入超過の傾向が現はれて來ると國民に對して注意を與へる。反對に輸出が多くなつて來ると、順調である。結構のことであると言つて喜んで居た。併し如何なる場合と雖も、輸出超過でありさへすれば、必ず宜いとのみは言へない。

斯く歐羅巴の諸國や、亞米利加合衆國、日本と云ふやうな國は、輸出超過を以て常態として居るが、其の正反對に輸入超過を以て常態として居る國が二つある。毎年々々賣る物よりも買ふ方の多い國が二つあつた。それは即ち英吉利と獨逸である。

輸出超過を以て常態とし、賣る方が多くて買ふ方が少いのを喜んで居る國は、世界經濟の上から言へば借金國である。何か知らず借金をして居る。其の借金は政府の公債もあらうし、民間の借入金もあらう。又た借金と云ふ名の付いて居らぬ借金もある。それは何かと云ふと外國の資本が國內の事業に向つて投ぜられて居るので、國から見るとそれも一種の借金である。借金をして居れば、年々利子を拂はなければならぬ、又期限が來れば元金も返さなければならぬ。故に借金國に於ては、買ふものより賣る物の方が多くならなければならぬ。其反對に英吉利と獨逸とは貸金國である。外國に金を貸して居るから、年々利息が入つて來る、又元金の償還もあるから買ふ物が多くなつても國內の富は減らない。

第二に賣る方の多い國は、國の外に於て人の爲に働いて、其の代價を得ることが甚だ少

いか、若しくは全く無い國である。反對に英吉利や獨逸の如き國は、國內に於てのみならず、國外に於ても大變稼ぐ。其の稼ぐ主なるものは船の運賃及び保険料である。英吉利及獨逸の船は、自國に發着するものばかりでなく、外國間に航海して外國の貨物を運搬し、其の運賃を取り又保険業を營んで保険料を取る。是等の収入は直接に金で入つて來なくとも、何時か知らず何かの形に於て入つて來る。其の外に貸金の元利金、外國の事業に投資して居れば、其の利益の配當金といふやうなものが入つて來る。それも正貨で入つて來るのでなく、多くは色々の形の品物で入つて來るのである。所が他の國は英國や獨逸の船に依て運んで貰ふから、運賃は拂はなければならぬ、又保険料も拂はなければならぬ。尙借金に對する元利金も拂はなければならぬ。それらのものは色々の品物を輸出して、それで拂ふ。若し品物だけで足りない場合には、其の不足額は倫敦に於て金貨を拂はなければならぬ。それが即ち借金國は輸出超過を以て常態とし、貸金國は輸入超過を以て常態とする所以である。

であるから日本で苦心して生絲を造つて輸出する、或は樟腦を輸出する、銅を輸出する、

美術工藝品を輸出すると云ふやうに、盛に輸出を圖つて居るが、其輸出した物は、日本が外國から買つた物の代價として拂ふ外に、借金の利息にも、船の運賃にも、保険料にもなつて居る。日本の人は骨折つて生絲を拵へ、それを織物にして自分で着る代りに、自分は安い木綿を着て高い生絲を輸出し、借金の利子を拂ひ、運賃を拂ひ、買つた品物の代として拂つて居る。勿論何を賣つた代が何に當ると云ふやうなことにはなつて居らない、日本から輸出したものと總額が日本に拂ふべき總額に當つて居るのである。所が英吉利や獨逸は外國から取るものが多いから遣る品物は少なくて済む。例へば英吉利が十億磅に當る品物を外國へ出しさへすれば、それに對して十六億磅に當る品物が入つて來て、丁度勘定が出合ふとすれば、差引六億磅だけの品物が餘計に英吉利に入つたことになるから、それだけ英吉利の富が殖えた譯である。其の中には原料品として、精製の上再び外國に賣行くものもあらう、或は煙草であるとか、砂糖であるとか云ふやうな消耗品もあらう、又中には全く無駄な贅澤品もあらうが、兎に角其大部分は英吉利人の富となつて居る。反對に日本や亞米利加の如く輸出が超過して居る國、或は超過しなければならなかつた國は、外

國から買ふ物が二億圓、外國へ賣るものが二億六千萬圓、差引六千萬圓だけ多くのものを出さなければ勘定が出合はないと云ふことで、其の六千萬圓と云ふものは餘計に外國へ遣る譯である。自分で着るべき衣物も着ないで、外國の人の用に供して居るのである。

其の點から云ふと、國內の生産品が無暗に海外に出ると云ふことは、餘りに衰めた話ではない。尤も國內に於て十分に使用し、其の餘剰を出すと云ふことは、餘りに衰めた話ではない。尤も國內に於て十分に使用し、其の餘剰を出すと云ふことは、まことに馬鹿々々しいので、使ひたいが使はずに、皆外國へ出してしまふことは、まことに馬鹿々々しいのである。例へば折角母親が牡丹餅を拵へたが、自分も食はず子供にも食べさせずして、皆隣りの家へ持つて行つて、其で輸出が超過したと云つて喜んで居るやうなものであるから、甚だ馬鹿々々しい。出来るなら日本で作つた品は、日本で皆使つた方が宜しいやうに考へられる。けれども是までの日本では、成るべく多くの品物が出るのが宜しいとしてあつた。其は何故かと云ふと、出るのが宜しい譯ではない。若し出ないでも勘定が立てば成るべく外國に出ない方が宜い。日本で出來た品物は、出来るだけ多く日本人に使はせたい。日本で出來た米は全部日本で食べ、日本で出來た生絲は皆織物にして日本人に着

せたい。現に徳川時代にはそれでやつて居つた。然し斯くすれば其の代りに、それよりも必要な役に立つ外國の品物を買つて來ることが出來ない。お母さんが骨を折つて拵へた牡丹餅を子供にも食はせず隣りの家へやつてしまつたと云ふのは、牡丹餅を隣りへ遣れば其の代りに三度の御飯が満足に食べられる、子供も學校へ行ける、書物も買ふことが出來る、遣らなければ三度の飯も食べられぬ、學校へも行かれないから、牡丹餅は食べたいが我慢して隣りの家へやつてしまうやうなもので、日本は生絲を西洋へ遣りたくない、日本の米を外國に出したくはないけれどもそれを外國に出すと云ふことは、それよりも必要な品役に立つ品が外國から買へるから、其の代價として出すのである。吾々一個人から云つても、貰つた月給は成るべく使ひたくない、出來ることなら其の儘郵便局へ持つて行つて預けて置きたいけれどもさうしたのでは食べて行くことが出來ないから、少しも使はずためて置く譯には行かぬ。唯成るべく必要なものを買つて、無駄な費を省くことを心掛けるまでのことである。國が輸出したり輸入したりするのも、それと同様で、輸出するものよりも、自國に取つて多く價值のある物を輸入しようとするのである。國內

で使つてしまへば、吾々の得る利益は十しかないが、それを外國へ賣つて、其の代りに物を買へば、十五の物が得られるから輸出するのである。であるから輸出ばかりして輸入を少しもしない國があつたら、其程馬鹿氣たことはない。

輸出するのは輸入したいからであつて、輸入するのは輸出したいからではない。であるから、日本で生絲を拵へて、それが外國へ出て行くことが宜いのではない。其の代りとして、生絲よりもつと吾々の役に立つ物が外國から日本に入つて來るから、それで生絲の賣れることが宜いのである。唯だ日本の生絲が外國へ出て行くだけであつたならば、非常な損である。其の事を學問の上では簡単に『國際貿易は輸入の利益の爲に行はるゝものなり』と云つて居る。即ち輸出は一の犠牲と看做す可きものである。

此點は極めて明瞭のことであるに拘はらず、どうも日本の人に能く分つて居ない、殊に外國貿易だの、外國爲替の事務に當つて居る人ほど却つて分つて居らない、反對に判斷して居る。輸入が無くなつて、輸出ばかりになつたら大變結構だと——さうまでも言はないが、さう云ふ考へで論を立て、居る人がある。輸入は出來るだけ之を阻止し、或は絶無

を期し、輸出は多々益々増加することを望むと云ふやうに言つて居る。又同じ貿易商でも、輸出商であると云ふと、大變人から歓迎せられ、輸入商だと云ふと、左程歓迎されないやうであるが、本來はさういふものではない。各種の機械、器具、鐵材、染料、其の他日本で出来ない物、出来るとしても完全でない、或は價が非常に高いと云ふやうなものを、外國から割合に安く買つて來ることになれば、それは洵に結構であるが、現今の如く日本の物はどしどし買つて行くが、日本に必要なものは何も禁止、彼も禁止で輸出を止めて居るのは、日本に取つては甚だ迷惑の話である。

戦争の始まつて以來、歐洲の諸國は必要な品物を盛に買込み、金は拂つて呉れるが（但し露國は拂つて呉れぬ、將來も拂へるか如何か甚だ怪しい）、此方で必要なものは一向賣つて呉れぬ。染料も來なくなれば、鐵類も來なくなる、縮花も來ない、鉛筆も紙も乃至は濠洲から來た羊毛までも日本には賣つて呉れない。日本人が粒々辛苦して拵へたものは、どしどし買つて行つて使つて居るが、此方には何も寄越さない、唯だ金で拂ふだけである。であるから此の状態で三年も五年も繼續すれば、成程日本の輸出をして居る人は金持に

なる、日本の在外正貨、或は國內の正貨は殖ゑるだらうけれども、品物は殖ゑない、却つて減る一方である。成程日本の正貨準備も非常に殖ゑ、在外正貨も著るしく増加し、日本全體としては金は大變に出來たが、然らば其の金といふものは何か、金と云ふものは食べ物でも飲み物でも着る物でもない。それだから如何に金銀を食つても、金銀は飢ゑた時に握飯一個の役にも立たない、渴いた時には水一杯の用をもなさない、萬金を積んでも凍えた時は布子一枚の代用をもしない。金を指輪にしたり腕輪にしたり其の他種々の裝飾に用ひては居るが、それは金の用途の極く一部分であつて全部ではない。日本が金持になつて結構だといふのは、如何なる意味かと言ふと、詰り是が又他の品物と換へることが出来るからである。今日本の所有して居る正貨が十億近くあると云ふとであるが、其の十億に近い金が何も貴い譯ではない。それを金の延棒にして並べて置いても、それで人が偉くなる譯でもなければ腹が膨れる譯でもない。唯だ之を以つて必要な品物、役に立つ物品に何時でも換へることが出来るから貴いのである。だから結局金の殖ゑるのが宜いのではない、物の殖ゑるのが宜いのである。

三 金の經濟と物の經濟。輸出入と在外正貨

吾々の經濟生活は、物を殖やし物を豊にするにあるが、その物を殖やし物を豊にするの道行として、先づ金を殖やさねばならぬと云ふのが、今日の經濟生活の特色である。あの人は近頃金持になつた、十萬圓も金を拵へたさうだなどと噂をすることがある。所が其の十萬圓と云ふのは、何も十萬圓の現金が積んである譯ではなく、或は田畑であるとか、建物であるとか、品物であるとか、權利であるとか、色々の形になつて居る、それを金の價に見積ると十萬圓であると云ふのを、手取早く十萬圓拵へたさうだと言ふのである。それは金と云ふものは、如何なる品物とも換へることが出来るもので、一億圓あれば一億圓だけの品物が得られ、十億圓あれば十億圓だけの品物が得られる、それが貴いのであつて、金其ものが貴いのではない。今度日本に十億の正貨が出来て有難いと云ふのは、十億の正貨が有難いのではない、十億に當る品物と何時でも換へられる金が殖えたから有難いのである。結局は品物の殖えるのでなければいけない。であるから、外國貿易は今も戰爭中で

大變模樣が變つて居ると云ふけれども、實際に於て輸入は常に輸出より多くなければ損をして居るのである。即ち戰爭前の英吉利や獨逸のやうな有様でなければいけないのである。日本や戰前の亞米利加のやうに輸出超過を喜んで居つたやうな状態は、決して満足な發達をして居るとは言へない。

併ながら外國から金の入つて来る見込もないのに、一足飛に英吉利や獨逸のやうに輸入ばかり超過することは尙更危險である。日本の今日の經濟に於ては、まだ輸入が餘計であると云ふことは宜しくない。なぜ宜しくないかと云ふと、日本に輸入が餘計殖えたと云ふことは、詰り借金が殖えたと云ふことになる。拂ふべき代價物無くして、拂ふべき高が多いのであるから詰り借になる。お母さんが拵へた牡丹餅を隣りに持つて行かずに、皆自分の家で食べてしまひ、それから米や着物は餘所から買つて来る、即ち輸入超過である、之に對して拂ふべき金が無ければ、それだけのものは借になつて居るから、何時かは返さなければならぬ。故に是は輸入超過がいけないのでなくして、借金になるからいけないのである。英吉利や獨逸の輸入超過は、外國から入つて来る可き筋道の金があつて輸

入が超過するのであるから宜いのである。自分は何をしなくとも、世界の各方面に金を貸したことになる。或は貸金の利子もあらうし元金もあらう、其の他運賃とか保険料とか色々取るべき金がある。それが現金でなく種々の品物となつて、亞米利加からも支那からも、日本からも濠洲からも輸入せられるのであるから、輸入が超過しても借金とはならないのである。

であるから輸入超過には極く宜いのと、極く悪いのと二種ある譯である。中途半端の輸入超過と云ふものはない。日本の如きは輸入超過は今でもいけない。英吉利や獨逸は輸入の超過するだけが宜い。と云ふものは日本で輸入超過になると、超過しただけは借になるから、何時か返さなければならぬ。所が英吉利や獨逸は返す必要がない。取り放しだから、是は無論輸入の超過した方が宜い。其反對に輸出の超過するのが宜いと云ふのは、輸出がどん／＼超過すれば、借金のあつた國は借金が減るし、それが尙進むと今度は貸方になる。さうなれば洵に結構である。今日の日本の状態は恰度それである。生絲を製し銅を掘り樟腦を取つて盛に外國に賣出す。之に對して外國から買つて來るこ

とは出來ないから金がウンと殖えた。此の金は貸付金に換へやうと思へば何時でも換へられる。今の所日本に必要な現品には換へることが出來ない。だから九億も十億も金が出来たと言つても何にもならない。砂漠の真中ではどんなに澤山の金を持って居つても役に立たない、却つて持て居るだけ邪魔になる位のものである。

併し今日日本の持て居る金は品物にはならないが、貸付金にして置くとは出來る。そして戦争の済んだ後には無論品物に換へることも出來やうし、貸して置けば利息も取れる。又斯う云ふ勢で今後尙進んで行つたならば、今までの借金は返してしまつて、貸金國となり、戦争前の英吉利や獨逸と同じになれるかも知れぬが、まだ輸入が超過してはならぬ。今の所では品物が益々輸出され、品物の價が益々高くなつて、成金の續々出て來る方が宜い。日本で成金と云ふと、大變卑しい者のやうに思ふが、外國との商賣に依る成金は、詰り世界の表に於てそれだけ日本の富を殖やして居るのである。金が出来た爲に、今まで借金國であつた日本が、反對に貸金國にならうとして居る。現に日本は大分借金を減らした。佛貨公債も償還し、英吉利にも金を貸付け、露西亞の大藏省證券をも引受けた。

其は政府がやつた仕事であるけれども、日本國と云ふ上から見れば、政府のした事であらうが、民間でした事であらうが同じである。だから吾々が露西亞の大藏省證券の募りに應ずれば、露國に對する日本の貸付金が殖えることになる。近頃大變に殖えたと云ふ在外正貨も、品物にはならないが貸金には換へられる。ナニ換へられるぢやない、換へなくとも既に貸金になつて居る。之を貸金にしやうと思へば其の儘にして置けば宜い。と云ふのは、日本の在外正貨と言つてもそれだけの金塊が倫敦に積んである譯ではない。在外正貨と云ふから、一寸考へると倫敦なり紐育なり巴里なりに、それだけの現金があるやうに考られる。一寸ではない篤と考へてもさうでなくてはならぬ。所が日本の在外正貨と云ふものは、それだけの正貨が積んである譯ではなく、正貨に代るべきものがある、正貨代用のものがあるのである。それに強て名を付けるると在外債權とも謂ふべきである。それを日露戰爭中に在外正貨と名づけたのである。其の當時は實際無理がなかつたのであつて、日本の金貨は非常に減つて來て、日本の金貨本位は危くなつて來たのである。そこで據らなく英吉利から金を借りた、其の借りたのは現金を借りたのではなく、唯

だ權利を借りたのである。權利を借りてそれを正貨と看做して、日本銀行の兌換準備とした。だから是は無論兌換銀行券條例違反である。違反であるが今でもそれをやつて居る。日本銀行の兌換銀行券と云ふものは、一億二千萬圓までは保證準備で宜い、即ち現金を積んで置かなくとも、商業手形を積んで置きさへすれば宜い、それ以上は兌換券一圓に對して一圓、二圓に對して二圓、即ち同額の金貨を日本銀行の本店なり支店なりの金庫の中に現存しなければならぬことになつて居る。所が實際はさうでない。此の頃は大部分割合が殖えたが、それでも三分の二には達しない、半分少し餘あるだけで、半分より少しだけのもは日本銀行の金庫の中に入つて居らぬ。けれども正貨が無いと云ふとになると、正貨準備と云ふものが無くなるから、外國から金を借りて準備とした。所がそれは日本にあるのでないから、在外正貨と言つた。正貨と言つても、それだけの現金が積んである譯でなく、色々の形の債權になつて居るのである。と云ふものは何億圓かに當る金を、唯だ積んで置くことは馬鹿らしい、又今日は各國とも大騒ぎをして、金を集めやうとして居る所であるから、逆も實際にありはしない。そこで日本が取らうと思へば取

れる権利があると云ふことにしてある。其の大部分は英國の中央銀行即ち英蘭銀行に預金になつて居る。又或る部分はコイルローンなつて居る。此のコイルローンは平時の倫敦ならば呼べば無論來るに極まつて居るけれども今はそれが餘り巧く行つて居らぬやうであるから、是は餘程考へものである。兎に角コイルローンにもなつて居る。併しそれが幾らあるかと云ふことは、日本銀行も政府も發表しないから分らぬ。秘密にする必要もないのであるから、公表したら宜さうなものであるのに公表せぬ。ツイ此の間までは在外正貨が幾ら、在內正貨が幾らと云ふことさへも公表しなかつた。山本大藏大臣、續いて武富大藏大臣の時代になつて、大分明瞭に發表するやうになつたが、それでも在外正貨の内容に就ては決して公表をしない。それは正貨でないものを正貨と言つて居るのであるから、餘り詳しいことは云へないのであらうが、其内容は出来るだけ明瞭にして置いて貰ひ度いものである。

兎に角日本の在外正貨何億圓と云ふものは、今云ふやうに英蘭銀行への預金、其外英吉利の大藏省證券も買つて居らうし、佛蘭西の公債も持て居らうし、貸付てもある。それ等

の金額も分らぬが、要するに現金は大部分英國の懷ろにあるのであつて、日本の持て居るのは證書のみである。其の中には直ぐに金貨と引換へられるものもあるが、期限が付いて居つて、直ぐに正貨に引換へることの出来ないものもある。それを政府や日本銀行の當局者は在外正貨と言つて居る。それは縦し日本の手に正貨が無くとも、日本で必要の時に正貨が得られるのならばまだ恕すべきであるが、今日の状態では、之を正貨にして日本の用に使ふことは出来ぬ。若し日本で其全部を正貨にして回収しやうとすると、英國政府は頑として之を拒むに相違ない。強て回収しようとするれば、或は國交斷絶に至るかも知れぬ。又それを日本に持て來れば、英吉利が倒れてしまふ。それは英吉利には澤山の金貨があるに相違ないけれども、其の金は一面に於ては英吉利の兌換準備になつて居る。一の金が二重に兌換準備の用をして居る。であるから、若し一朝英吉利と戦争をするこゝとなれば、何億圓かの日本の在外正貨は全部押へられてしまふ。平和に復すれば解決が付くであらうが、戦争中は全く役に立たない。取れない貸金になつてしまふ。だから在外正貨の處分と云ふことは非常に六ヶしいのである。

在外正貨といふものにはさう云ふ危険がある。そこで少しでも危険の少い所に貸して置かうと云ふので、近頃大分紐育の方へ持て来たやうであるが、是も日米關係が悪くなつて、國交斷絶になつてしまへば、やはり同様の運命に陥るから、海外に在る債權は、内國に在る正貨のやうに安全ではない。安全でないからと言つて、一も外國に債權を有つて居なければ、今日の世界に立つて行くことは出来ぬ。故に是は程度の問題である。どれ位の程度ならば危険を冒しても宜いかと云ふことである。それに就ても今日日本の所有して居る正貨の中、澤山の部分を海外に置き、國內には寧ろ少額の正貨しか無いと云ふことは、程度問題としても其の當を得ないものである。

日本の富が段々殖えて、是までの借金は全部返済し、尙進んで日本が外國に對して貸金を持つやうになると、今まで吾々が生絲なり其の他の品物の形で拂つて居つたのが、拂はないで宜いやうになり、反對に外國から何等かの形に於て日本に品物が入つて来るやうになる。即ち生絲を我邦から輸出する代りに、それより吾々の要するレールなり機械なりが餘計に入つて来るから、其の結果生産を増加せしむることが出来る。吾々が努力し

て生産の増加を來した結果は、金が殖えて来るけれども、併し吾々の働くのは、金を殖やす爲に働くのではない、物を殖やす爲に働くのである。吾々は金の殖える事を望むものではない、所謂拜金宗ではない。唯だ金の御利益は、之をお賽錢にすれば如何なる品物でも得られる、他の物では容易に得られないが、金ならば衣物が欲しければ衣物になり、食物が欲しければ食物になる、或は貸金にすることも出来る。而して世界に於ける金の中央市場は倫敦である。倫敦へ行けば何時でも金が得られる。他の所では得られることもあれば、得られないこともあるのである。是が世界の貨幣經濟の大利益である。

四 商品輸出國より資本輸出國に移り行く英國

以上、戦争前までの世界の經濟は倫敦の金融市場を中心として動いて居る所以を説明したが、さて其の金融市場を支配して居る根本の力は何であるかと云ふと、それは資本である。倫敦の金融市場とは詰り資本市場と云ふことである。

資本は、貨幣の高を以て言現はされるものであるけれども、貨幣の一定の高が資本とな

るのではない。資本となるには一の特徴が要る。然らば資本とは何かと云ふと、金銭上の利益即ち利息利潤を得る爲に投下せられたる財産、それが資本である。今日資本を以て世界を支配して居る英吉利と雖も、決して昔から斯の如くに資本を以て生命とした國ではなかつた。殊に資本の力を以つて世界を左右するやうになつたのは割合に新しいことである。どうして資本を以つて生命とし、資本を以て世界を左右するやうになり得たかと云ふと、富を得たからである。資本と云ふものは皆富である。故に資本を殖やすには富が殖えなければならぬ。併し富が殖えても、必ずしも資本が殖えたと言へない。何となれば富には資本となるものと、資本とならざるものがある。資本とは利益を産出す爲に使はれる富であつて、利益を得る爲に用ゐられない富は資本ではない。故に日本に何億の富があると云つても、其中には資本となつて居るものと否らざるものとある。例へば十萬圓を投じて立派な公園を拵へたとすると、其の十萬圓は資本ではない。何となれば公園からは何の金銭上の利益をも得ることが出来ないからである。所が十萬圓を以て鐵道を敷設したとすると、鐵道からは運賃の収入がある。故に是は資本である。同じ物で

あつても、資本となる場合と、資本とならない場合とがある。例へば土地に就ても、資本となる土地と、資本とならざる土地とがある。公園に使つたり空地にして置く所は資本ではない。所が或る土地に營業所を設け工場を建て鐵道を敷設すれば、其の土地は資本である。英吉利が資本を大變殖やし、資本の力に依て天下を支配して居ると云ふことは、無論富の殖えたことと云ふことを意味するのであるが、併し富が殖えたことだけでは資本が殖えたこととは云ふことにはならぬ。殖えた所の富を生産に使用する、或は富は殖えなくとも、従前生産的に用ひられなかつた富が生産的に用ひられるやうになれば、資本が殖えたこととなる。例へば近頃日本の富は大變殖えたが、富が殖えなくても、従前使ひ方の悪かつたのを改めて、より多く利益を生み出すやうになれば、それだけ日本の資本は殖えたことになる。英吉利の資本が殖えたことと云ふことは、無論富も殖えたのであるが、資本として其の富を使用する方法が殖えたことと云ふこともある。

資本の使ひ方には、一度限りしか使へない使ひ方もあるし、何遍も使ひ得る使ひ方もある。一度限りしか使へない使ひ方とは、固定資本と稱するもので、例へば鐵道のレールの

如きはそれである。鐵道のレールは一度敷設すれば再び外の途に使ふことが出来ぬ。それは甲の處に在つたのを乙の處へ持て行くことは出来る。今度の戦争に於て、獨逸は白耳義を占領してから、軍事上餘り必要でない所の鐵道のレールはどんく外して自國に持て行き、ヴェルダンの攻撃の時に、必要の所へ敷設して軍隊輸送の用に供したと云ふやうなことはあるが、レールは依然としてレールである。或はレールを鎔かして他の機械にすると云ふことも出来ぬではないが、多くの場合それは損である。何處までも初め儘で使はなければならぬ、之を固定資本と謂ふ、其の反對に始終形を變へることの出来るのを流通資本と云ふ。流通資本とは流通變轉するものである。固定資本も流通資本も共に生産的方法に使用されるのであるが、變動の多い時に固定資本が多いことは困る。反對に流通資本の多いのは大變利益である。

此の區別は誰れも知つて居ることであるが、是は唯だ學問上の慰にした區別ではないのであつて、實際上大變に違ひがある。殊に今度の戦争に於て、同じ資本であつても、流通資本と固定資本とは大變相違のあることが分つて來た。農業の盛んな國では大部分

は固定資本になつて居る。即ち土地であるとか、土地に加へた改良費とか云ふものは、固定資本であるから、戦争が始まつたからと言つて、急に其資本を取上げて戦争に使ふことは出来ない。又製造工業に於ても固定資本が多くを占めて居れば、之を他の用途に使ふことが出来ぬ、無理に使へばそれだけ能率が減る。例へば紡績の工場や紡績の機械と云ふやうなものには巨額の資本が投下せられてある。戦争の爲に工女が無くなり、綿の輸入が止まつて機械を運轉することが出来ないから、其の資本は遊ばせて置かなければならぬ。所が今戦争の爲に一錢一厘の微と雖も之を利用したいと云ふ場合に其の遊んで居る所の何百萬、何千萬圓と云ふ資本も使ふことが出来ない。之を以て大砲を製造することも出来なければ、彈藥の製造所とすることも出来ない。之に反して商業上の資本は大部分流通資本であつて、固定資本は極く僅かしかない。故に其形を變へやうとすれば直ぐに變る。殊に最も變り易いのは有價證券である。而も商人の資本の多くの部分は各種の證券になつて居る。そこでサア戦が始まつた金が要る、今政府の手には無い、借入れやうとしても急場の間に合はぬ、租稅期があるから急に徵收する譯には行かぬ、困つ

たと云ふ場合に、何が一番役に立つかと云ふと商人の資本である。商人に向つて資金の調達を頼む。今現金はありませぬ、現金は無くても證券はあるだらう、亞米利加の證券はあるだらう、それを貸して呉れと言つて、證券を借上げ亞米利加に送つてやる。譯はない、小包郵便で送つてやれば、何百萬圓何千萬圓と云ふ資金が忽ち得られる。其金を以て軍需品を買入れ、兵器彈藥を製造して戦争することが出来る。であるから平時に於ては固定資本も流通資本も大して變らぬ、各々其の働きをして優劣はないが、一朝有事の際に於ては、流通資本の方は直ちに働きを現はし、利益を最も多く生み出すことが出来るのである。

所で英吉利が金融の中央市場であると云ふことは英吉利には資本が潤澤にあつて、而も其の資本は斷えず流れ出で又流れ込んで、其の流れが決して止まない。若し是が土地になつたり、機械になつたり、建物になつたりして、動かない資本になつて居れば、如何に英吉利が形勝の地位に在ると言つても、世界の中央金融市場となつて居ることは出来ぬ。金融市場と云ふのは、詰り資本の市場である、其資本と云ふのは主として流通資本であつ

て、何時何處へでも形を變へて移すことの出来るものでなくてはならぬ。然るに土地は移すことが出来ない。英吉利には良い土地が澤山ある、而も百姓は皆戦地に行つて耕す者は居らない、所が亞米利加には百姓が澤山居つて、土地さへあれば幾らでも耕すと云ふやうな状態であつたとしても、英吉利の土地を亞米利加に輸出することは出来ない。向ふの人間が此方の土地に来るなら宜いが、此方の土地を向ふへ持つてゆくことは絶対に出来ない。家屋の如きは、取毀ちて持つて行けば移せないことはないが、非常な損失になる。又機械の如きも、或種の機械は動かすことも出来るが、或種の機械は動かすと大變能率が下る、又動かすには大變な入費が掛ると云ふやうなこともあるので、是等は土地に次での固定資本である。

之に反して商人の持つて居る流通資本は、之を移轉しても少しも値打を減することなく、又運賃などは幾らも掛らぬ。其の代り動き易い物であるから、少し油斷をして居ると、直ぐに飛んで行つてしまふ。資本が澤山あるからと言つて、安心して下手な使ひ方をする、と、忽ち羽が生えて飛んで行つてしまふ。非常に敏捷な俐口な者であると共に、又頗る薄

情で、主人が少し無能であると見ると直ぐに逃出す、義理も人情も構つて居らぬものである。そこへ行くと土地の如きは義理堅いもので、己れの持主は無能であると思つても、決して逃出さないで忠實に勤めて居る。そこで英吉利は富も大變殖えたけれども、殊に其の富を今云ふ動き易い形の資本として使ふことが非常に殖えた所から、世界の金融の中央市場となるに至つたのである。英吉利は世界に向つて資本を輸出して居る。資本の輸出は何を輸出するより容易い。金と云ふものは他の物に比べると嵩が少くて、動かし易いものである。又敏速に動くものである。けれども一億圓とか二億圓とか云ふやうな大金になると相當の場所を取る。又之を動かすのには運賃も高く取られ、保険料も高い。殊に今日の如き戦争の際には、危険の度が一層加はつて居る。資本に比べると餘程動かし難い。況んや其の他の物に於ては、動かせば動かす度に入費が掛る、故に運賃を拂ひ、保険料を拂つても、尙儲かる場合でなければ輸出しては損であるから、輕々しく輸出することが出来ぬ。資本に比べては劣るのである。

英吉利と雖も十九世紀の半過ぎまでは資本の輸出國ではなくて、商品の輸出國であつ

た。又十八世紀迄は世界第一等の商賣國でもなかつた。佛蘭西の爲に始終頭を抑へられ、富の程度も佛蘭西には及ばなかつた。佛蘭西は其頃盛に品物を輸出して居つた。併し佛蘭西の輸出して居つた品物は、絶對的の必需品ではなく、節しやうとすれば節するとの出来る品物が多かつた。奢侈品、贅澤品と云ふものゝみでもなかつたが、兎に角人間の生活には是非無なくてはならぬもの計りではなかつた。それ故に永續する事が出来なかつた。併し奢侈品に於ては今日でも佛蘭西が世界の市場を左右して居ると言つても宜い。婦人の衣裳、婦人の帽子などの流行は巴里が本になつて居る。其の他香水だとか、白粉だとか、石鹼だとか云ふやうなものは、巴里製でなくても巴里製だと言つて居る位であるから、さう云ふ品物は佛蘭西が大部分を輸出して居る。其の反對に英吉利は、是非無くしてはならぬ物を製造して輸出して居る。即ち十九世紀の前半に於ては、主として木綿製品を輸出した。棉花は英國内には産しないが、之を紡いで絲とし、織物として輸出して居る。之が最重要の輸出品で、伊勢は津で持つと云ふことがあるが、英國はマンチエスターで持つと云ふ有様であつた。マンチエスターは木綿工業の中心である。又羊毛も昔

は羊毛の儘で輸出して居つたが、後には絲として賣り出し、最後には織物として賣出して居る。而して十九世紀の半頃から第二の重要な輸出商品として鐵や鐵製品が激増した。衣物とか鐵とは云ふものは、人間の生活にどうしても無くはてならぬものであるから、斯う云ふ商賣は廢れることはない。

そこで英吉利は十九世紀になつてから、世界に向つて品物を賣る所の最大國となつた。英吉利の賣出す品物は總て實用品である、而も其の品は實用的に出來て居るから盛んに賣れる、賣れるから利益が殖えた。其の殖えた利益を唯だ富として積んで置かないで、生産的に使つて資本とし、工場を擴張するなり商品を殖やすなりして、益々商賣を盛んにするから儲かる、儲かるから富が増す、其の増した富を又資本として運轉するから、愈々儲かつて所謂成金になつた。若し不意の儲けが成金と云ふのならば餘り感服せぬが、英吉利の成金は歩一歩と着實に進んで行つて成金に成つたのであるから、容易に元の歩に返るやうなことはない。日本の此頃の成金のやうに、戦争の爲め僥倖に儲かつたのは、戦争が済むと又元の黙阿彌折角金に成つたのが、忽ち飛車に食はれてしまふ。英吉利の商賣は極

めて着實にやつたのであるが、それでも富の増加は非常なもので、一八一五年から一八六〇年代までには面白い程殖えた。さうして今日では世界第一の商業國である、工業國である、資本國であると言はれるやうになつた。

それなら英吉利は昔からの商業國工業國であつたかと云ふと、さうではなかつた。十六世紀から十七世紀に掛けては寧ろ農業國であつて、主なる輸出品は小麦、それに次では羊毛、絲にも織物にもしない所の毛を輸出したのである。さうして其の毛は白耳義だの佛蘭西に於て絲にし、織物にして、又英吉利に逆輸入したものである。又小麦は主に獨逸に輸出し、獨逸人が英吉利の小麦を食つて居つた。而も十五世紀頃の英吉利の外國貿易は皆獨逸人の手に在つた。獨逸のハンザ商人が英吉利の倫敦に大きな治外法權の居留地を有つて居つて、其處で商業をやつて居つた。其の跡は今でも遺つて居る、スチールヤードと言つて、可なり廣い所に城壁を圍らし、英吉利人一步も入るべからず、英吉利の行政英吉利の法律一切を拒絶し、獨逸のハンザ商人が外國貿易の實權を握つて居つた。であるから今日英吉利が世界金融の中心だと言つて居る、之に従事して居る所の人は、

當時獨逸若くは伊太利から來た猶太人の子孫が多い。ロスタアイルドを初めとして倫敦の金融市場に勢力を占めて居る銀行業者は猶太人が多數である。日露戦争の時に日本が頭を下げて金を借りたのも猶太人である。さう云ふ風で、十五六世紀の英吉利人は商賣も何もしない。小麦を作り羊を飼つて、之を倫敦に居る所のハンザ商人に賣渡した。丁度近頃まで日本では外國貿易と言ひながら、其の實横濱神戸に居る外國の商人と賣買して居つたと同様に、直接外國と取引することはしなかつた。所が十八世紀の末から十九世紀に至つては、小麦を輸出するどころではない、反對に輸入するやうになり、却つて工業品を賣出し、世界に對する輸出國となり、其貿易は英國の商人自ら之を掌るやうになつたのである。

所で英吉利の商業の方針としては、世界が開放せられて自由でありさへすれば宜い。世界の人が英吉利の商品を買ふのに、何等の制限、何等の束縛をも加へなければ宜しい、決して他の國を併合したり、植民地を澤山にすると云ふやうなことはしなくとも差支ない。品物を買つて呉れるのは皆お客様であるから、誰れでもお客様になつて呉れれば宜い。

無論お客様は動かないやうに常得意になつて呉れる方が宜いけれども、得意を縛り付けて、厭やでも買はせると云ふやうなことはしない。甲なり乙なりが買つて呉れなければ、丙なり丁なりに買つて貰へば宜いと云ふ風であつた。即ち捌け口を見付けさへすれば宜いと云ふのであるから、従つて商人の政府に望む所も、販路擴張の爲に盡力して貰ふだけのことであつた。外國の政府が英吉利に原料を賣つてはならぬとか、英吉利の品物を買つてはならぬとか言はないやうにして呉れれば宜い。或は維新前の日本のやうに鎖國主義を採つて、獨立の經濟を立て、居る所に向つては、其門戸を開き貰ふ、政治上の野心などは有たない、唯だ商業の自由に出来るやうにして貰ひたいと云ふだけのことであつた。これが即ち英國の開放主義、自由主義と稱するもので、門戸開放と云ふ語も此の時から盛んに行はれ始めたのである。此時代の最重要なる輸出商品はランカシャー州で作る木綿絲及織物であつた。マンチエスター市が其中心市場である。従つて此の自由貿易主義の中心地も亦マンチエスターであつた。經濟學上でマンチエスター學派と云へば、自由放任を主義とする學派のことである。或人は戯れに此學派を木綿學派と名けたが

其は大いに真相を得て居る。

斯くて英國は、世界の經濟的平和のチアムピオンとなつて、愈々門戶開放主義を以て商業を進めやうといふこととなり、他の國をして門戶を開放せしむるには、先づ自國から門戶を撤しなければならぬと云ふので、自由貿易主義を採用した。當時英吉利を風靡した格言は『賣らんと欲すれば先づ買はざる可からず』と云ふのであつた。商業の利益は賣るばかりが利益ではなく、買ふ事も亦利益になる。故に買ふ事も成るべく多く、賣る事も成べく多くし、而して賣つたものも儲け買つたものも儲ける。又先方に買ふだけの力が無い國であると、先づ此方から買ふ。買へば従つて先方に購買力が出來て、此方の品物を買ふやうになるから、結局自分の國の利益になる。それが即ち自由貿易の學說の根據である。此の自由貿易主義は一八四六年以來今日まで變らなかつた。

然るに斯く自分が卒先して自由貿易政策を採り、他の國も之に倣はんことを希望したが、何處でも眞似しないのみならず、英吉利から分れた所の亞米利加では、却つて反對の保護主義を採用し、英吉利の領地である加奈陀や濠洲に於てさへ自由貿易主義を採用しない。

唯だ此間に於て自由貿易政策を採らうとしたのは佛蘭西のナポレオン三世である。ナポレオン三世は大ナポレオンの遺志を繼いで、歐羅巴の統一をしやうと考へた。併し此の統一は那破翁のやうに、唯だ武力のみで覺束ないから、先づ經濟上の統一をしやう、經濟上の統一をするには、自由貿易で進んで行くが宜からうと考へて居る所へ、普魯西は獨逸關稅同盟の成立に就て佛蘭西に助力を求めて來た。其結果獨逸の關稅同盟は易々と出來上つた。故に獨逸關稅同盟は主義としてナポレオン三世の提唱した自由貿易主義を標榜した、是れが爲めに墺國は此同盟に加はらなかつたのである。獨逸帝國の成立當初も此方針を守つて、ビスマルクは着々自由貿易主義を實現せんとしつゝあつたのである。然るに千八百七十九年に至つて、之を一擲して保護政策を採るやうになつたのである。其は主として獨逸製鐵業の利益の爲めに起つた變化であるが、又た他帝國の財政上の必要にも促がされたのである。即ち英國の木綿學派の主張は、獨逸の製鐵業の爲めに打破せられたのである。而して此變化は獨り商業政策の上にのみ止まらない、世界經濟の根本問題に觸れて來るのである。而して英國自ら亦た其自由貿易主義に大なる變化を

被むるようになったのである。其は何であるかと云ふと、一面には英國の富が段々殖え、従つて資本が有り餘るようになった。従來の商品輸出國たる外に、更らに英國は大なる資本輸出國となつた爲に、單に商品の輸出さへすれば宜しいと云ふ自由貿易主義を一貫することが出来なくなつた故である。他面には其輸出商品も單にマンチエスターを中心とする木綿糸及織物のみでなく、製鐵業の製品を澤山輸出するようになり、従つてマンチエスターと相並んでバーミンガムが重要なる中心となり、其バーミンガムはマンチエスターの自由貿易主義に反対し始め、彼の有名な帝國主義の大使徒チアムパーレオンを代表者として英國經濟政策の根本的變化を絶叫するようになったのである。次の二節に於て此變化を少し説明して見よう。

五 偉大なる資本の増殖

英吉利が自由貿易主義に依つて、自國の商業の發展を圖つた時に出來た諺に、『貿易は國旗に従ふ』と云ふのがある。と云ふのは、海軍の勢力の及ぶ所に其の國の商業が行は

れるのであるから英國の海軍は單に國防と云ふことばかりでなしに英國の商品の販路擴張の爲にも進んで行かなければならぬ。外交と云ふものも、何の爲めに外國との交際を圓滿にして行くのかと云ふと、畢竟貿易を援くるが爲めである。世界が平和に治まり文明が發展すれば色々の物の需要が殖える、需要が殖えれば賣る品物も買ふ品物も多くなる。殊に英吉利の商品は、佛蘭西の商品のやうに使はずに居れば居れると云ふものではなく、文明の生活には是非必要の物ばかりであるから、英吉利の商賣の利益は、世界の平和と一致すると云ふのである。従つて外交の方針も勢ひ世界的平和主義、世界同胞主義と云ふことにならざるを得ない。

そこで英吉利が海外の貿易を發展して行くのには、自由貿易主義門戸開放主義が最も都合が好いので、此の主義を弘める爲には、先づ隗より始めなければならぬと云ふので、國內に於ける政治上のことに就ても着々自由主義を採るやうになつた。殊に政府が人民の生活に干渉することは自由の精神に反する、それも巧く行つた時には宜いが、下手に行つた日には色々の面倒な問題が起つて、國內の政治上の困難の爲に、外國に對する貿易に

支障を生じてはならぬ。殊に國が富んで居ると何等の問題も起らぬが所謂貧すれば鈍するで國が貧しくなると財政が困難になるから政府と人民との間に争も起り、増税案を否決するとか、豫算案を削るとか云ふことになる。富が殖えつゝある状態にあると、財政上の問題などは直ぐ解決し、又同じ争ふにしても、其の争が下劣でなくなる。英吉利は富んで来た状態にあるから、財政上困つたことがないとも言へないが、大體に於て順調であつて、無理なことをする必要もなかつた。それが爲に國內の政治に於ても經濟に於ても、自由主義、放任主義、不干涉主義が行はれて来たのである。

所で英吉利と言へば、多くの世の中の人は自由主義の本家本山だと云ふやうに考へて居るけれども、昔からの自由主義の國ではなかつた。十九世紀の中葉自由貿易主義を採用するまでの英吉利は寧ろ保護主義であつて、殊に十七世紀の頃まで否十八世紀に入つても色々煩瑣なる法律を設けて、農業にも商業にも工業にも干涉を加へて居つた。然るに英吉利の生産殊に木綿製品が段々外國に賣れて、富が増して来た結果、自由主義が行はれるやうになり、政治も二の政黨が對立して、一方が朝に立てば一方は野に下り、さうして

在野黨は政府を監督し、又問題が起れば政府を鞭撻し、若し時の政府が輿望を失へば、是れまでの在野黨が代つて政權を執る。大體に於て國內の事は人民の自由活動に任せ、政府の爲す事は至つて少くなつて居るから、保守黨が内閣を取らうが自由黨が多數にならうが、國の政治は少しも阻害せらるゝことなく圓滑に行はれた。是は英吉利であるからかう行へたのであつて、英吉利の如き状態でない所の國が幾ら英吉利の政黨政治の眞似をしやうとしても巧く行く筈はない。例へば日本の如くに何でも彼でも政府が引受けてやつて居る國では、政府が代る度毎に色々なことが變るので、吾々の生活にまで影響を及ぼして来る。多少は不都合であつても、一貫の方針でやつて呉れ、ば宜いものでも、政府が更ると前の方針を棄て、新しい方針を採る、其の度に國民は損害を受ける。所が政府のすることの少い國では、さう云ふ事がないから、何れの政黨が政府に立つても國民は迷惑を感じない。是が英吉利の自由主義の利益とした所で、又今日の富を致した所以である。所が英吉利が商品を世界に賣出して富を得、其の富を又資本にして生産し、其の品物を賣出して儲けるから、富を資本として使ひ切れなくなつた。富は使ふから資本になるの

で使はなければ資本にならない。けれども亦使ふには使ひ途があるから使ふのであつて用途がなければ使ふことが出来ない。所が英吉利は工業が盛であり、商業が盛であり、海運業が盛であり、有らゆる事業が盛であつて、資本を要することも多いが、其の要するよりも入つて来る方が尙多い爲に、資本が餘つて使ひ切れぬ。それなら餘つて使へない位なら資本を作ること止めたら宜からうに、止めることも出来ない。多年の習慣で色々の事業をやつて居るから、増さうと努めずとも富は殖える。けれども其の殖えた富を資本として利用する途が段々少くなつた。

そこで第一に起つた問題は、資本の價が下落したことである。經濟上の理法に従つて物が殖えれば安くなる。資本も少い時には高いが多くなると安くなる。資本が安くなると云ふことは、詰り金利が安くなると云ふことである。利子と云ふのは資本使用の代價である。資本の價と言つても、資本其れ自身に價のあるものではなく利息が即ち價である。であるから文明國程利子が安く、未開の國程利子が高い。國が開けて來れば來る程金利は下つて來る。是は世界各國を通じて誤りなき所の理法である。其の反對に土地

と云ふものは文明が進めば進む程國が富めば富む程、人口が殖えれば殖える程高くなる。何となれば、資本は幾らでも殖やし得るものであるが、土地は殖やすことの出来ないのが特色である。海を埋立てるとか、不毛の地を開墾するとか云ふことに依つて、幾らかは殖やすことが出来るけれども、地球の面積には限りがあるから、それ以上には殖えない。又國の領土と云ふものも、戦争に依つて新に獲得するとか、併合等に依つて擴張すると云ふやうなことはあるが、其の外には殖えて來ない。然るに土地を使ふ人口は段々に殖えて來る。人口が殖えれば穀物を餘計要する、従つて耕作面積を殖やさなければならぬ。けれども土地の面積を殖やすことは出来ないから、一定の土地に資本を多く掛けて土地を改良する、或は耕地整理をやるとか、肥料を多く施すとか、或は灌漑の便を開くとか云ふことで、一段歩の收穫を多くする、其の結果土地の價が高くなる。土地の價が高くなると云ふのは、詰り地代が高くなると云ふことである。だから文明の度が進んだ國程地代は高い。尤も稀に例外が無いでもない。例へば今まで繁華であつた地方の町が、鐵道が出來て停車場が其の町から離れた所に出來た爲に、其の町の地價が著るしく下つたと云ふや

うなことはあるが、大體から言つて、土地の價は文明の進むと共に上つて行く傾向を有つて居るものであると斷言して差支ない。

そこで英吉利に於ては近年土地の價が高くなつて、資本の價は大變安くなつて來た。即ち金利が下落して來た。現に戦争の始まる前の英蘭銀行の公定利率は二分と云ふ所を動かさなかつた。戦争の始まつた後は五分とか六分とか僅かの間ではあるが、一割にまでも引上げた。それは開戦の當時金が出て行く一方であつたから、それを引止める爲に、政府の命令で一時に一割に迄引上げた。けれども英蘭銀行の公定相場が一番低い。それより安い利子は、他に全く例が無いと云ふでもないが、先づ一番安い。故に英蘭銀行の利率が一割になると、民間の銀行の利率は一割二分或は一割二分五厘と云ふ位になる。所で戦争前に於ける公定率が二分と云ふ非常な低率になつて來た結果、内外に於て二つの作用が起つて來たのである。

資本の安くなつた爲に、國內にはどう云ふことが起つたかと云ふと、資本以外に資本と一緒になつて生産に従事する者の所得が殖えたことと云ふことになるのである。生産には、土地資本、労働、企業、此の四つのものがなければならぬ。土地を所有する者を地主と謂ひ、土地の價を地代と云ふ。資本を有つて居る者は之を資本主又は資本家と謂ひ、其の得る所のものを利子と云ふ。労働は労働者が之を爲すのであつて、其の得る所のものを賃銀又は賃銀と名づける。企業は企業者或は企業主と稱する者がするのであつて、其の得る所のものを利潤と名づける。利潤と利子とは似たやうなものであるが、其性質は全く違つて居る。例へば茲に一萬圓の總収益があつたとする。總収益は學者によつては國民所得とも云ふ。此の總収益はどう分たれるかと云ふと、地主は地代として貰ひ、資本主は利子、労働者は賃銀として貰ひ、一番最後に残つたものが企業者の利潤となるのである。所で此の中の利子が安くなつた結果は、英吉利に於ては國民の大多數を占める所の労働者の所得、即ち賃銀が大變に殖えて來た。是は場合に依ては賃銀は餘り殖えないで、利潤ばかり殖える事もあり、或は餘り地價が騰貴すれば地代が一番上ることもある。英吉利は十九世紀の後半には地代も上り利潤も殖えたけれども、利子の下つた恩澤が一番餘計に誰れが受けたかと云ふと、労働者である。労働者の得る賃銀が全體としては勿論、一人

當りの平均額も殖えたのである。この賃銀と云ふものは、大體に就て云ふと、殖えれば殖える程勞働の能率が高まるものである。勞働者と云ふものは、多くは一ぱいの生活をして居るのだから、少しでも所得が殖えれば其の生活の改良が行はれる。自分の身體も強健になれば健全なる子孫を生むことにもなり、勞働の能率が高まる。即ち英吉利に於ては資本の安くなつた結果、直接生産の上に於て能率が高まり、其の結果は又利潤として得るものも殖えて來た。例へば一萬圓の總收入の中から地代を百圓、利子を五百圓拂つたとすると九千四百圓残る。其内賃銀として八千圓拂ふと利潤千四百圓となる。所が利子が下落して二百圓で済むこととなり、其れだけのものを勞銀の方に増す事になると、利潤は變らないが勞働者の所得は八千三百圓となる。然るに其結果勞働の能率が高まつて一萬五百圓だけの収益を得ることが出來たとすれば、結局利潤は千九百圓となり、勞働者も利すれば企業者も利する、更に大きく言へば國全體が利すると云ふことになる。であるから企業者は増し得る程度までは勞銀を増してやるが宜い。増してやる餘裕があるに拘はらず、増してやらないからストライキなどが起るのである。英吉利には勞働者

の利益を保護する爲に勞働組合が發達して來た。勞働組合と云ふ團體を組織して、勞働者の地位の改良を圖つて居る。利子が安くなつて賃銀を上げて呉れと言へば、上げて呉れ得るだけの餘裕がある。畢竟英吉利で勞働者の賃銀が高くなつたのは、富が殖えて資本の利子として拂ふものが少くなつたからである。

資本が多くなつて利子の下ると云ふことは、企業家や國家が利するばかりでなく、資本には直接に權利を有つて居ない所の勞働者まで利することになる。それ故に勞働者は勢ひ資本の殖えることを望むやうになるから、自然に資本と勞働との調和が出來て來るのである。唯資本家と勞働者の調和を圖らうなどと言つても出來るものではない。殊に日本のやうに唯道德的の說法をして勞働と資本との調和を圖らうなどと言つても、到底行はれるものではない。道德的の教も實行の出來るやうにして說法すれば、それに服し効能もあるのである。實行の出來ないやうな状態では、幾ら小言を言つても、そんな小言は頭の上を飛越して些とも効がない。成程資本主と勞働者とは、利害の一致しない所が幾らもあるけれども、大體に於て資本の増加は勞働者の利益となることは動かす可

ざる事實である。獨り労働者の利益に止まらず資本の利子の安くなると云ふ事は、事業の上から言つても、又は利益を得ることを目的とせざる公共事業、若くは宗教、學問、慈善事業、社會政策の事業等にまでも影響を及ぼすのである。資金の無い爲に若くは利子の高かつた爲に起らなかつた事業も、利子が安くなり、容易に資金が得られるやうになると起つて来る。例へば金を借りて學校を立てやうと云ふ場合には、利子が五分も六分もの時には、到底維持の見込が付かなかつたが、二分で借りられれば、授業料の収入で支辨して行かれると云ふので學校が出来る。或は學術上の會合にしても其の通りである。或は資本が殖え富の力が強くなるのは、國が拜金宗になつていけないと言つて、之を攻撃する人は英吉利にもある。例へばラスキンとかカーライルなどは大に資本の殖えることを呪つた。如何にも資本には悪い半面が確にあるけれども、拜金宗になることのみが資本の特色ではない。否、資本は其の他の方面に於て非常に靈驗顯著なる神様である。資本を得た爲に、其の利益に浴する人もあれば、資本が多くなつて利子が安くなつた爲に利益を受ける人は一層多い。何となれば、資本は使ふから資本であつて、使はなければ資本でない。

い、故に資本を貰つただけでは後の利息を拂はなければならぬ。一時資本を貰つたと云ふことよりも、利子の安いと云ふことの方が遙に有難い。人類文明の理想は、一は資本の利子を安くすることにある。若し與ふべくんば無利息にもなりたい、併し全然無利息と云ふ譯には行かないから、殆ど無利息同様に資本を使へることが文明進歩の理想である。而して英吉利の如きは餘程それに近い。反對に日本の如きは、資本に對する需要は甚だ多いが、供給がそれに伴はないから、資本は高い、即ち利息が高い。利息が高いから餘程儲かる事業でなければ、資本を借りて始めることが出来ない。又折角事業を始めても、利子が高いために、利子を拂ひ地代を拂ひ賃銀を拂つてしまふと、企業者の利潤、即ち儲けが無くなる。儲けがないから、勢ひ無理もやる、不正のことも出て来る。商業道德の低いと云ふことの原因は、一は資本の足らないと云ふ所にもあらうと思ふ。故に唯商業道德を高め、工業道德を高めると言つても、是亦無理な註文である。高い利息を拂つて居る者が、安い資本を使つて居る者と競争することになるから、ツイ讎詰に石を入れることにもならうし、齒車の缺けた時計を輸出することにもなる。それは如何にも不都合千萬の話

に違ひないから、商業道德の説法も必要であるが、資本の供給を潤澤にすれば、自然それらの弊は改まるものである。英吉利の商業道德の高いのは、確に資本の供給が潤澤であるからである。

此資本の高い安いと云ふことは、經濟上の關係ばかりでなく、一般の國民道德の上にも大なる影響を及ぼす。資本の高い國に於ては、利子として引去られる國民所得の割合が多い。さうして其代りに誰が頭を叩かれるかと云ふと、地主は取だけ取らなければ承知しない、企業者は相當の利潤がなければ天から仕事をしない、さうすると残る所は一番弱い労働者である。國の財政でもさうである、財政の裕な時には宜いが、財政が逼迫し來ると、各省の豫定經費を集めて大藏省で査定する時に、どう云ふ所が叩かれるかと云ふと、別に査定の方針がある譯ぢやないから、一番勢力の無い所から査定する。先づ文部省等は何時にも眞先きに叩かれる。例へば日清戦争の後で出來た教育基金等は、何より一番先きに使はれてしまつた。何でも抵抗力の少い所が叩かれる。そこで生産の上に於て一番抵抗力の少いのは労働者である。彼等は數に於ては多いが、一人々々の力は洵に微弱

である。資本主に對しても、企業主に對しても、對等に當つて行くことが出來ないから、資本の高い國に於ては労働者の得る賃銀が少い。賃銀が少いから其の生計が苦しい。生計が苦しいから労働能率が低い、即ち生産力が其だけ鈍い。生産力が鈍いばかりでなく、子供を生んでも、それを育てることが十分でなく、親の體質が弱いから、従つて死亡率が多い。一家の中でも、穢く人は食べる丈は食べなければならぬから、やはり一番抵抗の弱い人が犠牲となる。其は女である、女の營養を悪くする。婦人の體力が衰へて居るから、自然生れる子供も弱い、生れてから直に死ぬ者が多い。最近の歐羅巴の人口増加の割合と比べて見ると、日本の出生の率は割合に殖て居るが、死亡率も中々高い。歐羅巴に於ては、出生率も減つて居るが、死亡率が大に減つて來たので、差引人口増加の割合は、少しは減つて來たが大體に於て變らない。之に反して我邦は死亡率が非常に高く、而も其の死亡率の内容を吟味して見ると、子供の死亡率も高いが、特に青年期、壯年期、即ち十五歳から五十歳までの死亡率が最も高い。其の内又男と女とに分けて何方が高いかと云ふと、女の方が大變高い。其の高い原因を調べて見ると、女子には出産と云ふことがあるから、この婦

人特有の原因から死ぬ者が多いかと云ふと、是は外國と比べて左程多いのではない。だから女子は出産の爲めに多く死ぬのでなく、他の病氣で死ぬ。其の病氣の内容に就て、内閣統計局の二階堂君が調べた結果に依ると、結核性の病氣で死ぬ者の割合が最も多い。是は男に於ても同様であるが、二十五歳までの青年期に於て、結核性疾患の爲に死亡する割合は、英吉利や獨逸に比べると非常に多い。同じ日本の中でも、都會と地方とでは何方が多いかと云ふと都會が多く、職業別で言ふと纖維工業に従事する者に多い。即ち營々として國の爲に富の増殖をなしつゝある日本の纖維工業、即ち紡績業、製絲業、織物業等に従事する所の婦人の數の多いと云ふことは大に寒心すべきことである。死ぬ者が多い位だから、死に至らずして病牀に苦しんで居る者も少くなからう。此の年若き第二の國民を造る所の婦人の死亡率が、斯くも多いと云ふことは、日本の將來に取つて大に寒心すべきことである。露西亞と比べれば、日本の方が宜いか知れぬが、他の聯合國と比べると、我邦が一番悪い。嘗に工場に働く婦人ばかりでなく、下層社會に於ける婦人の營養が甚だ悪い。結核性疾患は傳染病ではあるが、唯れにでも感染すると云ふものではなく、之に犯

され易い體質がある、それは營養不良と云ふことが主なる原因になる。日本の婦人は僅かな物を食つて男子に壓迫されて働いて居る。其の柔順は如何にも敬服の至りであるが、敬服して居る間に段々國民の體質が悪くなつて来る。此頃の新聞に郵便配達に女を使つたらどうかと云ふやうなことが見えだが、郵便配達に女を使はなければならぬ程日本は困つて居りはせぬ。女は賃錢が安いからと云ふが、安い賃錢の者を使はねばならぬと云ふのは、他にも原因があらうが、資本が高いと云ふことも大なる原因である。英吉利は國內に資本が澤山ある爲に賃銀が高くなつて、労働者の健康状態、道德状態が良くなつた。英吉利の貸付利子は、戦争前までは二分とか二分五厘、高くも三分であつた。斯様に利子が安いと云ふことは、國內に資本が有り餘つて居るからばかりでなく、最早や企業の餘地もなくなつたからである。尤も英吉利も十九世紀の半ば頃までは資本が足らない爲に起したい事業も起せなかつた位であるが、今日では起すべき事業も無い爲に、一層資本が餘つて來た。そこで最早此上國內では資本を使ふ餘地がないから、勢ひ外國に向つて輸出するやうになつた。これ即ち英吉利の國情が最近に至つて一變した所以である。

六 資本輸出國としての英國々情の變化

十九世紀の半ばに於て完成した自由貿易主義に依つて、英吉利は世界最大の商品輸出國たるを國是として、政治も行はれ、外交も行はれ、海軍も其の方針を以て計劃せられて居つた。其であるから『英吉利人は商賣人國民である』(Nation of shopkeepers)とさへ呼ばれた位である。所が今日ではさうでない、商賣もして居るが、商賣一方ではなくなつた。商品も輸出するが、商品の外に今まで國內で使つて居つた所の資本を盛に外國に輸出する様になつた。現に大藏大臣ロイド・ジョージが議會に於て報告した所に依ると、一九一五年に於ける英吉利の外國に對する投資額は、約四十億磅(我が約四百億圓)に上つて居ると云ふことである。日本は戦争以來大變儲かつた、正貨が九億圓に激増したなどと言つて喜んで居るが、英吉利では外國に對する貸金が四百億圓もある、又其の利子として年々二億磅即ち二十億圓程の品物なり金なりは、何をしないで入つて来る。一品も海外へ賣出さないでも、それだけの品物なり金なりは年々英吉利へ入つて来ることになつて

居るのである。

更に英吉利全體の一箇年の國民所得、即ち英吉利人全體が國內に於て一箇年にどれ位の富を作出して居るかと言ふと、概算ではあるが二十四億磅(約二百四十億圓)と云ふことになつて居る。故に海外投資の収益は其の十二分の一に當つて居るのである。所で商品は一度賣つて其の代價を取ればそれ切りであるが、資本はさうではない。資本は一度輸出すると、それが逆輸入して来るまで、即ち償還を受くるまでは利息となつて年々入つて来る。それは砂糖になり、茶になり、肉になり、小麦になり、様々の品物につて来る。日本の借金の全體は近頃では大分減つたが、戦争前までは約二十億圓程であつた。之が返済に就てはどうしたら宜いかと言つて大騒ぎをして居たのだが、英吉利にはそれだけの金が、何もしないで唯だ借用證文を懷中に入れて居るだけで毎年々々入つて来る。是は資本を輸出して居る賜である。

そこで英吉利は、資本が益々増加して仕様がなから、どうかして其の捌口を求めやう、骨を折つて商品を描へて輸出するより、資本を一たび輸出すれば、後は年々利子として入

つて来る。これ位楽なことはないと云ふので、どしどし資本の輸出を始め、国内で使へば使へる分までも輸出するやうになつた。国内に於て使へば三分か三分五厘にしか廻らないものが、之を外國に輸出すれば五分にも六分にも一割にもなるから、争つて海外に放資しやうとする。それは如何にも結構のことである。結構ではあるが、餘り結構過ぎて結構ならざることが起る。と云ふものは、國內の産業に昔のやうに緊張した氣分が漂はなく、なつてしまつた。それが即ち英吉利が獨逸より弱くなつて來た所以である。獨逸は一八七〇年に帝國となつて以來、非常の勢を以て發展し、總ての事に於て英吉利に對抗して來たが、其最も發達したのは第一に製鐵業である。是は英吉利に於ては木綿工業に次ぐ最重要の工業であつて、他國が競争を企てゝも及ぶものでないと威張つて居つたが、戦争の始まる前頃には、獨逸の製鐵工業は英吉利の製鐵業の壘を摩するに至つた。化學工業などに至ると、壘を摩するどころではなく、獨逸は既に英吉利の及ぶことの出來ない程度にまで進んで居つた。例へば化學染料の如きは、元は英吉利で發明して之を獨逸に傳へたのである。然るに獨逸人は更に進んで學問的に研究し、逆まに英吉利に供給して居つた

から、戦争が始まるや否や、染料缺乏の爲に英吉利は非常に困つたのである。獨逸が斯様に發展して來たのは、無論一面には非常に奮勵努力したのであるが、一面には英吉利の進歩が以前の如くでないと云ふこともある。其の結果獨逸の國力は駭々として進み、從來非常に懸隔のあつたものが、餘り著しい相違がないやうになつた。是は獨逸が進んで來たばかりでなく、英吉利の進歩が以前の如くでなくなつた爲である。

と言つて英吉利人其者が劣つて來たと云ふ譯ではない。英吉利人は昔と少しも變つて居らぬ。又産業の發達を沮害するやうな政治上の原因もない。否、英吉利は次第に文明に向つて進みつゝある。體質に於ても心理上に於ても、以前と比べて墮落した所がある譯ではないが、唯だ經濟上の努力が衰へたのである。それは何う云ふ事かと云ふと、以前は商賣を第一として、何でも良い品を安く拵へて、自分の國の品物を成るべく多く賣らうと云ふことに全力を注いで居つた爲に、國の富が非常に殖え、資本が豊富になり、利子が安くなつた。利子が安くなつても、それを國內で使つて事業をやつて行けば、益々産業が發達するのであるが、資本を外國に輸出すると云ふ巧い抜け道が出來た。外國へ資本を

輸出すると利息が入つて来るから、結構のやうであるが、今度は利息の關係で、國內で要る所の資本迄も外國に出て行くから、自然産業の進歩が衰へるやうになつた。それは品物を持へて外國に賣らないでも、利子としてそれだけのものが入つて来るのだから、同じではないかと言ふかも知れないが、決して同じではない。個人にしてもさうである。骨を折つて働かなくとも、自分には貸金があるから、其の利子で遊んで食つて居ると云ふ人は、一番不幸の人である。又國から言へば一番厄介な人である。成程今日の社會の定めから言へば、利息を取るだけで少しも働かず、贅澤の仕放題をし、自動車飛ばし、酒食に耽つた所で、刑法に觸れる譯でもなければ、社會上何等の制裁がある譯でもない。併ながら經濟上の眼から見れば、是れ位不埒なことではない。而も彼れ自身が千辛萬苦して作り上げた財産で、其利息を以て道樂するのならば、まだしもであるが、親の身代を相続して自分は少しも働かず、社會にも何等の貢獻する所がなく、唯だ利息があるからと云ふだけで、多數の生産者が粒々辛苦して作ったものを消費すると云ふことは、社會の大なる公敵である。若し斯う云ふ者が國內に殖えたならば、最早や其の國は進歩の見込がないと言つ

て宜い。

所が英吉利は段々さう云ふ風になつて来たから、差當つての生活が樂になると共に、色々の遊戯が行はれるやうになつて来た。テニスが流行るポートルレースが流行る、やれ競馬だ、マラソン競争だ、オリムピックゲームだと云ふやうなことで、非常な金を使つて様々の運動をやつて居る。それは働かなくなつたから腹ごなしの爲めである。働いて居れば、殊更に運動などはしなくとも、身體が丈夫になる。マラソン競争などをやる代りに、肥桶でも擔ぐなり、車を牽くなりして働いて居れば、運動にもなり同時に社會の爲にもなる。其であるにも拘はらず、近來日本にも大分斯う云ふ遊び事が流行つて来た。何も遊戯が悪い運動がいけないと云ふ譯ではない、時には遊戯をやるも宜いが、日本のやうな借金國、是れから益々奮勵しなければならぬ國民が有り餘つて居る英吉利などの眞似をして、學校までも休んで、ワイフ言つて彌次ツたり騒いだりして居るのは、實に馬鹿々々しい話である。英吉利にスポーツが流行ると云ふことは、好い所が少しも無いとは言はないが、悪い所が甚だ多い。所謂高等遊民の多いと云ふことは、決して國の利益でない。又英吉

利の政治が巧く行つて居る、政黨政治が巧く行はれて居ると云ふが、英吉利の議員は大抵金持で、遊んで居る代りに政治をやる、議會に出るのは腹ごなしの積りで出て居る。政治を職業のやうにすることも怪しからぬ次第であるが、政治を道樂にされることも甚だ困る。一方に職業を有つて實際に働いて居る人が、議會に出て國の政治を議するから眞面目の議論が出る、道樂にやつて居る者が多いと、騒ぎや彌次が主になる、其の他種々の弊害も生ずるのである。

英吉利は資本の輸出國となつて大變結構であつたが、餘り結構過ぎて魔が差して來た。勿論英吉利人自身には、魔が差したことは分らなかつたが、其の魔の影は獨逸と云ふ鏡に映つた。獨逸の進歩と云ふものは即ち英吉利のダレたと云ふことを半面に現はしたものである。英吉利人は獨逸が色々なことをして、自分の勢力範圍を脅かし、自分の邪魔ばかりして怪しからぬ、カイゼルが悪い、獨逸が不埒だと言つて居る。それは獨逸の悪い點もあるけれども、半分は英吉利に悪い所がある。それが獨逸の發達と云ふ鏡に映つて來た。それも戦争前までは氣が付かなかつたが、さて戦争をして見ると、一揉に揉潰せるだ

らうと思つた獨逸が、三年掛つても容易に揉潰せさうにもない。是は獨逸が強いと云ふばかりでなく、英吉利が弱いのである。そこで英吉利人も自分の弱いと云ふことを染々覺つた、さうして何故弱くなつたかと云ふ原因を色々研究して見ると、小さな點は除いて、大きな所だけに就て見るに、大體に於て獨逸よりも英吉利の方が優つて居る、道徳に於て政治に於て、其他色々點に於て優れて居るが、唯だ一つ經濟上の原因に於て劣つて居る。其の事は最近有識者は自覺して來たやうであるが、一般の人はまだ自覺して居らない。總ての英吉利人が之を自覺するやうになれば占めたものである。

そこで之れを自覺した人々は、大いに之れを憂慮して、頻りに大騒ぎをし、國民勤儉野戰 (National economic campaign) 杯と言つて大に一般の民心を警めて居る。其が爲め先頃總理大臣アスキスのお嬢さんの結婚の式に、三鞭を抜いて客に饗應したのは贅澤だとか、バルフォアにグラスゴー市の名譽市民の免狀を贈つた其の免狀を金の函に入れて贈つたのは、勤儉の主旨に反して居るとか言つて問題になつたことさへある。如何に戦時とは言へ、僅か一箇の金の函、幾層かの三鞭を、英國としてそれ程大問題にするにも及ばな

いことであるが、さう云ふことを眞面目に唱へて、國民の自覺を喚起しやうとして居るのである。

話は再び元に戻るが、英吉利が資本輸出の國是を採つたのは左程古いことではなく、先づ三四十年以來のことである。さてさうなると英吉利の外交英吉利の海軍、其他一切の政治が、今までは商品の輸出を主として居つたものが、資本の輸出を本位として働くやうに變つて來た。即ち「貿易は國旗に従ふ」でなく、「資本は國旗に従ふ」と云ふ事になつて來た。商品の輸出を主としてやつて居つた時代には、英吉利の品物を買つて呉れさへすれば宜いので、お得意を作つてお客様の購買心を唆るやうに仕向け、それに對して外國が妨害を加へれば、夫は戦争をしても仕方がないが、さうでない限りは先方の自由にして置く。例へば支那に對して阿片を賣付ける、支那から言へば甚だ迷惑の話であるが、英吉利から言へば何でも賣付けて利益を得やうと云ふのであるから、之を妨害しやうとすると、忽ち戦端を開いて香港を占領してしまつた。兎に角商賣が主であるから、商賣が出來て居れば、決して他の國を侵略するとか占領するとか云ふことはしない。英吉利は現に植

民地を澤山有つて居るけれども、大體に於て其の植民地は、商品輸出時代に出來たものではなく、其の以前に出來たのである。商品輸出時代は、自由貿易世界平等主義であつたから、領土の擴張は餘りしなかつた。又植民政策と云ふことをも積極的にはしなかつた。加奈陀に對しても濠洲に對しても、本國は餘り干渉しなかつた。唯だ、印度だけは政治上、人種上から嚴重にする必要があるが、其の他に於ては成べく自由を許すと云ふ方針を採つて來た。是は世界各國に取つて洵に好い事であつて、若し英吉利が當時侵略主義併呑主義を標榜して働いた日には、今日と違つてもつと澤山の國が英吉利に併呑せられたに違ひない。所が英吉利が少くとも世界的には侵略主義を採らなかつたら、其が世界全體に及んだ。何となれば英吉利を除けて他の國が侵略主義を採らうと思つても、英吉利が承知しない限りは行ふことが出來ない。亞米利加にせよ、佛蘭西にせよ、獨逸にせよ、其國力が英吉利より何れも遙か下に在つたから、英吉利の承知しない侵略主義は何れの國も採ることが出來ない。それが爲め十九世紀の半ば過ぎ頃までは、侵略主義は世界の表面から影を隠して、平和主義が世界を支配して居た。

所が茲に自から變化を惹き起さずして已む能はざる事情が起つて來た。其はマンチエスター中心の木綿工業に代るに、バミントン中心の鐵工業が起つて來た事である。鐵製品の輸出が段々重要を得るに従つて、商品輸出の國是が段々資本輸出主義に變じて來た。木綿製品は比較的廉價なもので、其代金を直ちに回收することが出来るが、鐵製品は機械なりレールなり、何れも多くは高價のもので、その代金を右から左へ取るわけに行かぬ、又木綿製品は直接の消費品であるが、鐵製品は原料品又は生産要具である。即ち其性質は資本となるを要するもので、而して賣捌代金を掛けにする必要があるから、英國の商人から云へば單なる商賣でなくなつて、資本の貸付けの形を取るようになり、買ふ方は、品物の買入れと云ふよりも、寧ろ資本の借入れと云ふ姿になる。此れ鐵製品輸出時代は資本輸出時代に移り行く根本的理由である。而して段々資本貸付の純粹の形に移つて行く品物を輸出するには、唯買つて呉れさへすれば宜い。さうして一度得意にしたと言つても、若し其得意に面倒が起れば、他へ行つて賣りさへすれば宜い。トコロが資本の貸付の形となるとさうは行かない。一度輸出した資本に對しては、利息を取らなければならぬ、又何年かの後には元金も返して貰はなければならぬと云ふやうに、關係が永續的になつて來るから、支那に賣れなくなれば印度に賣る、印度に賣れなくなれば日本に賣ると云ふやうな工合に行かない。そこで成るべく先方の自由を尊重して、唯だ品物を買つて呉れ、ば宜いとばかりは言つて居られぬ。一度資本を貸付けた上は、其國を屬國にしないまでも、自分の勢力範圍の下に置き、其處で起る政治上なり經濟上の事件はどうなつても、貸付けた資本が害を被らないだけに、絶えず注意をして居らなくてはならぬ。レールを掛で賣れば、鐵道敷設の面倒を見るは勿論、其鐵道が収益を擧げるやうに絶えず監視するを要する。其の結果自由貿易主義では行かない。自由貿易主義が悪いのではない、英吉利の國情が自由貿易主義では行かなくなつたのである。品物賣渡の貿易の時代には、相手の國が買つて呉れ、ば宜い、先方で出来る品物は、此方は買つても買はないでも、世界中を通じて勘定が立てば宜いと云ふのであつたが、資本を貸付けた鐵製品を掛けて賣つた上は、萬一の場合には其國の品物を自分が背負ひ込まなければならぬから、成るべく自分の使へるやうな品物を作らせなければならぬ。だから生産にも關係するや

うになる。或は自國と利害の衝突する國に其の生産品を送られては困るから、先方の品物を此方に取り、又此方の品物は成るべく買はせるやうにしなければならぬ。従つて是れまでのやうなお客扱ひでなく、もつと深い關係に立たなければならぬやうになる。又品物を賣る時代には、利益の種類が賣の利益と買の利益との二種だけであつて、又一度限りの關係であつた。所が資本の輸出になると、其資本は金でなく品物で行く。英吉利が資本を輸出する時には、英吉利で出來た機械なり、レールなり、色々な品物になつて出て行く。それも直接に其國に行く斗りではなく、例へば英吉利が日本に賣つた金を支那に貸すと云ふことになる。英吉利が造つた品物は支那に行くのでなく、日本に來る、さうして日本で出來たもつと粗末な品が支那に行く、其の代は英吉利から借つて拂ふと云ふことになる。であるから、資本の輸出と云ふのは直接に金が出るのでなく、品物が出る。従つてその賣つた利益と、日本に代金を拂つた金の利息と、最後には其元金とが英吉利に入つて來るのである。而して其利益も利息も元金も、金が入つて來るのでなく、品物で入つて來るのであるし、又買の方の利益もある。それから今一つ外國の事業の資金として投下してある

ものもある。是は利息ばかりでなく、事業から生ずる利潤も取る。例へば日本で水力電氣を起す爲に、英吉利の共同出資を求めたとすると、其水力電氣の年々の配當を取る。配當は利子の外に利潤が加はつて居るから利益が殖える。利子ならば五分か六分のもものが、九分とか一割とか、若くはそれ以上の収益を得ることになるのである。

そこで英吉利の外交は、國外に於ける投資の保護を大方針とするやうに段々變つて來た。英吉利の大使公使は表面は英吉利の名譽を護り、英吉利國全體の利益を代表すると云ふのであるが、實際は英吉利の資本家が外國に向つて投下したる資本を擁護することが主たる任務となつて居る。殊に領事の如きは、明かにそれが任務である。以前のやうに商品の販路を擴張することを主とせずして、外國が英國の資本を借りるやうに仕向け、又貸した上は、何處までもそれを擁護するのである。商品の輸出時代には、英吉利の品物の賣れるやうに、例へば英吉利の石鹼の効能を知らない人に向つては、之を使つて御覽なさい、安くて徳用で、工合が好いと言つて、盛に廣告し、販路を擴張してお客を自分の方に引付け様とした。單にお客を引付けるばかりでなく、お客を拵へる。文明の商賣は客の來

るを待つばかりでなく、客を作るのである。商品の製造をすると共に、一面にはお客の製造もする。例へば三越などでは美しいカタログを配つて、三越の物をお買ひなさい、三越の物を買はなければ文明人でないなどと言つて人の購買心を唆る。そこで買はうと思つて居なかつたものでも、ツイ買ふやうになる、買つて使つて見ると成程工合が好いと云ふやうなことから、お客様になる。是は宜いこともあるが又大なる弊害も伴ふ。大英百科辭典を倫敦タイムズ新聞社で賣り出した時の如きは、全國の新聞に一頁大の廣告を出して、特價で提供する、倫敦で賣る値段の半分だ、金は月賦で宜い、五圓拂込めば直ぐ立派な本を送る期限何時までも、二度と斯う云ふ機會は來ないから大急ぎで申込み、アト三日になつた、二日になつた、遠方の者は電報で申込みなどと、盛んに廣告するものだから、左程必要もない人までがそんなに安いものなら一つ買つて見やう、五圓送れば二百圓の本が來るのだからと云ふので申込みるのである。申込み以上は、否應なしに月々月賦を拂はなければならぬ。さうして其の買つた本が實際役に立つかと云ふと役に立てる人もあらうが、立たない人の方が多い。折角買つた本は左程自分の役に立たず月賦の拂込は苦し

いと云ふやうなことから、非常な損をして古本屋に賣飛ばしてしまふと云ふやうなことになる。日本中に何れ位無用の大英百科辭典が轉がつて居るか知れない、誠に勿體ない無駄であつた。

さういふやうに、要らない物を賣付けられて損をすることもあるが、一面には買はせられた爲に大變に調法し、それが爲に生活上幸福を得ることもある。然し品物は實際要らないものを賣付けられても、多少の損をすれば止さうと思へば何時でも止せる、けれども金を借りた場合はさうは行かぬ。而も借りた金は容易に返せるものでない。骨を折つて自分が働いた結果で返すか、左もなくば他から又借りして返すかより途はない。だから一たび借りると退引ならぬ永久的の關係が出來て仕舞ふ。

さう云ふやうに英吉利の資本を借りた國は、どうしても英吉利の支配の下に立たなければならぬ。今の大英百科辭典の例で言つても、縦し要らないものを買つても、損をして賣つてしまへばそれだけであるが、資本を借りれば、唯だ利息を拂ふ義務ばかりでなく、英吉利の品物を買はなければならぬ。品物を買ふばかりでなく、色々の無理をも聽かなけ

ればならぬと云ふやうに、段々深みに陥つて行く。其も資本が本當に役立つて事業が起り、其の事業の収益で利息が拂へ、何年かの後には元金の償還も出来るやうならば宜いが、實際に収益の無い場合は元金が返せない、返せないから利息は長い間取られる。營々として稼いだものは、皆利息として持て行かれることになる。歐羅巴の諸國では、左程英吉利から資本を借りて居らぬが、併し葡萄牙の如きは英吉利の資本が殆ど國中に行渡つて居るから、今度の戦争に於ても、英吉利に厭でも應でも盲従せねばならぬやうになつた。其れに次では希臘である。希臘の王様は獨逸と親戚の關係がある爲に、英吉利から資本を借りては居るが、英吉利の言ふ通りにならない。そこで英吉利は腹を立て、終に天子様を廢してしまつた、詰り獨立國の王様までが、借金の關係で廢立せられるやうなこともなるから、怖いと言へば是れ程怖い事はない。獨逸が白耳義の中立を侵したのは怪しからぬと言つて居るが、それは獨逸のみではない。成程獨逸は軍隊を以て攻入つたのであるが、希臘の亡びたのも大して變らぬ。英吉利は少しは軍艦を持て行つた、少しは兵隊を持て行つたが、大體は金縛りに縛り上げて、而も王様を追出してしまつた。希臘と云ふ

國は表面は亡びて居ないやうであるが、王様は廢せられ、今までの大臣は皆國外に追放せられた。そして人民は居るが、國政は英佛殊に英吉利が主にやつて居るのである。それからもつと觀面なのは埃及である。埃及は全く金の爲に縛られて、何うも斯うも出来なくなつて、英國に併呑せられて仕舞つたのである。

そこで英吉利では、此の變つた状態が國の上にも現はれて、所謂帝國主義と云ふものになつて來た。帝國主義と云ふのは、是はチアムバーレーンが主張し出した説である。チアムバーレーンは、パーミンガム選出の代議士で、其パーミンガムは前云つた通り英國製鐵業の中心である。チアムバーレーンの帝國主義は、木綿工業本位のマンチエスターの自由貿易主義に對抗するものである。如何にチアムバーレーンが有力なる政治家でも、英吉利の事情が之を必要とする時代にあらざれば、斯かる議論が勢力を占めるやうにはならないのである。英吉利が資本輸出國になつて見ると、どうしても今までの自由貿易主義では安心が出来ない。是に於て英吉利の植民地、屬領、勢力範圍の國を英吉利の権力の下に引締めやう、さうして帝國の束縛を堅固に築かうと云ふことになつた。所が此

の帝國主義を實現せしめやうとするに、邪魔になるのは獨逸、亞米利加、露西亞、其の中でも殊に目前の邪魔になるのは獨逸であつた。

此の如くにして戦争の始まる間際まで、資本の輸出を以て國を立て、居つた所の英吉利が、世界に旗を振つて居つた。他の國は英吉利に就て資本を融通して貰ふ、或は借り、或は貸し、或は品物の代金の決済をし、一切合財やつて居つたのであるが、英國が資本の輸出を主とするやうになつてからは、商品の輸出を専らとして居つた時代とは、世界の中央市場と云ふ意味が大分違つて來た。

倫敦のロムバード街は金の自由市場として、如何なる時でも、又如何に多くとも賣買が出來た。貨幣の本位である金が自由に賣買出來るから、従つて一切の債權債務の決済が出來た。それで皆倫敦に行くから、倫敦には溜つ居る金が殆ど無い、始終流れ出たり流れ込んだりして一刻も斷絶しない、けれども堰止めればウンと溜ると云ふ市場であつた。所が資本を輸出するやうになつてからは、倫敦に集つて來た所のものは、皆輸出に充てゝしまふ。自國に出來た資本を輸出するばかりでなく、他國から來て居る資本まで輸出

して居る。詰り英吉利に入つて來た所のものは、悉く資本に化し、資本として輸出して居る。日本が有つて居る債權でも、英吉利國內に在るものは、英吉利は之を自分の資本として輸出して居る。亞米利加が倫敦へ行つて品物を賣つた代を取つて、其の代金を暫く預けて置くと、其の金は英吉利の資本となつて輸出される。而し其輸出先は何處と限らない。競争の相手國たる日本にでも何でも貸付けて、どしどし競争させる。それが見す見す分つて居るが、どうすることも出來ない。即ち英吉利の絶大なる金融の力は、總てのものを資本に化して輸出し、而して其の利益は英吉利が取る。英吉利に對する債權者には、英吉利國內に於ける利子二分かそこらを拂つて置いて、自分が外國に貸した利子は八分にも九分にもなる。即ち之を亞弗利加なり、南米なり、印度なり、濠洲なりと云ふやうな未開の國に高い利子で貸して、其の利益は皆自分が取つてしまふ。どうしてさう云ふことが出來るか、と云ふと、今まで世界の金は皆倫敦に集まる、倫敦に行かなければ貸さうと思つても貸せられないし、借りたいと思つても借りられない、倫敦ならば何日でも貸すことも借りることも出來る。それは英吉利の金融市場が危険の無いやうに、或は危険を最も

小にするやうに色々聯帶責任の組織が出来て居るからである。例へば日本が支那に金を貸す、經濟借款とか何とか云ふことで金を貸さうと云ふ場合でも、日本が單獨で貸したのでは危険で堪らない。仕方がないから英吉利の手を通して貸して貰ふ。さうすると英吉利は八分なり一割なりの利息を取りながら、日本には英吉利の相場で二分位の利息しか拂はない。殊に英蘭銀行では當座預金には利子を拂はない。さう云ふ無利子の金でも、やはり資本として使つて居る。さう云ふのは丸儲けになる。

そこで英吉利以外の各國では、どうかして此様な組織は打壊したいと思つて居るが、中々打壊せない。と云ふものは、今までの様な便利を受けて来たからである。英吉利に行きさへすれば、何時でも金を買ふことも賣ることも貸すことも借りることも出来たが、其の代り甘い汁は皆英吉利に吸はれて、各國は粕しか嘗められない。けれども長い間やり來つて、總ての機關が井然と出来て居るから、如何ともすることが出来ない。唯米國だけは、紐育のウォールストリートを以て倫敦のロムバード街に對抗しやうとして努力して居たが、戦争前まではそれも出来なかつた。戦争が始まつて以後、大分金融の實力が紐育

に移つて行つたが、まだロムバード街に取つて代はることは出来ない。恐らく將來と雖も、容易にそれは出来なからうと思ふ。それならなぜ倫敦のロムバード街が、さう云ふ地位を占るに至つたかと云ふと、詰り信用機關が非常に發達して居るからで、是は到底他の國の企て及ばざる所である。そこで是は爲替の説明にも、資本運用の説明にもなるから、此の場合簡単にロムバード街の模様を説明して見よう。

七 金融中心國としての英國

先づ手形の事に就て云ふと例へば横濱のAなる商人が亞米利加のBと云ふ人から品物を買つた。買ひは買つたが資本の手薄な人で、直ぐに右から左に代金を拂ふことが出来ぬ。けれども二月なり三月なり待つて貰へば、今三千圓で買つたものが四千圓に賣れる見込があると云ふ所から、Bと相談の上金を送る代りに、金三千圓何月何日何々銀行に於て代金相渡可申候也と云ふ手形をAからBに向つて送る。それを約束手形と云ふ。Bは三千圓の約束手形を受取つて、其の取引は済ませたが、Bも亦二月先きまで其の約束

手形を持って居ることが出来ぬ、一日も早く之を現金に換へて運轉しなければならぬ、六十日なら六十日の間の利息は差引かれても、之を金に換へた方が利益であると云ふ場合には、倫敦に居る所のCに依頼する。紐育などの銀行へ持て行つても、Aは果して信用すべき人かどうかと云ふことが分らないから割引をして呉れない。所が倫敦のCは世界中に色々な關係を有つて居るので、日本の事情も分つて居る、横濱のAと云ふ人には此の位の金を支拂ふことが出来ると云ふことを知つて居る、其約束から手形引受をしてやる。即ち期日が来て若しAが拂はなければ私が拂ひますと言つて裏書をする。併しBは多くは引受をするだけで、自分が割引をしてやるのではない、引受料を取つて裏書をしてやるだけである。所がCは倫敦に於ては大變信用のある者であるから、BはCの引受けた約束手形を以てDの所へ行くと割引をして呉れる。DはAをば知らないが、Cは能く知つて居る。そこでCが裏書をすれば間違はないと云ふので、Aの出した手形を割引してBに金を渡す。此の引受を商賣として居る者を稱して引受屋(アクセプチングハウス)と云ひ、割引を商賣として居る者を割引屋(ディスカウンティングハウス)と名づける。割引

屋は銀行ではない、預金などは扱はないで、手形の割引のみを專業として居る、是が倫敦には澤山居る、引受屋は割引をしない、唯世界中の商人の信用調査をして、世界中から集つて来る手形の引受をして居る。さう云ふのが倫敦には澤山にある。

所で此の割引屋は、一口に言へば、金を貸して利息を取るのが商賣であるから、金が非常に忙しい。そこで割引屋は、其の割引した手形を銀行へ持つて行つて又割引して貰ふ、之を再割引と云ふ。資本と云ふものは、成るべく多く廻轉させた方が利益である、出来るならば同じ金を一日に何遍も廻はした方が利益であるから、割引屋は直ぐに其の手形を銀行に送つて再割引をして貰ふ。銀行は預金も扱つて資金も潤澤であるから、是が再割引をしてやる。若し銀行でも其を其の儘寝かせて置くことの出来ない場合には、更に英蘭銀行へ持て行つて再々割引をして貰ふ。

さう云ふやうな組織になつて居つた所が、今度の戦争が始まるや、市中の銀行が警戒を加へて手形の割引をしない。資金が無い譯ではないが、戦争の前途の見込が立たないから手控へる。併し其の場合でも、追に英蘭銀行は偉い、市中の銀行が手控をして居るやう

な場合でも、英蘭銀行は手形の性質さへ良ければ決して割引を拒まない。即ち第一流の引受屋の引受けた手形ならば幾らでも割引に應ずる。此處が倫敦の中央金融市場たる所以である。なぜ其が出来るか云ふと、英蘭銀行は割引をする金を無限に有つて居る。他の銀行は預金を運轉して居るだけだから、預金の在高しか使へない、又預金の中には何時取付けられるか分ぬのもあるから、幾らでも割引して金を貸出すと云ふことは出来ない。所が英蘭銀行は預金もあるけれども、預金にあらずして、而も何時取付けられても拂ふことの出来る金を以て居る。それは何かと云ふと兌換券である。英蘭銀行は兌換券を發行する権利を有つて居るから、兌換券を印刷する時間さへあれば、幾らでも金が出来る。是は他の銀行では出来ないことで、英蘭銀行だけが出来るのである。英蘭銀行で發行した兌換券は直ちに貨幣と同様に流通するから、そこで幾らでも割引の請求に應ずることが出来る。

斯う云ふと、それなら我邦の日本銀行だつて同じではないか、印刷局で兌換券を印刷して持つて来れば幾らでも出来るだらう、それに日本銀行は英蘭銀行の眞似をして拵へたのだから同じに行くだらうと思ふ人があるかも知れぬが、それは日本銀行には出来ない。なぜかと云ふと、英蘭銀行には何時でもそれを金に引換へるだけの力がある。兌換券を出すことは、印刷機でゴロ／＼刷つて出せば宜いのだが、極めて容易いやうであるが、其の代り兌換券は金に引換へなければならぬ。故に餘り多くの兌換券を出すと、日本銀行などでは、金の引換に來られた時に、終には金が無くなつて、兌換停止をしなければならぬやうになるから、無制限に兌換券を出す譯に行かない。所が英吉利は前にも云ふ通り、金の自由市場であるから、金が寸時も絶間なく流れ出たり又流れ込んだりする。恰度此の前を流れて居る天龍川の水のやうに、水の深さは左程でないが、溜つて居る水でなく、流れて居る河の水と同様だから、兌換券と金とを引換へても、後から後から入つて来て盡きることがない。水車がグル／＼廻つて居るやうであるから、英蘭銀行だけは幾らでも手形の引換に應ずることが出来るのである。

英吉利は大抵金曜日土曜日が支拂日で、此の日に諸拂をするから、銀行に割引を求めて來る者が多い。そこで此の兩日は英蘭銀行の兌換券發行高が非常に殖える。又それを

金貨に引換に来る者も頗る多い。所が日曜一日明けて月曜日になると、今度は預金する者が大變に多くなる。と云ふものは、勞働者は賃銀として英蘭銀行の兌換券を受取ると、直ぐに之を拂に當てる、肉屋に拂ふ、酒屋に拂ふと云ふやうに色々の拂ひに當てる。之を受取つた商人は、自分の懐に入れて置かないで、直ぐに銀行に預入されると云ふ習慣になつて居るから、金曜日土曜日に出した兌換券は、二三日すると大部分又英蘭銀行に戻つて来る。唯だ外國へ支拂はなければならぬ分だけは直ぐに戻つて來ぬが、一方に出て行くと共に、他方には入つて來るから巧く循環して居るのである。

それから英蘭銀行でも、市中の銀行に於ても、手形の割引をするに、成べく満期になる日を順に揃へると云ふことをする。それ故今日八月三日なら八月三日ばかりの手形を有つて居つて、後の四日五日六日の支拂の手形は無いと云ふやうなことはしない。八月二日に十萬圓、三日にも十萬圓、四日にも十萬圓と云ふやうな風に、手形の期限の日を揃へて置く。是は英蘭銀行でもやるけれども特に引受銀行で揃へて置く。夫故に満期の日が一緒になつて、一時非常な澤山な、何千萬圓と云ふやうな需要があつて、其次の日には少し

も要らないと云ふやうなことの無いやう、何時も平均して圓滑に轉々流通して行くやうになつて居る。それ等の仕組と云ふものは、ロムバード街に於ては最も完全に出來て居る。他の國でも手形の日附を揃へると云ふ事は無論やつて居るが、どうも倫敦のやうに巧く行かぬ。英吉利には世界の手形が集つて來て、其の額も多いからどうにでも思ふやうに調節することが出来るが、他の國では出と入とが巧く出合はない、どうしても偏るか、非常に巨額の金を準備して置けば兎も角、さうでなければ圓滑に運轉して行くことが出來ない。倫敦のみはそれが工合好く行はれるやうになつて居る。

以上國際間の商業上の取引は、倫敦に於ける引受屋、割引屋、市中銀行、英蘭銀行と云ふ様な機關で決済するのであると云ふことを、約束手形を一例として簡単に説明したが、實際には約束手形を以つてするのでなく、多くは爲替手形を使つて居るのである。而して倫敦に於て或は爲替と言ひ、或は手形といへば、必ず爲替手形のことを意味するのである。

爲替手形とはどう云ふ形式のものかと云ふと、約束手形に於てはAがBに對して、何月何日に金何圓を支拂ひますと云ふ約束をするので、Bがそれを早く金にしたい時には、C

に引受けて貰つて、Dの所で割引して貰ふと云ふことになつて居る。然るに爲替手形に於ては、Aが約束手形をBに送る代りに、代金を受取る可きBの方から發動して手形を振出すのである。即ちBからA宛にして、此手形一覽後或は何月何日に、金何程をC殿へ御仕拂ひ下さる可く候といふ形式の手形を出すのである。約束手形はAがBに對して、五千圓なら五千圓を何月何日に拂ひますと云ふ手形を出すのだが、爲替手形は反對にBがAに對して、五千圓を何月何日にC殿へ御拂ひ下さいと云ふのである。CはAから五千圓を受ける権利はないのであるが、其の手形を持つて行けば、Aから五千圓を拂つて貰へると云ふことを知つて居るから、CはBから手形を買ふ、買ふに就ては五千圓に對して割引をする所がCは引受をするのが商賣で、割引が商賣でないからCは金を拂はない。唯だ引受だけをし、更に之を割引屋へ持つて行つて此處で割引いて貰ふ。詰りAの拂ふべき金に對して、Cが引受をし、其の手形をDの所へ持つて行つて割引をする。若しCが直ぐに金を拂へば、引受屋と割引屋とを兼ねるとなるのだが、それでは危険が多いから、危険を全部負擔して困ると云ふ時には、引受屋は引受だけの責任を負ひ、割引は割引屋がする。割

引屋は割引をした手形は、又それを自分の所に溜めて置かないで、其中の或る部分は直ぐに銀行で再割引をして貰ふ。或は英蘭銀行へ持つて行つて再割引をして貰ふのである。此の手形を受取つた銀行は、期日が來れば又Aから金を取らなければならぬ。五千圓をAから受取るのであるが、倫敦の銀行にはAやBの手形だけではない、XなりYなりZなり、世界中から澤山の手形が集つて來て居るので、其の手形をAが拂ふ期日、若しくはXやZが拂ふ期日まで待つて居ない。之を引當てにして爲替を賣る。それも其爲替を賣るのでなく、他の爲替を賣るのである。例へば倫敦に於て紐育に對して二億萬磅の債權があるとする、二億萬磅だけの爲替が賣れる。どう云ふ人が買ふのかと云ふと、亞米利加から品物を買つて、其の代金を亞米利加へ拂はなければならぬ義務のある人が買ふのである。金を拂はなければならぬ義務のある人が、金を亞米利加へ送る代りに、銀行へ行つて亞米利加宛の爲替を買ふ。亞米利加の銀行で金の取れる爲替を買ふ。爲替は此手形一覽後直ちに若くは何十日後、或は何ヶ月後に幾らくの金をお拂ひ下さいと云ふやうに色々な種類がある。一覽後直ちに「拂ひ下さい」と云ふのを參着爲替と云ふ。普通

爲替相場と云ふ時には參着爲替の相場を取つて言ふ。參着相場が何時でも土豪になつて居る。參着相場よりも下にあるのがTT相場、即ち電信爲替相場 (Telegraphic transfers) である。是は電報料が掛るのと期限が短い。故に其の電報料と利子とを差引いたものが相場になるので、爲替の立相場は常に參着爲替である。

所で其の爲替には受取る方と拂ふ方とある。それが丁度同じ位であれば相場が平準點 (Par) に近くなる。平準點と云ふのは、英吉利の磅に對する亞米利加の弗、獨逸の馬克、佛蘭西の法、或は日本の圓との金の値打ちの比較である。日本の一圓が二志〇片八分の三である、と云ふのは、英吉利の二志〇片八分の三の金と、日本の一圓と丁度同じである。其を平準點といふのである。それで爲替の賣と買とが略々同じ額ならば平準點に極く近くなる。勿論キツチリ平準點に歸すると云ふことはない。何となれば、爲替を送る間の日數があるから、其の間の利息がある。其から若し金を送るとすれば、運賃が要る、保険料が掛る。だから金を送るよりも爲替で送つた方が何時でも幾らか安く上る。所が爲替相場が高くなると、金を送つた方が却つて安く付くやうになる。運賃も掛け、保険料も掛けて

金を英吉利から亞米利加へ送る。或は亞米利加から英吉利へ送つた方が割合が安くなる。ことがある。減多にさう云ふことは起らぬが、偶にはさう云ふことがある。其の現金を輸送するも爲替で送るも同じである、と云ふ點を現金輸送點と云ふ。現金輸送點よりも爲替相場が上れば、金を送つた方が安く付く。併し金點も決して確定不動のものではない。何となれば、運賃は上つたり下つたりする、保険料も上つたり下つたりする。運賃が安くなれば、金點は割合に低くなり、運賃が高くなれば、金點も高くなる。故に餘程爲替相場に相違がなければ、金を送つては引合はないから、自ら金を送らないやうになる。

けれども亦人爲的に金點を高める事もある。金が國外に出て困ると云ふ場合には、金點を高くして、金を送れないやうにすることもある。それは何處で誰がするかと云ふと、中央銀行でやる。即ち英蘭銀行でやる。どうしてやるかと云ふと、英蘭銀行の公定利率高をめ。二分であつたものを五分にし、八分にし、一割にする。さうすると金利が高くなる。金利が高くなれば、英吉利から亞米利加に輸送するには少くとも一週間は掛るか

ら、利息が高くなると従つて金點が高くなる。中央銀行の利率と云ふものは、其の國內の資本の需要供給の關係も見て居るが、同時に外國に對する金の輸出入と云ふことにも注意し、これで調節をして行く。さうして其の以外に、爲替相場に手加減を加へることはいけないことになつて居る。中央銀行の公定利率の高低に依つて、爲替相場の調節をする。と云ふことは極めて健全なることであつて、又しなければならぬことになつて居る。所が今世界中でその出來て居る國は一箇國もない。日本などは戦争前も出來なかつたが、今も尙出來ない。唯倫敦だけは金の自由市場であるから、中央銀行の利率の上げ下げに依つて、爲替相場を調節することが完全に行はれて居つた。此れが世界金融中心市場たる英國の戦前の状態の一斑である。

然るに今度の戦争が始まつた爲めに、此英國の金融市場に大變化が起つた。今まで圓滑に運轉して居つた機關が、開戦と共にピツタリと止まつた。と云ふのは、非常に巧妙に出來て居るから、故障がなければ巧く動いて居るが、髮の毛一筋程の故障でもあつると、全體の活動が忽ち止まつてしまふ。日本の金融界の様な粗雑な仕組なら、假令齒車一枚位缺けて居てもガタピシし乍らも動いて居るが、英國の金融市場は其仕組が餘り巧妙に出來て居た爲に、今度の戦争が起るや否や、忽ち其の運轉が止まつてしまつた。扱然らば其の故障の爲に英吉利の金融界にどういふ變化が起つたか、以下之を説明して見やう。

八 英國金融市場の變調

歐洲大戰の開始は、世界經濟の中心たる英國の金融市場に大變調を齎らした。何故であるかと云ふと、戦争が始まれば今までのやうな金の自由市場といふものがなくなつてしまふ。倫敦に行けば必ず金が取れもするし、拂ひも出來、總ての債權債務の決済が出來る、總ての爲替は倫敦に集中すれば宜いと云ふことが出來なくなるから、出來る丈け金を持つて行かう、それも爲替で送つたのでは危険であるからと云ふので、争つて英蘭銀行に向つて金を取りに來た。是は色々の形に於て取りに來た。預金を引出しに來るものもある、手形を英蘭銀行へ持つて來て、買つて呉れと言ふ者も殖えて來た。手形で持つて居つては危険だと云ふので、現金に換へて貰つて自分が持つて居る。それから英蘭銀行の發

行した兌換券も、平生は外國へ送る必要もなければ兌換を請求に來ないのが、兌換券で持つて居ると、危険だからと云ふので兌換に來る。それらが一日に非常な高に上つた。今迄は金に換へないで、唯紙と紙とが形を變へてグル／＼廻つて居つた。それで巧く金融機關が動いて居つたのが、悉く金にしなければならぬことになつた。即ち段々説明した極めて巧妙に出來て居つた機械に、タツター一つ狂ひが出來た、金の出入が自由でなくなつた。金の自由市場は全くは無くなつたのではないが、無くなりはせぬかといふ懸念が起つた爲に、全體の機關がピツタリ止まつてしまつた。英吉利の金の自由市場といふのは、自分の所に金が澤山あると云ふ譯ではない。國內に金を持つて居る額から言へば、佛蘭西でも露西亞でも英吉利より多い。多いが金の自由市場ではないと云ふのは、金が溜つて居るだけで流出さない。流出しても其の流が誠に細い。細い流れで入つて、細い流れで出て行くのである。所が英吉利は寸時も停滯して居ない、斷えずドシ／＼流出し、又斷えずドシ／＼流れ込んで居る。だから其の水を汲もうと思へば何時でも入用だけ汲むことが出来る。さう云ふ働きが出來て居つたのが、戦争の起つた爲に出て行くものは出

て行くが、入つて來るものは殆んど止つた。獨逸も佛蘭西も露西亞も平生から金の自由市場ではないのが、戦争が始まつた爲めに金の出ることを急にピツタリ止めてしまひ、さうして一面には兌換を停止したから、今迄此等の國から英吉利へ入つて來たものが入つて來なくなつた、目に見えて一番澤山流れて來る所の川が止まつてしまひさうになつた。まだスツカリ止まり切りにはならぬが止まりさうになつた。そこで愚圖々々して居ると、金の自由なる供給が得られなくなるから、今の中に金を取つてしまふ方が宜い、本當に得られなくなつたら兌換の請求に行つても駄目だから、今の中に取つて置かうと云ふので、中央銀行に對する金の要求が非常に殖えて來た。

さてさうなると、之を唯だ自然に放任して置いて、利率の引上げで抑へると云ふだけでは力が足りない、非常手段に出なければならぬ。其非常手段として何をやつたかと云ふと、歐羅巴大陸の獨佛露國等では兌換を停止した。兌換券を今日限り引換へないぞと言つた。英吉利では兌換停止はしない、今迄の歐羅巴の戦争の經驗では、戦が始まると直に兌換を停止したと云ふ例は減多にない。何となれば、兌換を停止すると云ふことは、非常

な不名譽である。又非常に市場を攪亂する。故に出来るならばそんなことはしたくない。兌換停止は或る意味から言へば國の身代限りと同じであると云ふ考が深く歐羅巴人の頭にあるから出来るだけは避けたのである。併し今度の戦争ではそれを避けないで、皆即時に兌換停止をやつた。流石の英吉利でさへ英佛戦争、即ちナポレオン戦争の時には兌換を停止した。コレは拂へるだけは拂つて、愈々拂へなくなつたら支拂を停止したのである。其の時はもう餘程金が減つてしまつて居た。所が今度獨逸や、佛蘭西や、露西亞が兌換を停止したのは、金が無くなつたからではない。金は少しも減らない。まだ開戦したばかりだから少しも減りはしない。寧ろ金の出ることを手心したから少しは殖えた。そこへ兌換停止をしたから金はある。即ち拂へば拂へるのに兌換停止をしたのである。之を個人に例へると、金が無くなつて拂へなくなつたから、どうぞ拂ひを待つて呉れと云ふのが一般普通であるのに、今度の獨佛露のやり方は左様でない、金はある、拂はうと思へば拂ふ金はあるのに、拂はないで待つて呉れと言ふのである。是は甚だ怪しからん、拂へるものを拂はないのは怪しからん、如何に非常な時と雖も、拂ひ得るものを拂

はないで、兌換停止をしたのは怪しからんと言へば言へるのだが、今日になつて見ると、獨逸佛蘭西、露西亞等が開戦の初めに當つて兌換停止をしたことは、大變機宜に適つて居る。若し此の時にやらなかつたならば、戦争以外に餘程の苦痛を被らなければならなかつたと云ふことが今では明瞭に分つた。

是れは主として獨逸の智慧である。獨逸は開戦の場合には、直ぐに兌換停止をする準備をし、之れに要する一切の法律規定までもチャント拵へて居つたから、開戦と同時に直ぐそれを實行して、バタ／＼と門を閉ぢてしまつた。戦争前までは學者も政治家も、金と云ふものは入用の時には何どきでも得られるものである、だから兌換に必要以外の金を持つて居る必要はないと言つて居つた。所が獨逸では、實際の施設として、此の學者の説學問上の定論とは全く矛盾したことをやつて居つた。即ち普佛戦争で佛蘭西から取つた償金の中、十二億萬馬克、即ち六千萬圓程に當るだけの金を、伯林の直ぐ近所のスパンダウのユリウス塔と云ふ所に仕舞つ居つた。其の塔の中に嚴重の金庫を拵へて入れて置いて、一中隊の兵隊に番をさせて居つた。之を見た世界の財政家、經濟學者の大部分は噓

つて居つた。馬鹿なことをするものだ、六千萬圓の金を寝かして置いて、少しも利用しない。運用すればそれだけ利息が付く、一八七〇年代から今日迄には非常な利息が溜つてゐる、馬鹿なことをすると云つて嗤つて居つたが、今度の戦争になつて、四十年餘も六千萬圓の金を唯だ寝かせて置いた効能が分つた。即ち直ぐ之を帝國銀行の所有に移し、尙色々な方法で、民間から金をどしどし吸収した。と云ふのは戦争中は金が要る、非常に要るけれども、それは使つてしまふのではなく、持つて居ると云ふことが必要である。何故持つて居ることが必要かと云ふと、戦争中に使ふのではなく、戦争が済んで愈々常態に歸ると云ふ時に、ウンと金を積んで居ると云ふことが必要である。どうせ戦争中は色々非常手段を執つて、金の出ることが出来ないやうになつて居る。英吉利のやうに兌換停止をしない國でも、金の出ることが事實上殆ど出来ないやうにして居る。唯だ兌換停止をすると云ふことは、體裁が悪いと云ふだけである。體裁が少し宜いと云ふことの爲に、どん／＼兌換の請求に應じて金を出せば、戦争中も心細く、又常態に歸つたときに土臺となるべき金が無い。さうなると戦争が済んでも、何時迄も民間に流通して居る銀行券は兌換

が出来ないで不換券になる。不換券は勿論いけない。戦争中非常の時には我慢もするが、常態に復してもまだ不換券を有つて居ると云ふことは、是は經濟界を攪亂する。戦争が済んで平時の状態に歸る時、成べく早く兌換を恢復するには、金をウンと持つてゐなければならぬ、其を獨逸は今やつて居る。それから佛蘭西でも露西亞でも、兌換の維持が出来るならばそれに越したことはないが、どうもそれは覺束ないから、それよりまだ拂へば拂へるが、今は待つて呉れ、其の代り決して倒しはしない、惣じて今拂つて、他日若し誰れかの債權を踏倒すやうな事になつては、國民一般の迷惑になるから、さうならない爲にやつたのである。之に反し英吉利は今日迄ズツト兌換を維持して來て居るが、是れは英吉利にして始めて出来ることであつて、獨逸や佛蘭西や露西亞では逆も出来ない、三年も續かぬ。否一年續くことも出来ない、と云ふことが分つて居つた。そこでどうせ兌換を停止しなければならぬならば、行き詰つてからするよりも、今まだ餘裕のある中に停止する方が害が少ないと云ふので停止したのである。

英吉利は戦争前と同じに兌換制度を維持して居るが、英吉利と雖も無制限にやつて居

つてはやはり金が無くなつて、結局は兌換停止をしなければならぬことになる。そこで兌換停止をしないと云ふ名目を何處迄も立てる爲に、一方に於て非常に制限した。其の制限とは何かと言ふと、外國爲替の作用を利用したのである。即ち英吉利では兌換停止はしなかつたけれども、開戦と同時に銀行の休日を臨時に延長した。政府の命令を以て英吉利中の有らゆる銀行を強制的に三日間休ませた。恰度其の日は日曜日に當つたから木曜日になつて店を開けさせた。事實四日間休ませたのである。木曜日になつて開店したが十分に營業させないで、數日後になつて初めて本當に營業の出来るやうにした。これは甚だ姑息の遣り方であるけれども、當時の急に處する手段としては已むを得なかつた。何故タツタ三日や四日休んだだけで都合が付いたかと云ふと、戦争が始まると共に、英蘭銀行に對して金の引換を求むる者が非常に殖えた。又平生は金の引換に來なかつた割引屋或は市中銀行が、自分の持つて居る手形で、英蘭銀行に買つて貰へるものは皆買つて貰ひに來た。又今迄小切手で仕拂つて居つたのが、小切手で受取るのを拒み、正貨で拂つて呉と云ふ者が多くなつた。又市中銀行に預金をして居つた者も預金を引出す、

所が市中銀行にもさう十分に金のある譯はないから、市中銀行は英蘭銀行に求める。併し英蘭銀行にても無限に金の準備がしてあるのでないから、兌換券を非常に増發した。丁度金曜日と土曜日、此の二日は非常に兌換券を増發したのである。増發すると、英吉利の兌換券は五磅(約五十圓)が一番小さいのだから、大きな仕拂には差支ないけれども、小さな仕拂には困る。如何に英吉利と雖も、五十圓の紙幣ばかりでは仕拂が出來ない。殊に之れを受取つた小賣商人、勞働者、薄給者などは非常に不自由である。だから之れを直ぐに金貨に引換へる。金貨は十志と一磅、即ち五圓及び十圓であるから、是れならば大抵間に合ふ。後は補助貨でお釣を取れば宜い。さう云ふ風で外國貿易のためでも何でもなく、國內で使ふために金の需要が非常に殖えた。そこで金曜日から土曜日に掛けて英蘭銀行から出た兌換券が、工場主なり商店なりから、勞働者、雇人などの手に渡つた時は土曜日で、土曜日の午後は休みだから兌換が出來ない。日曜日は當然休みだが、月曜日に店を開けば、一時に引換の要求があると云ふことは分つて居る。兌換券の出た後の市中の形勢が不穩である。そこへ一時に來られては溜らぬから銀行の休日を延長した、是れが

爲め金は受取つたが、何處へ行つても兩替が出来ない。強いて兩替すれば損が行くから成べく使はずに持つて居る。所がもと／＼要る爲めに引出したものは寧ろ少數で、戦争になつたから萬一の場合を想像して、遽て引出した者が多かつた。一時不安の念に驅られて取付けたのだから、二三日経つて段々落着いてから考へて見ると、馬鹿氣たことをした、要りもしない預金を引出して、利息がフ、イになつたと云ふやうなことで、又其金を元の銀行へ持つて行つて預ける。預ければ預けただけ英蘭銀行に返る。三日間休日を延長して、木曜日に店を開けると果して預金が大變殖えて來た。さう云ふのが一の働きである。

今一つは、さて其の曉に、やはり金を要求して來る者がある。是は本當に金が要る人で、さう云ふのは二日や三日休んだのでは心變りをしない。本當に金の要る人は、多くは外國に金を送る人である。外國に金を送る人は誰れかと云ふと、商人などは送らない、幾ら爲替相場が高くなつて現金輸送點になつても、現金輸送の事實は商人自身がやるのではない、銀行がやる、或ひは割引屋がやる、或ひは引受屋がやる。詰り金の貸借を以つて商賣

にして居るもの、即ち爲替關係者である。此等の人は何の爲めに金が要るか、と云ふと、平生は爲替の運用で、唯だ帳尻の差額を現金で遣り取りして居つたので、それは誠に僅かなものであつた。然るに開戦となるや、英吉利の金融市場に對して疑惧の念を懷くものが多くなつたので、倫敦の金融業者に向つて現金を送つて呉れると云ふ要求が増して來た。さうすると是れはどうしても送らなければならぬ。そこで引受屋、割引屋も好んでするのではないが、債務を決済しなければならぬから、これは兌換券を持つて來て金と引換へて行く。であるから市中銀行、割引屋、引受屋等は、外國に拂はなければならぬものが無くなれば、英蘭銀行に金の引換へに來なくなる。來るなど言はなくても來なくなる。所がそれは黙つて居つては出來ない。そこで政府の力で堰を設けて之れを制限した。英吉利は世界の各國に對して多くの債權を有つて居るが、一方には債務をも有つて居る。所で英吉利から金を借りて居る方は戦争が起つても黙つて居る。アナタの方で要りさうだから返しませうと言つて來る者は一人も無ない。之れに反して貸して居る方は、サア返して呉れと言つて取り立てる。債權と債務とが一緒になつて來れば巧く決済が出來

るが債務者の方は黙つて居て債権者だけが取立てる。それでは如何に英吉利と雖もやり切れるものでないから、之を防ぐ爲に引受屋、割引屋、銀行業者、其の他の一般の人民に對して、外國の債務は一時支拂を停止するやうに命じた。それが即ちモラトリウムである。モラトリウムと云ふのは延ばすとか延滞とか云ふ意味で、借金を倒すのではない、唯引延すだけである。併し戦争になつたからと言ふて、急に借金の支拂を延ばす必要がある譯ではないが、當時の英吉利の事情としては是亦已を得ざる手段であつた。素より好ましい方法ではないから、英吉利では間もなく廢してしまつたし、英吉利の眞似をしてモラトリウムをやつた他の國でも事實は皆廢してしまつた。日本は必要がなかつたのでやらなかつたが、戦争に少しも關係のない國迄も之を好い機會にしてやつた。あの偉い金持の英國でさへ、拂ふべきものを一時待つて呉れと言ふのだから、吾々貧乏人がやつても差支ないと云ふので、南米邊の小さな國までも眞似をしてモラトリウムをやつた。是は非常な人権蹂躪と言へば言へるが、併し其の人権蹂躪は、主として外國に對する人権蹂躪である。借金を拂ふのに、平時の様に品物で拂ふならば宜いが、現金で拂はなければならぬ

だから、其は困ると云ので仕拂を延期させた。是は個人々々が今戦争が始まつたから仕拂はないと言へば甚だ信用を害し、又法律問題を惹起すが、國家の命令を以て、英吉利の總ての引受屋、割引屋、銀行業者は、暫く仕拂をしないでも宜い、色々の條件を設けたが、其の條件に従つて拂はないでも宜いと云ふことになつた。外國に拂ふ必要が無くなれば、兌換券を英蘭銀行に持つて行つて金に引換へて貰ふ必要が無い。そこで前に出した兌換券は、又英蘭銀行に戻つて預金になつた。是に於て前に出した兌換券は、色々な形で間もなく回收されてしまつた。英蘭銀行では一度出した兌換券が再び歸つて來ると、それを二度と出さない直に焼いてしまふ。日本の日本銀行兌換券は、出て行つたり戻つて來たり幾度もするから、ポロ／＼になつたり穢くなる。英吉利の兌換券は皆綺麗で、ポロ／＼になつたのではない。世界で一番ポロ／＼の紙幣は、希臘、亞米利加、佛蘭西、獨逸などである。吾々は紙幣と云ふとお宮があつたり肖像があつたりして、美しく印刷されたものゝやうに思ふが、英吉利のはさうでなく、眞白の紙に唯黒く印刷してあるだけで、札とは思へない。さう云ふ風で一旦出したものが歸つて來ると直ぐに焼いてしまふ。更に出す必要があ

れば、又新にゴロ／＼刷つて出す。それで四五日の間、兌換券の發行高が非常に多くなつたと云ふだけで、又舊に返つてしまつた。

この銀行休日の延長、モラトリウムの實行と云ふやうなものは、あの場合に於ける臨機の處置として寔に已むを得ないことであつたが、之に依つて英吉利が世界金融の中央市場であると云ふ顔は潰れてしまつた。英吉利に外に偉い所がある譯ではない。英吉利に行けば、如何なる借金でも直ぐに出来るし、又返さうと思へば返せもする。それから金の自由市場であると云ふことが偉いのである。所が金が自由ではない、兌換は停止しないけれども、モラトリウムと云ふやうな非常手段を採つた。斯うなると英吉利と雖も必ずしも安全ではない。倫敦なら大丈夫だと言つて安心して置くことが出来ぬ。或はモラトリウムの範圍をもつと擴張して、結局英吉利にある外國の債權を踏み倒すやうになるかも知れない。嘗に金の貸借ばかりではなく、品物の遣り取りも、保險も、運賃も、何も彼も倫敦を土臺としてやつて來たのが、土臺が壞れてしまつたので皆困つてしまつた。成程獨逸や佛蘭西や露西亞のやうに、兌換停止をしなかつたことは結構であるが、元來獨逸や

佛蘭西や露西亞は、世界の金融中心市場でも何でも無い。唯だ自國だけの事をして居つたのであるから、兌換を停止した所が困るものは自國民だけである。外國に拂ふ必要があるから金が要るのだが、外國に拂ふ必要がなくなれば金が要りはしない。日本のやうに少しも金を使はないで差支ない。所が英吉利の英吉利たる所以の、世界金融の中央市場であると云ふ事實が無くなつてしまつたから、入つて來るものも入らないし、取れるものも取れない。自分の方で拂はないから相手の方も拂はなくなつた。

その結果は何に現はれて來たかと云ふと、色々のことに於て現はれたが、一番初めに現はれて來たのは亞米利加との爲替相場である。戦争の始まる直ぐ前英吉利の爲替相場は大體斯う云ふ風であつた。

巴里	英貨一磅に對し	二十五法一六
瑞典	同	二十五法一七
白耳義	同	二十五法二三
和蘭	同	十二ギルダ一五

露西亞 同
紐育 同
伯林 同

九留七二
四弗九三
二十馬克五三五

此處で爲替相場の立方を一寸云へば、英吉利の爲替相場の立方と、他の國の爲替の立方とは大抵反對になつて居る。それは英吉利の相手國の方が發動して爲替を取組むから、相手の國の相場を其の儘英國自らの相場にして居るのである。但し日本のは違ふ。日本のは英吉利の一磅に對して何圓と云ふのではなく、一圓に對して英貨二志〇片八分の三と云ふ風に立て、居る。所で戦争の始まる前の相場は此の表のやうであつたが、戦争が始まると間もなく變動が起り、殊に一九一四年八月から十二月までの五ヶ月間に非常に變つて來た。紐育だけに就て見ると、一番安い時には四弗九十三仙、一番高い時には六弗五十仙尤も是はホンの一日、それも丸一日ではなく、僅か半日ばかりであつたが、兎に角六弗五十仙と云ふ非常な變調を來した。是は全く英吉利が世界の金融中央市場たる實を無くなした最も著しい證據である。四弗九十三仙位の見當であつたのが、急に六弗五十

仙商品ならば物に依ては其の位の變動のあることは幾らもあらうが、爲替相場に斯様な變動の起つたのは甚だ稀なことである。亞米利加の人が英吉利に金を送らうとするのに、戦争前には英吉利に一磅の金を送るに四弗九十三仙であつた。言換へると、一磅の爲替が四弗九十三仙で買へたものが、戦争が始まると間もなく、六弗五十仙拂はなければ一磅の爲替が買へなくなつたから、亞米利加人は非常に損をした。非常な損だから金を拂はない。即ち英吉利の方で借金を返さないから亞米利加でも借金を返さない。併し亞米利加はモラトリウムで返さないのではなく爲替相場の爲に返さないのである。爲替が高いから馬鹿らしくなつて、誰れも英吉利に爲替を送る者がなくなつた。どうしても斯うでも返さなければならぬ者は金で送る。現金で一磅に當るだけ送らうとすれば、以前の四弗九十三仙に運賃と保険料を加へれば宜いのだから、金を送つた方が得である。尤も六弗五十仙といふのはホンの僅かの間であつたが、五弗や五弗少し餘になつたことはあつたから、英吉利と亞米利加との間の爲替は止つてしまつた。是が爲に日本も大に影響を被つた。と云ふのは、日本から亞米利加へ金を送るのに、今迄は直接亞米利加へ爲替

を組んで居つたのが、英米爲替がこんなに變つて來たから、亞米利加へ送るのに、亞米利加へ直接送らないで英吉利に送つた。日本と英吉利との爲替相場はやはり二志〇片八分の三、フラクシヨンに幾らか變動がある位のことで大した變りは無かつた。であるから、例へば日本から二志〇片八分の三の割合で千磅送ると、其の千磅が英吉利を通つて、亞米利加に行くと六千五百弗になる。戦争前は四千九百三十弗にしかならなかつたのが六千五百弗となる。コレハ極端であるが五千弗とか五千二百弗には度々なつた。故に直接に亞米利加に爲替を送るより、英吉利を通じて紐育宛の爲替を買つた方が同じ一弗拂ふにも前より少ない金で済む。だから日本の爲替にも影響を及ぼして大變それが行はれた。是は獨り日本との關係ばかりでなく、何處の國でも同様であるから、亞米利加に金を送らうと云ふ時には、先づ英吉利に金を送る。そこで英吉利へ英吉利へと金を送つた、即ち英吉利は大變金が要る場合に、大陸諸國から全く來なくなつたが、斯く爲替相場の關係で、大陸以外の他の國から出來るだけ金を吸収した。金のかき集めを爲替相場をやつたのである。

又亞米利加から英吉利へ送る金も、爲替で送れば損が行くから現金で送る。是は爲替相場が大變高いから、商賣が出來なくなつたり、或は拂ふものを拂はなくなつたから、戦争前程の取引はなくなつたが、やはり送らなければならぬ金がある、それは爲替に依るよりは現金で送る。そこで英吉利が金を吸収しやうと云ふ目的が達せられた。例へば日本が英吉利を通せば大變利益だと云ふことになると、ドン／＼英吉利に爲替を送る。さうすると片爲替になる。片爲替と云ふのは、日本から英吉利に送る爲替が多くなつて、向ふから此方へ來るのが少いことを謂ふのである。取る方が少くて送る方が多いから、兎に角日本の勘定に於ては、世界の何處かにある金を英吉利に送らなければならぬ。印度、支那、濠洲等、英吉利宛の爲替を組めば皆金が英吉利に行く。そこで金が大きに英吉利に入つた。是は即ち戦争前に英吉利が有つて居つた中央金融市場と云ふことの御蔭である。開戦後中央市場たることの値打は減つたが、併し其の作用を利用して、兎に角英吉利が目前の急に充つる爲に外國爲替を利用したのである。所で亞米利加の爲替がなせ一番飛上つたか、他の國の爲替も變つたが、なぜ亞米利加の爲替相場が飛上つたかと云ふと、戦争

が始まつて、英吉利が資金を吸収しようとするのに、歐羅巴大陸諸國はもう駄目だ、皆自國に吸収する必要があるから英吉利に送れない。それなら世界の國々の中、何處に澤山資金があるか、吸収するとの出来る國は何處かと云ふと、日本でもなければ、支那でもない、印度でもなく、亞弗利加でもない、唯だ亞米利加一國しかない。故に亞米利加から一時の助けを藉りるより仕方がない。然るに恰かも此の亞米利加の助けを藉りやうと云ふのに、英吉利は又大變便利なものをも有つて居る。と云ふのは、英吉利は澤山の資本を亞米利加に投下してある。亞米利加に金が貸してある。だから態々亞米利加へ行つて借金を起さなくとも、從來亞米利加に貸してある貸金を取付けて、之を英吉利に持つて來れば金を吸収する目的が大分達せられる。併し貸してある金は遊んで居る譯ではない、總て夫れ々事業に使つてあるから、サア今返せといつても急に間に合はない。又株式會社の株券になつて居るものは、會社に資本の償還を求むることは出来ない。出来ないが其處が金融市場の働きである。紐育は倫敦のやうな世界の中央金融市場ではないが、倫敦を除けば世界で一番發達した金融市場、ウォール街と云ふものを有つて居る。是は世界的で

ない、亞米利加的であるが、兎に角亞米利加の有價證券は皆紐育のウォールストリートに集つて、此處で賣買されて居る。紐育に行けば亞米利加の證券は何時でも賣買が出来る。倫敦ならばブラジルの公債であらうが、日本の公債であらうが、支那の株券であらうが、何處の國のものでも賣買が出来る。紐育の市場では他國のものは出来ないが、亞米利加の有價證券ならば殆ど倫敦と同じ位に自由自在に賣買が出来る。そこまでは發達して居る。其亞米利加の有價證券を英吉利は澤山有つて居る。英吉利の政府が有つて居る譯ではないが、民間に澤山ある。銀行の手にあり、資産家の手にある。それらの有價證券をウォール街に持つて行つて賣れば宜い、持つて行くにも及ばぬ書留郵便で送れば宜い。それも直ぐに送る必要はない、電報一本打てば事が済む。何々會社の株をどれだけ賣ると云ふことの電報を一本打てば、證券は後から送つて宜い。是も亞米利加でなくては出来ない。他の國例へば支那の證券などは駄目である。サア戦争が始まつた、直ぐに資金が欲しいと言つても、支那には證券が自由に賣れる市場が無い。日本は支那より幾らか優つて居るけれども、日本へ持つて來て英吉利人が日本の公債社債を賣らうと言つて電

報を打つても、少しは賣れるだらうが、さうなると忽ち相場が暴落して市場を攪亂する。市場が小さいから少し大きな賣買があると減茶々々になる。亞米利加のウォール街は可なり大きいから、左程市場を攪亂しないで賣ることが出来る。従つて英吉利の目的が達せられる。英吉利に取つては亞米利加があつたから非常に有難い。同じく資本を輸出した中にも、亞米利加に輸出して、亞米利加の事業に資金を投下してあつたと云ふことが、大變英吉利に取つて強味であつた。ソコデ、英人の持つて居る米國の有價證券をドシ／＼ウォール・ストリートで賣つた。此れが即ち英米爲替相場が突飛に飛上つた一の原因である。

けれども此證券を悉く賣つてしまつて、今まで貸してあつた貸金は取付けてしまつた後の英吉利は、戦後に於ては甚だ心細い。亞米利加以外の國の事業に資金を投下するとは、亞米利加より危険が多い。イザと云ふ場合に一向間に合はない。日本に貸したつて支那に貸したつて、亞米利加のやうに行かない。又戦争前に返つて亞米利加の事業が英吉利の資金を求めるやうになれば宜いが是は六ヶしい。即ち戦争の爲に英吉利は一

時的に國際金融市場としての實を失つたのみならず、恐らくは戦後永久的に、少くも亞米利加に對する英吉利の勢力は無くなるであらう。紐育が倫敦に代つて、世界の金融中央市場になると云ふことは、是は出來ないことであるが、今まで倫敦に依頼して居つた亞米利加の金融市場は、少くとも亞米利加だけは離れてしまつて、今まで亞米利加の事業から得て居つた英吉利の利益は、皆亞米利加が自ら之を收めるやうになるであらうと思ふ。之が歐洲大戰の爲めに起つた英國金融市場の大變調である。

九 戦費の負擔と國民經濟改造の機運

此一節は大正七年一月「第三帝國」に掲載せり

以上説明した英國金融市場の大變調は、纏て來る可き世界經濟改造の序幕である。而して他方に於ては、戦費の負擔の爲めに各交戰國の國民經濟に大變調が起りつゝある。此事を少し詳しく話して本講演を終らうと思ふ。

今回の戦争の始まるまでの各國の經濟は、生産を本位として居つた。生産に依つて富が作られ、其作られた富が流通して個々の人の手に歸し其を消費する。即ち生産——流

通——消費と云ふ順で、従つて經濟學に於いても生産論、流通論、消費論と分ち、流通論も更に交換、分配に分つて、經濟學を四つの部門に分つた。其中でも生産を出発點とし、生産が十分でありさへすれば、其の他の事は自ら之に準じて行く。故に國家としても民間の生産を奨励し、生産を保護してやれば、流通も自ら圓滿に行はれ、消費も自ら十分になるから、流通に對しては餘り干渉せず、唯妨害となる可きものを除去してやれば宜いと云ふことになつて居つた。商品輸出を以て立國の基礎として居た頃の英吉利に於ては、政府は唯販路を開くと云ふことをするだけで宜い、販路さへ開ければ、後は賣ることも代金を取立てること、それは商人がするから政府の力を藉りるに及ばぬ。又金融市場の如きものに就ては、政府は直接には殆ど何等の干渉もしない、唯英蘭銀行を経て利子の上げ下げで調節をするだけである。又通貨の如きも自ら増減するに任せて、人爲的に何等の手加減をも加へないのである。英吉利の金貨本位と云ふものは、政府が少しも手を加へずして、圓滿に流通が行はれるから一番良い方法と認めて採用したのであつて、他の國は英吉利と商賣をする關係上金貨本位にするが宜いさうして置けば、國內の事情はそれに相應し

て行く。少しでも金貨本位に疵が付いてはいけぬが、疵が付かない限りは政府では少しも手を付けないとしてある。尤も昔はさうでなかつた。日本に就ても徳川時代、又西洋に於ても昔は通貨の事に就ては國家が非常に干渉した。其干渉は主に自分の利益の爲にしたのであるから、或は不換紙幣を發行するとか、實際に價の無い貨幣を無理に流通せしめるとか、悪貨を流通せしめて其のカスリを儲ける。即ち金貨銀貨の目方を減らしたり、或は純分を少くしたり、或は中へ混ぜ物を入れたりして、一分のものを一分二朱に使はせると云ふやうなことをしたのである。

所が金貨本位となつては、さう云ふことをしたくも出来ない。若し強てすれば金貨本位でなくなる。金貨本位を維持するには、兌換制を完全に維持して置けば宜い。兌換制を完全に維持すると云ふことは、中央銀行の營業所に、營業時間内に兌換券を提出して金貨と引換を求めたならば、躊躇なく其の額に相當するだけの金を渡してやる、又金を持つて來て請求したならば、何人が幾ら持つて來ても、必ず其を金貨に鑄造してやる、それを名づけて自由鑄造と云ふ。此の兌換と云ふこと、自由鑄造と云ふことを固く守りさへす

れば宜いのである。所が昔はさうでなかつた。如何なる時に如何なる貨幣を何程拵へるか云ふことは、全く政府の都合次第で、人民は少しも知ることが出来なかつた。けれども今日金貨本位國で、自由鑄造を認めて居る國に於いては、國內に幾ら貨幣があるべきかと云ふことは人民が極めると言つて宜い。尤も誰が幾らと言つて極める譯ではないが、例へば金の塊を有つて居る、或は金の指輪を持つて居る、其を金貨にして貰はうと思へば、日本銀行に持つて行つて鑄造を請求す、さうすると日本銀行では純分を量つて、それに相當するだけの金貨に拵へて呉れる、即ち我が貨幣法第十四條に『金地金ヲ輪納シ金貨幣ノ製造ヲ請フ者アルトキハ政府ハ其ノ請求ニ應スヘシ』と云ふことがある。若し五圓の金貨を一つ十圓の金貨を一つ殖やさうと思へば、それだけの金を持つて行きさへすれば宜い。民間に金を持つて居る者が多くなれば、金貨は幾らでも殖えるのであるから、兌換制と自由鑄造を守つて行けば後は干渉してはならない。干渉しなくとも國內に必要なだけは金貨が出来、必要が減すれば減るので自ら調節される。

兌換券は何時でも金貨と引換へらる可きものであるから、兌換券だけで流通して居る間は其の儘に置き、引換に來た者には何時でも引換へてやるのであるから、兌換券が多過ぎると、自然日本銀行に持つて來て金貨と引換へる者が多くなる。さうなると準備金が少くなるから兌換券の出方が減る。又國內で餘計に通貨が要ることになれば、日本銀行に對して割引貸付の要求が多くなるから兌換券が殖える。干渉しなくても自然に巧く行くやうになつて居る。

消費に就ても同様である。是は衛生上或は取締の上から、或る制限を設くる必要のあることも無論あるが、大體に於て誰が何を食はうとどんな家に住はうと、どんな衣物を着やうと、如何なる生活をしやうと、國の風俗を破り秩序を紊さない限りは全く自由である。自分の得た月給を皆使つてしまはうが、半分貯蓄して置かうが、四分の一貯蓄しやうが、それは全く其人の自由であつて、公の安寧秩序を害さない限りは少しも干渉しない。専ら生産を奨める、生産を奨めると言つて一々命令をするのではなく、人民の知らない事を教へてやるだけである。直接に保護金を與へるとか、手を引いて教へてやるのでなく、詰り備かるやうにしてやるだけである。若し外國から安い物が澤山入つて來て、其の物の値

が安くなれば、其事業は起らうとしても起ることが出来ない。さう云ふ場合には、消費者に取つては氣の毒であるが、輸入税を課して其品物の價を高くする、高くすれば國內で作つたものが引合ふから其の事業が起つて来る。或は米に輸入税を課すると米が高くなる、さうすると日本の農夫が作つた米が高く賣れるから、米の生産が多くなる。是れが所謂保護政策である。然るに英國は此政策を取らないで自由貿易政策によつて、民間の活動を成る可く自由にさせる方針を取つて居たのである。

所が戦争が始まつてから後の經濟、即ち現在に於ける戦時經濟は、之と正反對に各交戦國は皆消費本位となつた。戦争は大なる消費であつて、儉約は出来ない。何でも彼でも敵に勝たなければならぬ、敵に勝つにはそれだけの物を使はなければならぬ。そこで消費を本位にして、生産及び流通は消費に順應して行かなくてはならぬと云ふ状態に變つて來た。それは誰がすると云ふのではなく、自然の大勢である。我が日本の如きは、交戦國の一員ではあるけれども、戦争しては居らぬ。青島を攻略した後は英國海軍と共同戦位のこと、大した戦争をして居らぬから、之が爲に國費が著しく膨脹して居るのではな

い。亞米利加は此の頃大兵を歐羅巴に送ると言つて居るから、さうなれば歐羅巴諸國の仲間入をするけれども、それまでは亞米利加も同様である。其の他の歐羅巴の交戦國は皆消費本位になつて居るのであるから、此の間に立つて生産本位の國が儲かるのは當り前である。先方は盛んに消費して居る、消費一方であるのに、此方は作る一方では無いから、富んで行くのは當然である。所で戦争の爲に失ふ所のものは、決して獨り經濟上の入費ばかりでなく、人を澤山使はなければならぬ。經濟上の損失は寧ろ小なるものである。人の損失は金錢に見積ることが出来ない、極めて貴重なるものである。經濟上の入費は金額に積つて言現はすことが出来る。今戦時状態の調査に於て最大の權威として知られて居る丁抹コーペンハーゲンの戦時事情調査局の最近の調査を掲げて見よう（米國『アナリスト』より取る）。

交戦諸國戦費一覽表 (單位百萬米弗)

自一九一四年 至一九一五年 (五箇月)	一九一五年 (一ヶ年)	一九一六年 (一ヶ年)	自一九一七年 至一九一七年 (七ヶ月)	自一九一七年 八月至一九一七年 八月(見)	自開戦時 四年間 總計
---------------------------	----------------	----------------	---------------------------	-----------------------------	-------------------

英	佛	露	伊	白	聯合	獨	獨	總
國	國	國	國	七、	國	逸	逸	計
國	國	國	國	ル、	合	計	計	計
國	國	國	國	葡	計	計	計	計
九〇〇	一、六〇〇	一、三〇〇	六〇〇	六〇〇	四、四〇〇	二、二〇〇	一、三〇〇	七、八〇〇
五、二五〇	四、六〇〇	四、四〇〇	六五〇	一、五〇〇	一六、四〇〇	五、四〇〇	四、四〇〇	二六、二〇〇
七、六〇〇	六、六〇〇	五、六〇〇	二、三〇〇	一、六五〇	二二、七五〇	六、八〇〇	五、一〇〇	三五、六五〇
七、〇〇〇	三、八〇〇	三、七〇〇	一、七〇〇	一、〇〇〇	一九、四〇〇	五、二〇〇	三、一〇〇	二七、七〇〇
一三、二五〇	七、二〇〇	六、五〇〇	二、八五〇	一、八五〇	四二、四五〇	九、九〇〇	五、八〇〇	五八、一五〇
三四、〇〇〇	二三、八〇〇	二一、五〇〇	七、五〇〇	六、六〇〇	一〇六、四〇〇	二九、五〇〇	一九、七〇〇	一五五、六〇〇

即ち大正七年七月までに、總計無慮千五百五十六億弗、即ち三千億圓計りかゝる勘定である。

英國に就て見るに、英國一ケ年の國民總所得高は二十四億磅、日本の二百四十億圓程であると云ふ。英國の富の總額はどれ位かと云ふと、是は國民所得、即ち國民が年々稼ぎ出す所の富の三倍乃至四倍に當ると云ふ計算が妥當なりと認められて居る。これは英吉利

だけでなく、獨逸でも佛蘭西でも大體同じである。其であるから國の富を悉く消費し盡しても、三年なり四年の間、元だけの所得を使はずに全部積んで置くことにすれば、又富の恢復が出来る。若し其の積む所の額を以前の所得の倍にすれば、一年半若くは二年で元の通りになる勘定である。

所が英吉利の失ふ所は上に掲げた政府支出の軍事費のみに止まらず、其の以外にも色々な損失がある。例へば平生は生産に従事して居た人が、生産から離れて戦争に従事して居る、それらの人の稼ぎ高も無くなつて居る、或は生産の爲に設けられた工場なり製造所なりが、軍需品を作る爲に使用せられて居る、此等のものも損失の中に加ふべきであると唱へて居る者があるが、それは誤りである。なぜかと言ふと、生産に従事して居た人が生産を止めて戦争の爲に働いて居ると言つても、此等の人に對してはやはり報酬を拂つて居る、其報酬は主に英吉利の政府が拂つて居るのである。而して此等の報酬なり、其他の品物の買入代なりが積り積つて右の額になつたのである。だから右金額の外に、生産に従事する人間が戦争に従事して居る爲に生産が出来ない、それも損失であると言

つて計算するのは誤りである。

そこで此の軍事費として使はれて居る金高の内容を別けて見ると、凡そ六つになる。其の第一は出征兵士の入費、其總人員數は別表の通りである。

出征兵數

英 國	七百五十萬人	米 國	二百萬人
佛 國	六百萬人	露 國	一千四百萬人
伊 國	二百五十萬人	白耳義、セルビア及葡萄牙	百萬人
聯合側合計	三千三百萬人	獨 逸	七百萬人
獨 逸	一千五十萬人	埃 甸 國	三百萬人
ブルガリア國	五十萬人	土 耳 其	三百萬人
獨 逸側合計	二千萬人		
總計	五千三百萬人		
而して死傷數左の如し			
死 亡 數			
英 國	三十萬七千五百人	佛 國	百二十八萬二千五百人

露 國	二百二十五萬人	伊 國	十五萬七千五百人
白 耳 義	七萬五千人	セルビア	十六萬五千人
ルーマニア	十萬人		
聯合側合計	四百三十三萬七千五百人	埃 甸 國	百七萬七千人
獨 逸	百三十二萬七千五百人	ブルガリア	三萬七千五百人
土 耳 其	二十二萬五千人		
獨 逸側合計	二百六十六萬七千人		
總計	七百四十五萬人		

負傷兵數

英 國	二十三萬一千人	佛 國	九十五萬一千人
露 國	百七十一萬九千人	伊 國	十一萬人
白 耳 義	四萬九千人	セルビア	六萬三千人
ルーマニア	六萬人		
聯合側合計	三百十八萬三千人	埃 甸 國	七十九萬九千人
獨 逸	九十五萬三千人	ブルガリア	二萬七千人
土 耳 其	十五萬七千人		

獨逸側合計百九十三萬六千人

合計 五百十一萬九千人

死者の總計が七百萬人、負傷兵數總計が五百十二萬人、合せて千二百十二萬人が人命に係る損害の總計である。

第二は軍需品の製造に従事して居る者の入費、是は軍需品の製造に従事しなければ、それだけは生産の方に働くから、それだけの損失になる。第三は戦争に使はれた所の鐵道、船舶、自動車、馬軍、馬匹の働き、此等のものは戦争の爲に使はれなければ、生産の方に使はれる所がそれが生産に使はれずして戦争の方に取去られたから、是亦一種の戦争の爲めの損失である。第四は戦争の爲に死亡し、或は負傷したりした人に關する人及物の働き、即ち死んだ人を埋葬するとか、負傷者を治療する爲に醫師、看護婦、或は事務員等も相當に要する。此等の人も戦争がなければ、何れも皆生産の方に働くことが出来た、其が戦争の爲に生産に従事することが出来なくなつたのである（死傷兵數は別表を見よ）。第五は生活費の騰貴戦争に行つたつて食べられるだけしか食べない。それは平生遊んで居る時

よりは食物の量が多く要するか知れぬが、さう餘分に食べるものではない。唯だ國內で食べる代りに、何百萬と云ふ兵隊が國外に出て居るから、其戰地へ送る運賃や、其の他の費用が高くなる。被服でもさうである。併し被服費とか食費とか云ふのが全部損になるのではない、若し全部損と云ふ勘定にすると間違ふ。戦争が無くとも食べもすれば着もする、故に平生より高くなつたゞけが損になつて居るのである。第六は其の他の戦争の爲めに特に新たに起つた所の費え、即ち材料の費えである。平時ならばレールを拵へる鐵で軍艦を造り、平時ならば工業に使ふ原料で彈藥を拵へる。是も全然損になるのである。さて是れだけの入費は誰れがどうして負擔するかと云ふと、各國の政府には之れを負擔するだけの力がない。政府は人民から其の所得の或る部分を、租税なり其の他種々の形で取つて使ふのであるから、詰り國民が負擔するのである。英國の戦費は英國國民が負擔し、獨逸の戦費は獨逸國民が負擔し、佛蘭西の戦費は佛蘭西國民が負擔するのである。其の課し方の如何に依

つて經濟上重大なる差異を生じて來る。先づ國民が負擔するには國民が現に有つて居る所の富を政府に納めるのが一つの方法である。それから戰爭中、戰爭に従事して居ない國民が、致々營々として働いて作り出した富の一部分を政府に納めることも負擔の一の方法である。此の二つは現在其處に在る所のもので、戰費の負擔をする方法である。個人にしても、例へば旅行をする、其旅費は旅行を始める前に自分の持て居た貯金を以て支辨するか、或は其の月に受くる俸給の一部分を以て之に充てるかと云ふやうなものであつて、共に現在の富を以て支辨する方法である。其の外に、現に今其處に在る富でもなく、又現に作り出しつゝある富でもない、將來出來る所の富を目當として負擔すると云ふやり方がある。國民から見ると、以上二種の方法があるのである。

政府の方から言ふと、此の負擔の分け方に三つある。其の一は戰爭前にあつた税よりも多くの税を課し、其の増收を以つて戰費を支辨するのである。其の二は借金をするのである。即ち公債を募集する、或は一時借入金をして、それを借換へ借換して行く是れである。借金にも二つある。一は償還期限の長い公債であつて、他は短期の一時借入金で

ある。短期の借入金は屢々行はれて居る、例へば露西亞が日本から軍需品を買つて、其代金が拂へないから露西亞の大藏省證券を日本に賣出した、是は詰り一時の借入金である。英吉利でも大藏省證券を賣出して居る、けれども戰時中は逆も返せないから、新規に又大藏省證券を賣出して其の金で返すと云ふやうなやり方を取る。其三は増税でもなければ借金でもなく、物價騰貴を以て支辨する方法である。物價騰貴と云ふのは、一面からと言つた言葉であつて、他面から言へば通貨の膨脹と云ふことである。

即ち政府の方から言へば此の三つの方法があるが、國全體として言へば現在の富、現在の稼ぎ高を以て支辨するか、若くは將來の稼ぎ高を以て支辨するか、の二つだけか途はないのである。所が此に就て間違つた解釋をして居る者が多い。政府の方から言つた所の増税を以て戰費を支辨する方法とは、國民から言ふと、現在の稼ぎ高なり、現在の富なりを以て支辨する方法と同じことである。それから將來を目當にして戰費を支辨すると云ふことは、公債なり一時借入金なりを以て政府が支辨するのと同じであると、斯う云ふ風に考へて居る人が少くない、それは違つて居る。さう云ふ風に解釋することは覺え

易くて洵に結構である。又一應の説明ならそれで宜い、大體はそれに相違ない。借金は今此處に在るものではなく、將來に於て拂はなければならぬ、又増税は今此處にある金でなければ、納税することが出来ないから、大體に於てそれに相違ない。而も普通の場合に就て言へば其の通りであるが、此の度の戦争に於いてはさうでないことが澤山ある。殊に此の點に於ては英吉利と獨逸とでは其真相が大變違つて居る。

現在の財源を以て戦費を支辨する第一の方法は、今此處に在る富を削つて戦争に使ふ。現在此處に在る鐵を以て軍艦を造り大砲を拵へて戰場に運ぶ、或は今處に在る所の材料を以て兵隊の服を作り、或は彈藥を作つて戦争に使ふと云ふのである。所が現在の富と云ふものは、英吉利にしても獨逸にしても佛蘭西にしても、さう多いものではない。前に云ふ通り年々の稼ぎ高の三倍若くは四倍しかない。だから少し大袈裟に使へば、此の財源は直ぐに盡きてしまふものである。けれども英吉利は國內に在る富の外に、國外に於て大變富を有つて居る。過去に於て輸出した所の資本が澤山ある。約四百億圓の富が外國に放資してあると云ふ、日本などとは大變に譯が違ふ。英吉利には國內の富の外に

國外にも澤山の富があるから、それも使ふことが出来る。それで先づ第一に其の國外に在る富の回收の出来るものは回收して戦費の資源に充てる。それが即ち亞米利加の證券の賣出し、所謂證券の動員である。兵員を徵發して動員する如くに、證券を動員して戦争の用に充てたのである。生産的に投下した所の資本を呼戻して之を戦争の費用に充てた。併しながら是は英吉利に取つて甚だ危険な方法であることは前に説明した通りである。英吉利の英吉利たる所以は、外國に澤山の資本を投下して、其の力を以て世界を抑へて居つたことにある。然るに戦争の爲めと言へ、之を回收して使つてしまふことになると、今度は新に貸付け様としても思ふやうに貸付けられない。現に亞米利加の如きは將來は英國から借りるまいから、他に適當な借手を求めなければならぬ。又其の貸付ける富も新規に作らなければならぬ。恰も蝟が自分の足を食つて生きて居るやうなものである。國外に少しも富の無い國より、國外に富があるから、之に手を付けやうと思へば付けられる、それが爲め大變優る所があると共に劣る所もある。其の劣る所以は、英吉利が商品輸出國から資本輸出國に變つた點に在る。資本輸出國になつたのは結構である

が結構過ぎて魔が差し始めたと云ふのと同様に、戦争に當つて非常に入費が掛る、此の入費はどうしても國民が負擔しなければならぬ幸ひ英吉利は平素富を作つて外國に貸してあるから、直ぐに自分の身を孤らないでも、外國に貸してある金で戦争が出来ると云ふのであるから、一面から言へば寔に結構なことであるが、他面から言ふと、さう云ふ當てがあるから、自然國民の努力が足りない。非常な消費をして居るのだから、餘程一生懸命になつて消費を補填する爲に努力を要する時であるにも拘はらず、どうも眞面目にならぬ。是は英吉利人の愛國心が獨逸人に對して劣る譯でもなければ、非常の時に非常の覺悟が英吉利人に缺けて居ると云ふ譯でもない。英吉利人は獨逸人程臥薪嘗膽をしなくとも済む。成程外國に貸してあるのを回收すれば、將來に亘つて利息が取れなくなると云ふ不利益はあるが、脊に腹は代へられぬ。外國に貸してある金を取りさへすれば、差向きの苦痛はない。戦争に行つて居る人の代りまで働いて、國民の生産能率を高め、其の餘計に稼ぎ出した富を政府に納めて、戦費に充て、貰ふと云ふ必要が少い。殊に獨逸に比べて非常に少い。であるから獨逸程眞剣にならない。如何に最眞目に見ても一生懸命

になり方が少い。戦争中でも無駄をして居る。幾ら國民勤儉野戦だとか、アスキスのお嬢さんの婚禮の祝に、三鞭を抜いたのが贅澤だなど言つて騒いでも、國民全體がまだ本當に眞面目になつてゐない。殊に上流社會は相變らず贅澤をやつてゐる。贅澤をするな、獨逸を見よ、佛蘭西を見よ、露西亞を見よなど言つて叫んだ所で、身に差迫つた必要がないから、本當に緊縮した氣分になれない。

此の點から言ふと、獨逸と英吉利とでは氣分が大變違つて居る。英吉利は段々と富が増して結構であつたが、餘り結構過ぎてダレ氣味になつて居つた。其の事は近頃となつて心ある英吉利人は氣が付いて心配して居つたけれども、多數の國民は何とも思つて居なかつた。然るにさて戦争となつて見ると、獨逸人は非常の覺悟をして居るに、英吉利人は餘りに眞面目になつて居らない。是は英吉利の國民性が悪いとか何とか言ふ人があるけれども、それは當らない。英吉利人も獨逸人も同じ状態になれば同じ氣分が起るに違ひない。或は獨逸は知識が發達して居るとか、或は科學教育が盛んだとか言ふ、其も無論關係はある。乍去之を必要とする大原因がなければ、やはり本氣になつて働き出しは

しないであるから國の進歩と云ふことは、唯だ富が増したから宜い。外國に澤山金が貸してあるからと云ふやうなことで極まるものではない。殊に英吉利の如きは、餘程大なる暗黒の半面のあると云ふことを證據立てたのである。

國民が餘計の富を以て戦費を負擔すると云ふことは、詰り戦争用の爲めに餘計に富を残すと云ふことである。餘計富を残すのには、餘計に稼ぐと云ふことゝ使ふことを少くすることゝある。消費と云ふことは、是までは大體人民の自由に委せて政府が之に干渉しなかつた。生産の方にばかり重きを置いて、消費の方は構はなかつたのが、今日ではさう行かなくなつた。富は餘計に残さなければ戦費を拂ふことが出来ない。此の非常なる戦費に應ずるが爲には、三杯の飯は二杯に減らし、十遍食べる所は五遍に減らし、國の富は餘計に剩して戦費に充てるやうにしなければならぬ。英吉利は國外に貸金を有つて居つたから、自分の身を非常に詰めなくとも宜かつたが、併しそれは永久にあるものではない。一度回収すればそれ切りであるから結局は生産を増加し、消費を節減して之に應ずるより外はない。

獨逸に於ても外國に貸付けてある金がある。それは英吉利程多くはないが、英佛に次いで獨逸は外國に金を貸付けて置いた。であるから獨逸も之を回収して使ふことが出来る。無論回収して使つたに相違ない。所がそれは敵國通商禁止で聯合國に取つちめられて居るから絶対に出来ないから、獨逸では外國に貸付けてある富は勘定に入れなかつた。今でも入れて居らない。外國に貸してある所の資本は、今日と雖も少しも手が付いて居らぬ。是は戦争の結果沒收されることになれば仕方がないが、沒收されない限りは依然としてある。所が英吉利の亞米利加にある債權は、大いに回収してしまつたから、四百億圓の貸金に大分手が付いた譯である（約百六十億圓と云ふ）。獨逸の對外債權は少しが少しも手が付いて居らぬ。兎に角獨逸は今や四面に敵を受け、弱い奧太利だの勃牙利を引連れて戦争をして居るのであるから、潰されてしまへば夫れまでゝあるが、潰されない限りは、外國に在る債權は戦後獨逸が使はうと思へば使ふことも出来る。又戦争中取れなかつた所の利子も、戦後には一時に入つて來るのである。恰度吾々が人に金を貸してあるが、どうしても返しても呉れない、今自分は金が要るから出来るなら返して貰ひ

たいが返して貰ふ見込がないので、據どころなく苦しい思ひをして遣り繰りして居るやうなものである。獨逸だとして決して自ら好んで外國にある富を使ふまいとして居る譯ではない。否、使へるならば使ひたい。けれども使へないと云ふのは、主として英吉利がさうして呉れたのである。英吉利が獨逸を苦しめる爲めにモラトリウムをやつた。最初のモラトリウムは、英吉利の金を擁護する爲にやつたのであるが、其の必要は直ぐに済んでしまつた。後のモラトリウムは敵國に對する一切の支拂を停止し、敵國人との通商を禁止し、獨逸の品物は決して賣買してはならぬと云ふことにした。さうして段々其範圍を擴張して、日本までも其仲間入をして、敵國との通商を禁止することにした。一方には英吉利の絶大なる海軍を以て獨逸の海岸を封鎖し、蟻も通さないと云ふ位にまで嚴重に見張つて居るので、獨逸は外國の債權を回収しやうと思つても、どうしようとしても何事も出来ない。倫敦の市場は無論獨逸の請求には應じない、紐育も同様、巴里も、ペトログラードも皆塞がつてしまつた。それは獨逸政府のものばかりではなく、獨逸人民に對しても同様であるから、銀行の預金も渡さなければ利益の配當も渡さない。又獨逸が有つ

て居る外國の證券を賣らうと思つても賣れない。例へば英吉利の會社の株券、社債券でも其の所有者が獨逸人であると云ふ時には、何處へ行つても買つて呉れない。故に回収したくとも回収することが出来ない。世界中何處の國も皆さう云ふ風であるから、獨逸は外國に在る所の富を戰爭に使ふことは全然出来ないのである。

そこで獨逸は國內の富に手を付けた。尤も此點は英吉利も佛蘭西も露西亞も共通である。併し國內の富の大部分と云ふものは、其の儘では戰爭に使へない。國內の富の一番多いのは土地及び土地に卸した資本である。土地を彈藥にすることは出来ない、土地を軍艦にする譯にも行かない。斯く土地を直ぐ戰爭に使ふことは出来ないが、土地に對する權利を處分すれば戰爭に使ふことが出来る。其の權利の處分は國內だけで處分したのでは使へないから外國人に賣らなければならぬ。所が例へば英吉利の土地を亞米利加人に賣り、其代りに食糧や軍器や彈藥や色々の軍需品を貰つて、之を戰爭で使つてしまつたとすると、亞米利加から貰つた物は皆無くなつて、國內の土地は亞米利加人のものになつてしまふと云ふことになるから、是は甚だ危険である。外國に在る財産を處分する

ことさへ宜しくない、況んや國內の財産を外國人の手に移して、其の代金を彈藥にして打つてしまふと云ふとは大變な損である。損であるが、是は英吉利には少しある。佛蘭西にもある。併しながら獨逸には其も出來ない。何となれば國を嚴重に封鎖されて、有價證券さへ賣れないのだから、土地の如きものは賣買が出來ない。であるから獨逸の富は少しも外國人の手に渡つて居ない、皆獨逸人のものである。唯獨逸人の間を轉々して居るだけである。同じ獨逸人の間を、AからBに行きBからCに移つて行くだけである。即ち現在の富を使ふと云ふことは、其處にあるものを使ふのではなくして、戦争に就て現に使ふ物を、國內で新規に拵へるか、或は外國にある物を買ふか、其より外に方法は無い。買ふと云つても、唯だ金高が當るだけで、其處に在る物を使ふのではない。英吉利國內の鐵なり羊毛なりを、直ぐに軍用に使ふこともあらうが、併しそれだけでは戦争は出來ない。新しくさう云ふ材料を作らなければならぬ。新しく作るのは、今現に在る富ではなく、是から新に作り出す富である。であるから、現在の富は外國から其品物を取るより外はない。外國から取る時には代を拂はなければならぬ、或は借金をしなければならぬ。英吉

利の戦費總額五十八億磅に當る品物は、何處から來るかと云ふと、國內からも出國外からも來て、戦場で消費されてしまふのである。現在國內に在る土地なり建物なり機械なりを外國人に賣つて、其の代りに品物を外國から取るか、或は代價を拂つて外國から品物を取るか、兎に角外國から品物を取寄せなければ之を戦争に使ふ事は來ない。それから現在の國內の財産を處分せず、代を拂はずに外國から品物を取ると云ふのは、借金をしなければならぬ。今は拂ふことが出來ないから他日拂ふと云ふ約束をして品物を輸入する、それが現在のものでなくして將來のものである。將來お返し申しますと言つて借りて置いて、それを彈丸にして打ち軍艦にして沈めてしまつたとすれば、それだけのものは必ず他日返さなければならぬ。

所が獨逸は、今回の戦争に於てさう云ふことも出來ない。自國の富を外國人に賣ることも出來なければ、自國から代を拂つて外國の物を買ふことも出來ない。所謂敵國通商禁止で、何にも外國から獨逸へ輸入することが出來ぬ。尤も和蘭を通つたり、或は伊太利の参戦前には伊太利を経若くは瑞西などを通つて多少漏れて這入つたが、其は少部分で、

大體に於て何も入らない。何も入らない爲に苦しいけれども其の代り國の富も外國へ出て行かない。獨逸も開戦の當初に於ては非常手段を以て金を回収し、又之を擁護することに努めたけれども、今日となつて見ると、獨逸の金貨を保護して居るのは英吉利の海軍である。獨逸は何もして居ないが、英吉利の海軍がすつかり網を張つて何も入らないやうに、又出さないやうにして居るから、金貨の流出することもない。

さう云ふ風に獨逸は一切の物が外國から入つて來ない爲に、あれだけの大戰を苦しめながらも自辨して居る。所が英吉利は骨を折つて色々なことをして金貨の流出を抑へて居るけれども、どうしても出て行く。獨逸の潜航艇が暴れ出してからは、外國からの輸入が大分困難になつたけれども、それでも尙盛んに外國から色々な物を輸入して戦争に使つたり、又は國民が其を食つたり飲んだりして居る。であるから金貨が流出する。亞米利加へ行く日本に來ると云ふ風である。

其から將來の財源、即ち借金をして外國から品物を買つて戦争に使ふと云ふ方法も、獨逸の方には全く出來ない。タツタ一遍亞米利加で借りたが、其れ以外には外國で借りた

事がない。國內では六回の公債を募つたが、それは皆獨逸國民が應じたのであつて外國人の應じたものはない。従つて其利息も國內に拂ふだけで國外には出て行かない。元金の償還にしても、政府が國內の人民から取立てた金を公債所有者に返すのであるから、國內を右から左にと轉々して居るだけである。之に反して英吉利は國內でも公債を募つたが、外國からも少しは借りて居る。一面には聯合國に貸出してもある、戦争が長く續けば續く程、外國に對する借金が殖えて、貸した方は減つて來る。さうなると英吉利は何もしないで、利息だけでも二十億圓の品物が入つて來た爲に輸入超過であつたが、今度は其の狀態が變つて借金が殖えたから、輸入超過をして居た日には國が立たなくなるかも知れない。即ち國民が生産をして稼いで輸出を多くせなければならぬ。今まで利息を當にして居つた國が稼がなければならぬと云ふ前とは全然變つた立場に立つことになる。即ち英吉利の國是を變へなければならぬやうになる。富が又以前のやうになれば宜いが、其まで暫くの間英吉利も若返らなければならぬ、大に若返つて此戦争中から努力しなければならぬのであるが、英吉利人はまだ努力が足らない。戦争の入費を支辨する

のでさへ、將來の富を當てにして、現在の稼ぎ高を以て戦費を支辨することが、甚だ少いと
言つて識者は憂へて居る。戦争と云ふ重大事件を目前に控へながら、尙且つ努力の十分
でないこと云ふことは、英吉利の將來に對して洵に憂慮すべき次第である。

獨逸は外國に對して借金が殖えて居る譯ではない、貸金も殖えないが借金も殖えない、
其の點は戦前と少しも變りがない。併し戦費は英吉利に劣らないほど使つて居る。但
し其の支辨は皆國內限りでやつて居る。或は國內に於ける稼ぎ高の大部分を、政府が取
上げて政府が使つて居るのである。だから今は苦しいが、戦後に於て外國へ取られるや
うなものがないから大いに樂である。今の戦争中政府が取つて使つて居るものは、戦後
は要らなくなる。尤も償金でも非常に澤山取られる事になれば格別、左もない限りは全
く要らなくなるから、これを生産に使ふことが出来る。さうなると生産が大に發達して、
戦争前であつてさへ獨逸人は英吉利人に比べて勤勉力行の人間であつた、金の利息も可
なり入つたが、それだけでは安心して居なかつた。大に國內の産業を興し勤勉努力して
居つた、そこへ戦争となつて外國から何も入つて來なくなつたから、食ふ物も食はず飲む

物も飲まないで、皆戦争の方に使はれて居る、是が一朝變つて安逸の習慣が付けば兎に角
さうならなければ戦争に使はれた力は生産に使はれ、産業を發達せしむることになる。
又戦時の覺悟が生産上の覺悟となつて、戦後も引續いて努力したならば非常な力となる
に違ひない。是れが英吉利と獨逸との著るしい相違の點である。

さて政府から見た戦費支辨の方法は、増税をするか借金をするか物價を騰貴させるか、
此の三種であるが増税をすると云ふことは、大體に於て現在の財源に據ることである。
即ち自己の富を税として政府に納める、或時の稼ぎ高を納めると云ふのであるから、其れ
は現在の財源であるけれども、増税は現在の財源のみであると思ふと又間違が起る。と
云ふのは税が非常に重くなつて、現に所有する所の富若くは現在の稼ぎ高では納め切れ
ない時には、仕方がないから借金しても納税の義務を果すと云ふことになる。是は愛國
心からでもあり、或は法律の制裁を受けるからでもあるが、兎に角借金をして税を納める
やうになる。是は政府から言へば増税の形であるが、國全體としてはやはり將來の財源
を當てにすると云ふことになるのである。

所が此の點に於ても獨逸と英吉利とでは餘程違つた所がある。獨逸の方は同じ借金であるけれども、國民相互の間の貸借である。だから是は獨逸全體として見る時には借金が殖えたのではない、現在の富が使はれて居るだけである。例へば百圓の税を納めなければならぬに、自分の稼ぎ高は五十圓しかないから、後の五十圓は納められない。仕方がないから人から五十圓借りて納めたとする、其人は五十圓の貸主、私は五十圓の借主になつて居るが、政府には税として百圓納めたことになる。所が其の五十圓を若し税として納めなければ、或は食べてしまふかも知れぬ、或は何かに使つてしまふかも知れぬ。又借りた所の五十圓は、若し私が借りに行かなければ、銀行に預けてあるかも知れぬ。さうすれば銀行では其の金を寝かしては置かないで、何かに利用するから、それが國家の設備になつたり、或は商業の資本になつたりして働いて居る。所が私が借りに行つた爲に、貸主は銀行から五十圓引出した。其が爲め今まで生産的に使はれて居つたものが、銀行から其人を通じ、私の手を通じて租税として政府に納めることになつたのであるが、それは國から見れば現在のもので、將來の財源ではない。生産に使はれて居つたものが、不生

産の戦費として使はれるだけであるから、將來を當てにしたものではない。獨逸國內にあつたものが、形を變へて使はれたに過ぎない。

所が英吉利のやうに、外國から借金が出來ると、其状態が變つて來る。例へば前と同じ様に、私が五十圓の金を人から借りたとしても、其人が其五十圓を銀行から引出す、銀行では其の金を國內の事業から回収するのでなく、外國の債權を回収するかも知れぬ。或は外國の借金を殖やすことになるかも知れぬ。外國の金を借りて來て使ふと云ふことになる、其は將來を當てにした財源である。さうすると同じく私が百圓の税を納めたにしても、五十圓は二つの違つた借金である。獨逸の方は國內の金を甲から乙に貸借するだけであるから、是は現在の財源である。英吉利の方で言へば、外國から借りた金であれば、何時か之を返さなければならぬ。だから増税を以て戦費を支辨すると云ふことは、將來を少しも當てにしないものであると言ふことは出來ぬ。獨逸の如きは現在の財源ばかりで將來のものはないが、他の國に於ては大體は現在の財源であるが、將來のものが少しも無いとは言はれない。

そこで戦争に使つたものは、後に残るものも幾らかあるが、大部分は無くなつてしまふ。後へ残つたものも、之を生産に使ふやうに變へやうとすると大分損が行く。戦費と云ふものは、全部無くなるものではないけれども、大部分は無くなる。之に就て借金が殖えたと殖えないとで、何う違ふかと云ふと、戦争中には變らぬ。戦争中は獨逸も英吉利も變りはないが、戦後に於ては其の關係が大變違つて来る。

獨逸は開戦以來、此健全なる増税に依て戦費を支辨すると云ふことは少しもしてない。戦争の爲に税は少しも増して居らぬ、皆借金で戦争して居る、獨逸の戦争は借金戦争である。六回の軍事公債の上り高を以て此の戦争をやつて居る。是は無論宜いことではなく不健全なるやり方である。併し借金の依ると云ふのは、悉く將來の財源を當にするのみ解釋してはならぬ。増税を以て戦争をすることが、必ずしも現在の財源を以て戦争をすると云ふことにならないと同様に、借金を以て戦争をすることも、大體に於ては無論將來の財源を當にして居るのではあるが、悉くさうであると云へない。獨逸が借金ばかりで戦争をして居ると云ふことは、將來の財源のみを當てにして、現在の財源には少しも

依らないと云ふのではない。此の區別は極めて大切なことである。予は我國民に向つて切に此の點を力説したいと思ふものである。

今回の戦争に於て、獨逸が募集した六回の軍事公債は、今まで日本で募集した所の公債或は英吉利等で今まで募集した公債とは全く流儀が違つて居つて、獨逸新發明の公債募集の方法によつたものである。最初英吉利の學者は大に之を罵り、最近まで罵つて居つたが、近頃になつては獨逸の眞似をして、獨逸の通りのことをやつて居る。是は段々公債募集が困難になつたから背に腹は替へられない。ツイ此の間まで獨逸は潰れる、あんなことをやつて居るから、財政上自滅するの外はないと言つて、非常に非難して居つた方法で、如何にも變挺なやり方であるが、其を眞似し出した。其方法は公債募集の方法として、財政學上から言へば逆も話になるやり方ではないが、何しろ外國との交通を全く斷たれて、あれだけの大戦争をやつて居るのであるから、財政學にばかり拘泥して居られぬ。財政學が重いか國が重いかと言へば、それは殆ど比較にならぬ。今までの有らゆる財政學の原理を蹴飛ばしたやり方をして、國家の急に應じなければならぬ。如何なる方法を

考へ出したかと云ふと、前後六回に亘つて非常に巨額の公債を募つたのであるから、そんなに金のある氣支はない。金は拵へれば幾らでもあるがそれは金貨ではない。金は山から掘出さなければ無いから金貨ではない、紙幣である。紙幣はゴロ／＼刷つて出せば幾らでも出来る、そこで紙幣をどし／＼刷つて出したから金はある。金はあるが金があるだけででは戦争は出来ない。能く言ふことだが、戦争するには一も金、二も金、三も金、金程入要のものはないと言ふ。けれども實は金が必要ではない。戦争に要するのは軍艦である大砲である彈藥である、又其他の軍需品は金があれば得られるから、それで金が要ると云ふのである。金があつても買ふことが出来なければ、少しも金の値打と云ふものはない。富士山に登山して雨風に閉じ込められた場合に、如何に澤山の金を持って居つても何の役にも立たない。食べるものゝ役にも立たなければ、着る物の役にも立たない、却つて邪魔になる位のものである。獨逸は恰度富士山頂に押込められたやうなもので、金があつても外國から買ふことが出来ぬのであるから、當り前ならば逆もあれだけの戦争は出来ない筈である、疾に降参しなければならぬ。所が不思議にも獨逸は聯合國に對抗

しつゝ富を拵へて居る。そんなに富が出来さうもないが拵へるより外には仕方がないから、どし／＼拵へて戦争の入費の支辨をして居る。即ち獨逸の公債は、將來の財源も當てにして居るが現在の財源でもやつて居る。であるから、借金を以て戦費を支辨するのは將來の財源を當にして居るものであると云ふ普通の財政學の書物に書いてある事は、今度の戦争には少しも當嵌まらぬことになつた。

獨逸政府が第一回第二回の軍事公債を募集した時には國民は其の資力を擧げて之に應じた。所が第三回目邊りになると、應募する力が無くなつて、殆ど不成立に終るべき状態であつた。應募したくも國民には金がない。それにも拘はらず不成立どころではなく、五回目も六回目も相當の應募があつた。どうして資力の無い國民をして公債に應ぜしめたかと云ふと、それは借金をさせて公債に應ぜしめたのである。政府が借金をするに就て、國民には資力が無いから借金をさせた。然らば其の貸人は誰れか、借人があれば貸人が無ければならぬ。外國からは借りられない。其貸人は誰れかと云ふと政府である、詰り貸人が借人になつて借人が又貸人になる。同じ人々の間で貸す方になつたり、借

りる方になつたりして居るのである。それなら何も貸したり借りたり、餘計な手数をせずとも宜いやうであるが、さうは行かない、貸したり借りたりするからこそあれだけの戦争が出来るのである。是は誰れが考へたのか知れぬが實に妙案である。人民をして借金をせしめると云ふのは、今其處には無いけれども、戦争をしつゝある間に、一方は盛に富を増させる方法である。人民をして消費を極く少くして生産を多くし、富を多く残させる方法として、訓令を出したり、説諭をしたりする位のことでは駄目だから、一方に利益を與へて借金をさせ、楽しんで首を縊らせて居るやうなものである。お前の所の豚を寄越せ、鶏を出せ、小麦を出せと言つて無理に奪つて行くと、國民は酷いことをする無慈悲な政府だと言つて怨む。そこで同じく取つて行くのではあるけれども、只でお前の物を取つて行くのぢやない、それだけお前の財産が殖えるのだからと言つて出させるから、喜んで出す譯でもなからうが、兎に角厭な顔をしないうで出す。出すと言つても現在其處に在る譯ではないから、一生懸命に拵へて出すと云ふことにする。其の日から急に心掛をして、向ふ鉢巻で小麦を作り豚を飼ひ、自分の食べるものは極度まで節して政府に運んでやる。

政府の方でも一時に要る譯ではないから、必要だけの分量が、水の流れのやうに毎日斷えず入つて來れば、其れで戦争が出来るのである。

それは何う云ふ方法でやつたかと云ふと、軍事公債を募集する時に、政府は銀行の動員郵便局の動員——をして、それでもまだ足りないので、小學校の教員まで動員して公債を募集した。それはどう云ふやうにしたかと云ふと、一々の人に就て、お前は愛國心があるなら第三回軍事公債に應募しろと言ふ。人民の方では、愛國心はあるから應募したいけれども、第一回第二回の公債に應じてしまつて何も無い。公債の利子も取つてなければ、貯金も無いから應募することが出来ないと言ふ。それでも何か財産があるだらう、一番宜いのは外國の證券だ、亞米利加の會社の株券でもあればそれを出せ、お前は地所を有つて居るだらう、家屋を持って居るだらうと言つて、有らゆる財産を提供させ、それも無いと尙追求する。一切の金目のものを出させて、それも無くなつたと云ふことになる、今度はそれなら第一回第二回の軍事公債を有つて居るだらう、それがあれば、其の軍事公債を抵當にして金を借りて、其の金で第三回の軍事公債に應募しろと言ふ。此の規則も戦争が

始まると直ぐに出したので、戦時貸付金庫條例と云ふものである。本部を伯林に、支部派出所出張所を各地に置いて、軍事公債を抵當に金を貸付ける。そこで例へば前に發行した軍事公債の額面千麻克のものを持つて行くと、八百麻克貸して呉れる。其も金で渡すのではなく、戦時貸付金庫證券 (Kriegsdarlehenskassenschein) と云ふもので渡す。そこで其の證券を持って公債の募集を取扱つて居る銀行に持て申込む態々持て行かないでも宜い、第一回なり第二回の軍事公債を戦時貸付金庫の支部なり出張所なりへ持て行つて、第三回の軍事公債に應ずると言ひさへすれば其の場で其の手續までもして呉れる。だから何にもなくても第三回、第四回の公債に應ずることが出来る。

さて千麻克の第一回軍事公債を以て八百麻克の戦時全庫證券を借り、第三回の軍事公債八百麻克に應募したとすると、結局千八百麻克の債権を得て、八百麻克の債務を負つたと云ふことになるのであるから、自分の財産としては差引元の千馬克だけで、少しも増減はない。又政府の方から見ても同様で、第三回軍事公債が成立したと言つても、新規に金が入つた譯ではない、唯形が變つたゞけである。どうせどんな工夫をしたつて第三回軍

事公債の成立しやう譯はない。其は戦時貸付金庫證券で拂込だからではない。獨逸帝國銀行の兌換券を持って來ても、或は金貨を以て拂込でも同じ事である。と云ふのは金貨を戦争に使ふのではなく、品物が要るのである。必要な品物が無ければ駄目だ、物さへあれば何で拂つても、借金で借金を拂つても、其物が戦争に使はれることは同じである。

それなら此の第三回軍事公債と云ふものは、どう云ふ意味があるかと云ふと、第一回軍事公債も、第二回第三回軍事公債も、其の償還期限は戦争のズツと後のことで、容易に返されるものでない。利息だけは拂つて呉れる。所で一方の八百麻克の戦時貸付金庫證券に對する利子を拂はなければならぬ。其の方の利子は公債の利子から幾らか安くなつて居る。例へば公債が四分とすると、貸付金庫證券の利子は三分六厘とする、幾分か利益がある。即ちそれだけの手数を掛けることに依て、愛國心を充すのみならず、四厘の利得がある。所が同じ取られるのであるが、無理に取上げられるのでなく、喜びつゝ取られると云ふのは此處のことである。公債の償還期限は何十年かの後であるのに、戦時金庫證券の方は直ぐに返さなければならぬ。返済期限が短くなつて居る。而もそれは濟し崩

しになつて居る。恰度日本の日済貨の眞似をしたやうなものである。それも態々給料を拂つた人を使つては大變だから、皆公務の傍ら、否寧ろ公務よりも其の方に多くの時間を費して居る。自分の飲み物、食べ物、減らしてまでも其金を納める。返す方も取立てる方も一生懸命である。此の返すと云ふに就ては、今自分に物がある譯ではないから、稼ぎ出すより外はない。返す必要がなければ、在るだけのものを飲んだり食つたり樂をしてしまふ。所が是非それを返さなければならぬと云ふので無理にも稼ぎ、又節し得られるだけは節して餘りを多くする。それが積り積つて戦争が出来るのである。第四回の方も第五回の方も、第六回の方も皆それを繰返したゞけである。唯だ第四回時には第三回の八百麻克になり、第五回時には第四回の四百麻克になると云ふやうに、次第に遞減して行くのであるが、返してしまふまでは其の人の責任は増す一方である。八百麻克だけの時には、日に三麻克づゝ返して行けば宜かつたのが、其の次には八麻克になり、十麻克になり、十二麻克になるのであるから、中々尋常では返されない。國民は何れも非常に苦しい思ひをして居るのである。

斯うして前後六回の公債を募つて戦費に充てたが、それは現に其處に在る富を借りたのではなく、詰り國民の將來の稼ぎを借りたのである。國民が戦時貸付金庫證券を借りた其の瞬間に、是からどんな苦勞をしても、一層働いて返さなければならぬと云ふ心を起させるのが公債の應募の目的であつて、其の結果が富を生じ、其生じた富によつて戦争を続けることが出来たのである。是は外國から買ふことも出来ず、借りることも出来ない獨逸であるから出来たので、他の國では出来ない。英吉利などでは眞似をしても、巧く其の眞似が出来ない。英人は前には獨逸の此のやり方を非常に嗤つて居つたが、近頃では獨逸のやり方を賞讃するものが殖へて來た。又實際に於ても、普通の公債の募集の方法では思ふやうに行かないので、銀行を利用して、此の公債の募りに應じろ、此の公債に應募するに都合が悪ければ銀行は便利に金を貸してやる。それは前の公債を持て來い、前の公債を以て來れば八掛で貸してやる、七掛で貸してやるから、其の金を以て今度の公債の募りに應じろと言つて頻りに公債を募集して居る。所がそれでもまだ足りないと言ふので、今度は戦時貯蓄證券と云ふものを發行した。是は全く獨逸の眞似をしたものだが、

獨逸の戰時貸付金庫證券のやうには巧く行かない。又銀行で融通すると云ふ位のことでは、國民から十分絞れない。公債を抵當にして金を借りる、或は戰時貯蓄證券を買ふと云ふことの裏には國民が食ふ物を節し飲む物を節して、成べく多く富を残して戰爭に使はうと云ふ意味があるのである。而してそれは現今の獨逸のやうに苦められて居るから出来るのであるが、英吉利人はまだそれ程緊張した気分になつて居ないから、逆も獨逸のやうに巧く行く筈はない、成功しなからうと思ふ。成功するには英吉利の國情が一變した後でなければならぬ。然るに此の戰爭の爲に少しも困つて居らぬどころでなく、成金がウヨウヨ出来、正貨が殖えて聊か持餘して居ると云ふ日本が、又其の眞似をして、戰時貯蓄證券法と云ふものを、この間の臨時議會に出した、直ぐに引込めたが兎に角出した。是は英吉利の直譯である。如何に翻譯政治が好いと言つても、非常特別の覺悟の時に行ふべきことを、それも直接に獨逸の方の翻譯なら、翻譯として少しは恕する所があるが、英吉利に一旦翻譯したものを重譯して行はうと云ふやうなことは以ての外である。急に國民に金が儲かつたから、これを無駄に使はずに、成るべく生産の方に使はせやうと云ふ

ならば獨逸の眞似ではいけない。若し獨逸が日本ならば、決して其様な眞似はしないであらう。

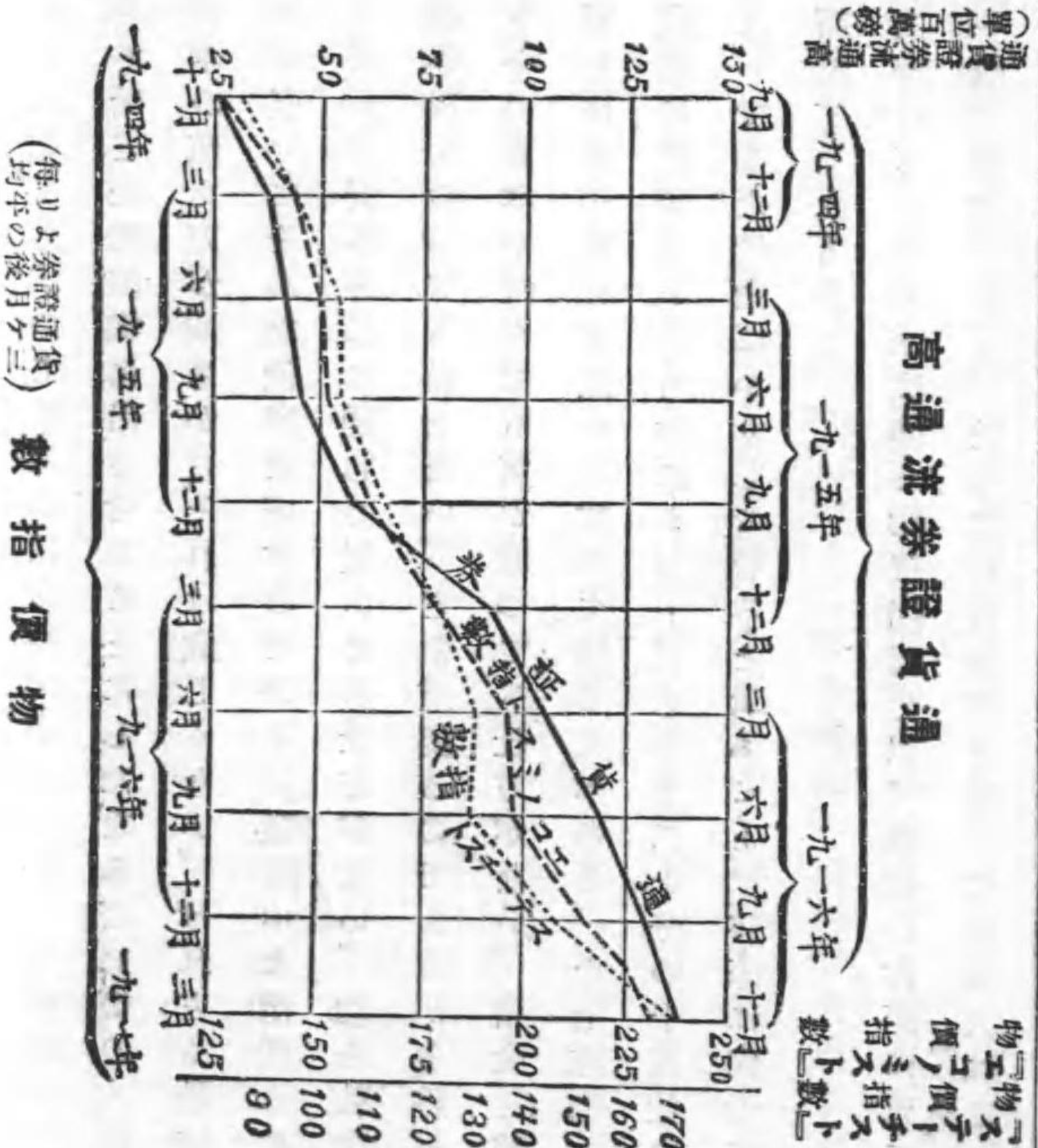
兎に角英吉利で眞似をしたと云ふのは、少くとも獨逸の成功を證明したものである。獨逸の成功と云ふのは、詰り形は將來の財源に依ると云ふ公債の形ではあるが、其の實はさうでない。國民をして儲けたものを貯蓄させると云ふどころでなく、殆ど無から有を生ぜしめると云ふ位にしたから成功したものである。であるから獨逸は戰爭の爲に損害を受け、弱つて居るには相違ないけれども、此の大戰爭に際して戰費の全部を國民の努力に依て支辨し、外國に對して借金を貽さず、又外國に在る貸金にも手を付けなかつたから、今後の戰爭に依て國が減びてしまへば格別、現在の程度で平和になつたならば、戦後獨逸の活動は頗る眼覺ましいであらう。之に反して聯合軍の方中にも露西亞の如きは、現在の財源も將來の財源も使つて居る、殊に將來の財源を非常に多く使つて居る。英吉利は獨逸のやうに戰爭の爲に全く増税をしないのではない、可なり増税をして居る。即ち所得税の稅率を引上げ、茶の輸入税を高くした。此の二つは、英吉利で收入の増

加を圖る時には第一に利用する税である、其他にもある。英吉利が戦争を始めてから大正六年十月二十七日までに使つた戦費の總額は五十七億九千七百九十三萬磅であつて、其の内現在の稼ぎ高で支辨したものが十三億八千五百萬磅で、残り四十四億一千二百萬磅は全部將來の財源引當即ち借金になつて居る。であるから英吉利でも心ある人は、是は政府のやり方が間違つて居る、出来るだけ現在の稼ぎ高で支辨するやうにしる、もつと税率を高めろ、生活に必要なだけを残して、それ以上は全部取つても宜い。下層社會の所得の少い者からは取る餘裕がないから、主として所得の多い金持から取るが宜い。其の割合は一磅に付て一磅取つても構はないが、事實さう云ふことも出来ないから、一磅に付て十七志、即ち二十分の十七までは取れる。無論それは平時には出ないが、國家非常の場合に於ては、餘剩のある者から多くの税を取ると云ふことは必ずしなければならぬと云つて居る。なぜ平時に於て一磅に付て十七志取ることが悪いかと言へば、金の有る人は即ち資本を作る人である。營々として物を作り出すのは國民全體であるが、之を使つてしまはな残して置いて、生産の用に充てるか充て

ないかと云ふことを掌つて居るのは金持である。其の金持が折角残して置いたものを、平時に於て殆ど全部國家に出させることにしたならば、此等の人の貯蓄心を妨げて、富の殖え方、資本の殖え方が減るから、それは宜しくない。けれども、戦時は別である、それに戦争が済めば直ぐにそんな税率は廢すのである。戦争中は消費本位で、どしどし使はなければならぬから、資本として残して置いて仕方がない。即ち戦争中は貯蓄心を害する程度の高い税を取つても差支ない。どの道要るのであるから、將來のものを當てにして使ふより、今の資本が減つても富が減つても仕方がない。借金を將來に貽すよりは、今有る所の富を使かつた方が宜いと言つて居る人がある。十七志、即ち二十分の十七と云ふことは實際に出来ないかも知れぬが、十五志、即ち二十分の十五位は確に取り得る。それを取らないで唯だ借金ばかりして居ると云ふことは、將來に向つて禍根を貽すものだと、言つて痛論する人もある。

戦費支辨の第三の方法は、即ち物價騰貴を以て戦費の財源に充てゝ居ると云ふことも、やはり一種の借金である。誰も之を借金だと言つて居る人はないが、結局借金である。

高 通 流 券 證 貨 通

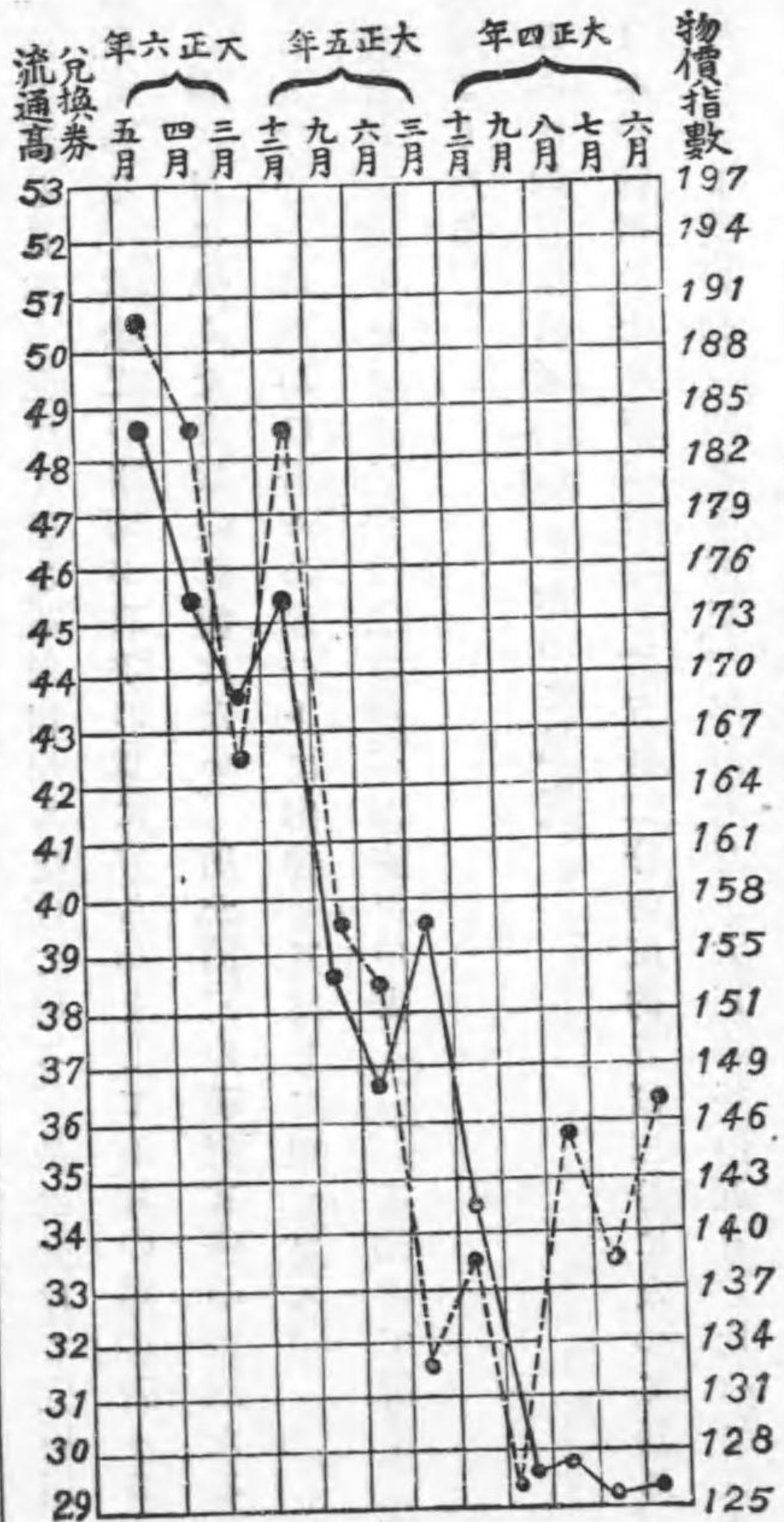


〔甲表〕 通貨証券の増發と物價の騰貴

是は英吉利もさうだし露西亞もさうだ。佛蘭西もさうだ。獨逸もさうだ。歐羅巴の交戦國は皆此の物價騰貴と云ふ一種の借金を以て戦費の財源の一部に充てゝ居る。さうして

〔乙表〕

點線 日本銀行兌換券流通高 (單位: 千萬圓、月末)
 黑線 日本銀行調査五十六品平均物價指數 (月末)



其の飛沫を日本も受けて居る、亞米利加も受けて居る。是は受けて宜い所もあるが、又悪い所もある。歐羅巴の諸國が戦争の爲に幾ら何をして、其の爲に吾々日本人の頭の上には、別に目に見えた直接の影響はない。所が第三の戦費支辨の方法たる物價騰貴と云ふことは善かれ悪かれ吾々の頭の上に影響を及ぼして來て居る。

英吉利に就てニコルソン先生の調べた表を甲表 六四 に掲げて置く（英國統計協會雜誌より取る）

日本に就ては乙表 六四 を作つて見た。

日本の物價の上り方は、平均して五割二分何厘約五割三分になつて居る。併し是はまだ軽い方で、英吉利の如きは、大正三年の七月と、大正六年の五月と比べて見ると、丁度倍になつて居る。獨逸もさう、亞米利加もさう、世界中物價は皆騰貴して居る。

此く物價が高くなつたのには、色々の原因があるに相違ない。即ち物が少くなつた爲に騰貴したのもあらう、日本の如きも外國の輸入が杜絶した爲に高くなつた物もあり、其の反對に外國に非常に賣行く爲に高くなつた物もある。けれども其は今回の物價騰

貴の原因としては寧ろ小なる方で、最も大なる原因は通貨の膨脹と云ふことである。日本で言へば、日本銀行の兌換券の流通高が殖えたことである。是は英吉利佛蘭西露西亞獨逸亞米利加何れも同様である。獨逸では戦時貸付金庫證券と獨逸帝國銀行兌換券とが大變に殖えて居る。是は兌換を停止して、金貨と引換へないから幾らでも出せる。英吉利は兌換制度を維持しては居るけれども、事實は兌換に非常な制限を加へて居る。さうして一方には兌換券でない所のものを拵へた。即ち流通證券（カーレンシー・ノーツ）を拵へて、通貨と同様の働きをさせて居る。それが爲めに通貨が大變に殖えて來た。

金貨本位の國の通貨としては、勿論金貨でなければならぬ。所が金貨は中央金庫に入れて出さないことにし、金貨の代用をする紙だけにした。所で金と云ふものは殖やしたいだけ勝手に殖えるものではない。山から掘出すか何處からか買つて來なければならぬのだから、容易に殖えない。又要らないときには決して殖えない。餘計なものがある